

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Archaeological Center

第 35 号 2021

論考

- 秋田県内における複式炉の規模と変遷について（1）…………森谷康平………1

弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通

大上立朗………31

湯沢市館堀城跡出土の在地瓷器系陶器……………小山美紀………48

資料紹介

大仙市星宮遺跡未報告資料の検討

—九年橋遺跡出土土器と類似する土器を中心に—…………小松和平………65

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Archaeological Center

シンボルマークは、北秋田市浦田白板(しろざか)遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晚期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Archaeological Center

第 35 号

2021

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Archaeological Center

序

秋田県埋蔵文化財センターは、県内で行われる公共事業に係る埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施し、調査記録である報告書を刊行することを主要な業務とする公的調査研究機関であります。発掘調査から報告書作成までの業務は、担当する職員の日常的な研究が不可欠であり、そうした基礎の上に成り立つと考えます。

本誌は、このような職員の研究成果や業務を遂行する上で有益と思われる資料を紹介し、職員および業務の質的向上をはかる目的で設けられました。

本号では、縄文時代中期中葉～後葉の複式炉の発展について考察した「秋田県内における複式炉の規模と変遷について（1）」、北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通を県内の出土例から検討した「弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通」、館堀城跡から出土した在地瓷器系陶器について再検討した「湯沢市館堀城跡出土の在地瓷器系陶器」、星宮遺跡出土の縄文時代晚期後葉の土器について報告した「大仙市星宮遺跡未報告資料の検討－九年橋遺跡出土土器と類似する土器を中心にして－」を掲載しております。

御一読の上、当センターの業務と担当職員の研究活動に、なお一層の御指導と御鞭撻をいただけますようお願ひいたします。

令和3年3月

秋田県埋蔵文化財センター

所長 磯 村 亨

秋田県埋蔵文化財センター
研究紀要 第35号

目 次

序

論考

秋田県内における複式炉の規模と変遷について（1）……森谷康平……1

弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通

大上立朗……31

湯沢市館堀城跡出土の在地瓷器系陶器……………小山美紀……48

資料紹介

大仙市星宮遺跡未報告資料の検討

—九年橋遺跡出土土器と類似する土器を中心に—……小松和平……65

〈論考〉秋田県内における複式炉の規模と変遷について（1）

森谷 康平*

はじめに

複式炉は、縄文時代中期後半の東日本、特に東北地方を中心に作られる屋内炉で、土器埋設部・石組部・前庭部の三部位から構成され、複数の機能を併せ持つ炉と考えられる。

縄文時代中期の秋田県は、大木式土器文化圏と円筒土器文化圏の特徴を併せ持つ稀有な地域である（第1図）。県北部米代川流域では円筒土器が発展し、中期末葉からは環状列石を始めとして礎を用いた施設が発達する。県央部雄物川下流域では御所野台地に縄文時代を通して大規模な集落が密集して営まれる。県南部雄物川中・上流域、鳥海山周辺では大木式土器が隆盛し、複式炉をはじめとした大木式土器文化圏に属する遺構や遺物が多く発見されている。

本研究は、秋田県内の複式炉を伴う堅穴建物を集成し、堅穴建物および炉の主軸長・短軸長・面積・炉形態から、時期や地域による変化や特徴を導出することを目的とする。併せて堅穴建物の総床面積に対して、炉の占める割合変化についても検討していく。堅穴建物における炉の床面占有率が生活における炉の重要性を示すと仮定し、居住空間に占める炉の規模の相対的变化を明らかにする。

対象とする時期は、祖型的複式炉が出現する中期中葉から、定型化した複式炉が減少し廃絶に至る後期初頭までとした。土器型式では大木8b～10式併行期となる。

本稿では、中期中葉～後葉について記載、考察し、中期後葉～後期初頭についての記載、考察および全体のまとめについては、次回述べることとした。

1 研究史

（1）複式炉の定義

複式炉の定義は諸説ある。梅宮茂は、福島県飯野白山住居跡について、土器を利用した火つぼと石で構成した炉が1セットとなっているものを複式炉と名付けた（梅宮 1960）。また、丹羽茂は、福島県の事例を基に複式炉を石組複式炉と土器埋設複式炉に区別することを提唱し、後者を「上原型複式炉」と呼称した（丹羽 1971）。

阿部昭典は、堅穴建物と複式炉の規模を用いた研究の中で、複式炉を「土器埋設部・石組部・前庭部のいずれか複数の要素を併せ持つ炉形態、もしくは複式炉の系統上で捉えられる炉形態」と定義した（阿部 1999）。その上で、集落遺跡の特色と居住形態の検討を目的として、対象とする地域を北陸から東北北部の4地域に分け、大木9～10式期までの堅穴建物および複式炉の長軸長と短軸長の計測と分析を行い、規模の変遷と地域性を検討した（阿部 2008）。

（2）炉の変遷

越田和夫は複式炉の成立過程を論じる中で、地床炉→埋甕炉→石間炉→石間+埋甕炉という変遷を辿ることが可能としている（越田 1972）。また、目黒吉明は、縄文時代の炉を対象に形態分類を行い、中期初頭から中葉までは地床炉・掘込炉・土器埋設炉・石組炉が普及し、後葉から複式炉が出現するとし、後期に至る

*秋田県埋蔵文化財センター文化財主事

とした（目黒 1982）。2005 年に開催された日本考古学協会シンポジウム福島大会では複式炉分布図各地で集成が行われ、越田、目黒と同様の傾向が報告されている（日本考古学協会 2005）。

菅原哲文は、山形県を対象として大木 8 b 式期から後期初頭にかけて、炉の変遷を考察している。8 b 式期後半は石囲炉から複式炉へと発展していく初源的な炉が現れる時期としており、続く 9 式期は石囲炉が大型化し、複式炉へと発展していく時期と位置づけている（菅原 2006）。

以上の通り、複式炉の変遷過程については、炉の形態分析から検討されることが多く、様々な研究者の報告から炉の変遷は概ね明らかにされたと言える。それらの形態分析を補強する意味で、客観的な計測データと傾向を探ることは有意義である。

2 分析対象

(1) 本稿における複式炉の定義と分析の前提

本稿では、先述の阿部の定義に則り、祖型的複式炉および後期初頭にみられる簡略化された複式炉を対象に含めて分析した。定義を広く取ることによって資料数を確保し、数量分析を行う。また、上原型及び複式炉以前、以後の炉も分析対象とすることで形態変化、規模の増減を検討する。

複式炉発展段階の大分類として、分析対象時期において、複式炉を構成する 3 要素のうち一つの要素で構成される石囲炉・土器埋設炉については、「複式炉前段階」と呼称する。また、主に大木 8 b ~ 9 式期に作られる石囲炉内部に埋設土器が伴う土器埋設石囲炉や、石囲炉に前庭部が伴うなど、石囲炉が炉の主体と考えられ、それに何らかの付属施設が伴うものを「祖型的複式炉」と呼ぶ。土器埋設部・石組部・前庭部で構成される典型的な複式炉は、「上原型複式炉」と呼称する。上原型複式炉を基本としながらも石組部底面の石組が簡略化、省略されており、前庭部が縮小されていたり、埋設土器が省略されていたりする炉は、上原型複式炉と区別し「複式炉」と記載する（第 4 図、第 5 図）。

複式炉各部の名称について、掘り込み底面に敷石が施されているものを石組部、石囲炉のように掘り込み縁辺のみに礫を配し、敷石が施されないものを石囲部と呼称し区別する。

地域性を検討するにあたり、県内を雄物川、米代川、八郎潟、鳥海山麓の 4 つの地域に区分した（第 1 図）。

(2) 分析の基準

本稿で分析対象とした堅穴建物または炉は、

- ① 中期中葉～後期初頭の堅穴建物で、かつ複式炉の系統上で捉えられる炉を持つもの
- ② 全体の 2/3 以上が検出・残存しているもの

と定めた。他遺構と重複して、堅穴建物または炉の全体形が明瞭でないものは残存値の計測のみを行い、分析対象からは除外した。

本稿では、複式炉は屋内にあるという視点に立ち、炉のみが検出された遺構で、報告書に屋外炉である旨の記載がない場合は炉のみの単独検出であっても屋内炉として扱い、堅穴建物の記録がない炉として分析対象に含めた。堅穴建物内に複数の炉を持つものや、炉の作り替えが認められるものは、それぞれの炉に時期差が認められても同一の堅穴建物に伴うものと判断しているため、堅穴建物の総数より炉の分析対象数は多くなっている。また、残存度・検出率が低い堅穴建物・炉については、面積を用いた分析対象からは除外した。

石囲炉が発展して複式炉へと至ると考えられるため(越田1972、目黒1982)、石囲炉も分析対象に含めた。堅穴建物の過半が未検出で、炉のみが検出されている場合は、炉の規模の計測を行い、堅穴建物床面積との比較分析の対象に含めなかった。また、地床炉など、埋設土器や石組みが認められない炉は、複式炉の系統上で捉えることが困難であるため対象から除外した。

第1図に分析対象とした遺跡の位置を示し、第2図には対象となる遺構の総数をグラフで現した。第6～13表には各遺跡の所在地、所属地域、遺構名、炉の発展段階などを記載した。

ロングハウス型住居については、一般的な居住空間としての堅穴建物を対象とするため、分析対象には含めなかった。

時期判断については、基本的には報告書の記載に則った。

(3) 分析対象の数と分布

分析対象となる堅穴建物・炉の集成は、新海和広(新海2005)の遺跡一覧表を参考に、2005年以後に報告されたものを追補した。全時期で124遺跡が該当し、堅穴建物は986棟、炉は1106基である。その中で、先に述べた分析基準を満たす578棟、946基を対象とした。

中期中葉(大木8b期)には、堅穴建物が13遺跡で66棟検出されている。炉の数は、堅穴建物の検出を伴わない炉を含め72基である。その中で残存度が高く、いずれの分析も行うことができた遺構は堅穴建物、炉それぞれ29遺構である。残存度の低い遺構が多く、分析対象となる遺構は多くなかった。最小の堅穴建物は鹿角市天戸森遺跡の第111号住居跡で、 $2.45m \times 2.32m$ である。最大のものは同じく天戸森遺跡の第42号住居跡で、 $12.99m \times 8.85m$ である。主柱穴の数は6本のものが過半数を占める。

対象遺構の分布として、米代川流域は、ほとんどが鹿角市天戸森遺跡もしくは能代市鳥野遺跡に属するものである。雄物川流域は、横手市神谷地遺跡、仙北市黒倉B遺跡で多く検出されている。八郎潟近辺では男鹿市大畠台遺跡で多く認められる。

中期後葉(大木9式期)には、堅穴建物が36遺跡から204棟、炉が212基検出されている。その中で残存度が高く、いずれの分析も行うことができた遺構は90遺構を数える。規模が不明な堅穴建物が多く、対象遺構のほぼ半数が測定不能であった。最小の堅穴建物は、能代市鳥野遺跡で検出された祖型的複式炉を伴うSI509A古堅穴建物で、 $2.31m \times 2.39m$ である。最大のものは、祖型的複式炉を持つ鹿角市天戸森遺跡の第45号住居跡で、 $10.88m \times 8.06m$ である。主柱穴が4本の堅穴建物が42棟と最も多く、次いで5本のものが34棟となっている。

3 分析方法

(1) 計測方法について

主軸長・短軸長・面積の計測には、Adobe AcrobatProDC、FoxitSoftware FoxitReaderなどのPDFリーダーを使用した。計測は、PDF化された各報告書をリーダーで読み込み、同ソフト内の面積計測機能や距離計測機能を用いて記録した。

(2) 計測箇所について

いわゆる上原型複式炉のような典型的なもののは土器埋設部・石組部・前庭部の中央を通る線を主軸とし、その長さを計測した(第3図)。また、主軸に直交し、かつ最大幅を持つ位置に短軸を設定し、その長さも計測した。石囲炉を伴う堅穴建物の場合は、炉の長辺に並行し、かつ炉の中心を通る線を主軸とし

て設定した。計測は前述したものと同様である。

堅穴建物の計測について、基本的には炉の主軸・短軸に沿った位置の上端を計測した。主軸が曖昧な土器埋設炉や石閉炉を伴う堅穴建物の場合は、最大幅を持つ位置で主軸を設定し、それと直交する位置に短軸を設定して計測を行った。

土器埋設炉の計測については、最大幅を持つ部分を主軸とし、それに直交する位置を短軸として計測した。

(3) 計測値の解釈について

堅穴建物および炉の規模、面積並びに、堅穴建物の床面積に対する炉の床面占有率を対象として、それぞれの計測値から平均値を導き、それを基に標準偏差を求めてグラフで示した（第6～12図）。

標準偏差は平均値のまわりにどの程度の変数が散布しているかその散布度を現すものとして用いられる（坂田 1985）。最小最大という値を現すものではなく、標準偏差が小さいほど数値の分散がない、一定した大きさの堅穴建物、炉が作られている可能性が高いと判断できる。計測箇所全てで標準偏差を求ることで、計測箇所毎に数値がどのような変遷を辿るかを検討する。

(4) 規模について

用語の混乱を避けるため、以下から主軸長・短軸長で示される範囲を「規模」と定義する。1mを単位とし、第13、14図で示すように、主軸長 2.40m × 短軸長 2.40m の堅穴建物の場合は、「3m × 3m」という区分に含める。

炉の規模に関しては、データの煩雑さを回避するため、主軸長を観察対象として 0.25m 刻みで分類し、まとめを検討した。主軸長に主眼を置いたのは、石閉炉から複式炉への変遷過程で次第に大型化していく傾向があり、それに伴って主軸長も延伸していくと考えられ、主軸長の変化を観察すれば、炉の形態変化に伴う規模の変化を概観することができるからである。また、粗型の複式炉、複式炉、上原型複式炉のように前庭部を伴う炉の場合、非燃焼部である前庭部も炉の構造体の一部とみなし、面積計測に含めている。

(5) 面積の算出方法について

堅穴建物の規模に関しては、総床面積を求めるため炉も含めて面積を計測し、周溝が存在しない場合は生活空間である床面（下端）を、周溝が存在する場合は周溝内側の上端をそれぞれ計測して面積を算出した。

搅乱などの理由で下端が欠損し、全体の 2/3 以下の検出に留まり、全体形が推定線で示されている場合は、その推定線に沿って計測し、分析には含めず計測値の収集のみ行った。ただし、柱穴と炉のみの検出で、推定線により規模が図示されているものに関しては、計測しなかった。

炉の床面占有率は、 $\text{炉面積} \div \text{堅穴建物床面積} \times 100\% (\%)$ で求めた。

各遺構の主軸長、短軸長、面積、占有率に関しての計測値は、第3～5表に記載した。

4 分析結果

(1) 堅穴建物主軸長の遷移（第6図、第18図、第3表）

主軸平均値は、8 b 式期では 5.32m となる。2.5～7m の規模まで均等に検出されており、7m を超える比較的大型の堅穴建物は 5 棟を数える。主軸長のばらつきが多いため標準偏差も ± 2.28 と大きく幅を持つ。9式期では 4.24m を測り、8 b 式期より 1m 程度短くなっている。標準偏差も ± 1.55 と減少し、3～6m

の堅穴建物が多い。

第18図に地域別平均値をグラフで示した。全体の平均値と同様に、各地域で9式期ほど縮小傾向にある。8 b式期では米代川、八郎潟地域で主軸長が5mを超える堅穴建物が多く用いられ、9式期になると米代川地域は4m台まで縮小するが、八郎潟地域は5m台を維持する。雄物川地域では8 b式期から主軸長の短い堅穴建物が多く、その傾向は9式期まで継続する。

(2) 堅穴建物短軸長の遷移（第7図、第19図、第3表）

8 b式期で分析対象となる堅穴建物は37棟となった。平均値は4.15mで、概ね計測値は3～5mである。特異な値を示すのは、天戸森遺跡の第42号住居跡のみで、標準偏差も±1.25と大きな差は認められない。

9式期で分析対象となる堅穴建物は110棟となった。平均値は4mで8 b式期とほぼ同様であり、標準偏差は拡大し、多少規模のばらつきが認められる。

第19図に地域別平均値を示した。平均値の遷移を確認できる地域は、雄物川、米代川、八郎潟地域に限られ、米代川地域、八郎潟地域では増加している。雄物川地域においてはわずかに減少しているものの、ほぼ変化はみられない。鳥海山麓地域では短軸長が主軸長を上回り、主軸方向に潰れた形状の堅穴建物が検出されている。

(3) 堅穴建物面積の遷移（第8図、第20図、第3表）

8 b式期で面積が計測できた堅穴建物は33棟である。平均値は19.4m²だが、標準偏差は±16.9と極めて高い値を示す。

9式期で計測可能だった堅穴建物は105棟である。平均値は14.8m²で、8 b式期と比較して大きく減少しており、小規模な堅穴建物が増加したことが窺える。標準偏差は±12.0と高い数値を示している。

第20図に地域別の平均面積を示した。八郎潟地域では8 b～9式期の変化は少ない。雄物川地域は15m²から12.4m²へと縮小し、米代川地域も20.3m²から16.6m²と縮小傾向にある。鳥海山麓地域は、分析対象が9式期のみに限られ、雄物川地域と近い12.9m²となっている。八郎潟地域は、雄物川、米代川地域と同様に縮小傾向にあるが、両地域よりも減少値が少ない。

(4) 堅穴建物の規模（第13図）

第13図に各規模の検出棟数を示した。8 b式期は直径3～7mの小・中規模な堅穴建物が比較的均等に検出されており、規模毎の集中はみられない。直径8～13mの大規模な堅穴建物は、1～3棟に留まっており、ロングハウス型住居などの例外を除いては少ない傾向にある。地域による傾向は観察できない。

9式期は、8 b式期とは様相が異なり、直径3～7mにまとまりがみられるものの、直径4mに収まる堅穴建物が突出して多く検出されている。

(5) 炉主軸長の遷移（第9図、第21図、第5表）

8 b式期の平均値は1.05mを示し、±0.65の振れ幅を持つ。複式炉前段階と祖型の複式炉が併存する時期のため、標準偏差の値が大きい。9式期になると、標準偏差に大きな変化がない一方で平均値は増加している。

炉の主軸長を地域別に見ると、雄物川、米代川地域は8 b～9式期にかけて延伸し、両地域の数値は近似している（第21図）。八郎潟地域も9式期でわずかに延伸するものの、大きな変化はない。

(6) 炉短軸長の遷移（第10図、第22図、第5表）

平均値は0.77mから1.02mに増加しており、主軸長の傾向と似る。8 b式期の標準偏差は±0.32と小

さな値を示しているのに対し、9式期は±0.58と大きく、分散傾向にある。

地域別に見ても各地域で増加傾向にある（第22図）。9式期には概ね1mが多く、鳥海山麓地域のみ0.68mと小さな数値を示す。鳥海山麓地域は、主軸長も他地域と比べ短いため、小型のものが多い傾向にある。八郎潟地域では主軸長がほぼ変化しない一方で、短軸長の増加が著しい。

（7）炉面積の遷移（第11図、第23図、第5表）

面積に関しても、主軸長、短軸長と同様の傾向がみられる。8b式期の標準偏差は、平均値の0.75m²を上回る±0.82で、面積の分散が激しい。9式期も平均値1.23m²に近似値の±1.14を示し、両時期ともに炉の面積にばらつきがみられる。

8b～9式期の雄物川、米代川地域では、面積が大幅に増加する（第23図）。米代川地域では、9式期になると8b式期の概ね倍の数値を示し、炉の大型化が顕著となる。雄物川地域が前時期比44%増なのに対し、米代川地域は101%と大幅な増加がみられる。八郎潟地域もわずかに増加しているが、雄物川、米代川両地域と比較すると増加率は低く、23%の増加に留まる。

（8）炉の主軸長分布（第14図、第17図）

8b式期の炉は72基検出され、その中で分析対象となる炉は66基である。凡そ1m前後にまとまりがみられる。1m以下で中心となる炉形態は方形または楕円形の石囲炉だが、1～1.5mでは石囲炉に加えて、祖型的複式炉と考えられる土器埋設石囲炉や石囲炉に前庭部が伴うもの、石囲の一部が開口したU字状石囲炉などがある。1.5m以上のものは全て祖型的複式炉で、8b～9式期で複式炉前段階の炉が一定数作られていたことがわかる。これらのことから、秋田県の中期中葉は、石囲炉を屋内炉の主体としつつ、複式炉へと至る祖型的複式炉が作られ始める時期と判断することができる。

9式期における分析対象炉は177基で、大半が複式炉である。石囲炉や土器埋設炉は少數ながら存在し、1m以下の範囲に収まる傾向にある。8b式期と比べ、主体となる炉が複式炉へと変化したため、大型化が進み、1.26～1.50mに検出数のピークが現れる。当期にみられる複式炉の形態で、最も多く見られる構造は、土器埋設部+石囲部+前庭部で構成される複式炉である。分析対象の過半数を占める110基が複式炉であり、そのうち掘り込み底面まで礫が組まれる石組部を持つ上原型複式炉は19基しか認められない。前庭部が掘り込みのみの祖型的複式炉や土器埋設部の土器周辺に礫を配置しない複式炉など、比較的簡素なものが多い。

大木10式期が複式炉の最盛期だとすれば、9式期は最盛期へ向かう過渡期と考えられ、簡素な複式炉が多いことも定型化へと至る前段階だと捉えることができよう。

（9）炉の床面占有率の遷移（第12図、第15図、第1、2、4表）

総床面積と炉の占有率を観察できる堅穴建物は、8b式期が29棟、9式期が90棟である。第15図は住居床面積における炉の占有率を示したものである。

8b式期の占有率は、4.6%の平均値を示し、堅穴建物床面積の約1/20を占める。2%台が最も多く、内訳は石囲炉が7基、土器埋設石囲炉が2基となっている。次いで3%台となり、1基がU字状石囲を持つ祖型的複式炉で、それ以外の5基は石囲炉である。4%以上のものは、祖型的複式炉と考えられる土器埋設石囲炉や石囲炉に前庭部を伴うものが多くなる。また、標準偏差は±3.99と高い。この時期は、石囲炉が主体となり、規模の大きい祖型的複式炉が出現し、複式炉に至る過程で住居床面積に占める炉の割合は増加傾向にあることが窺える。

9式期の占有率平均値は、9.2%まで増加し、8 b式期の倍値になる。また、標準偏差は、±4.34まで増加している。平均値は11%台が最も多く、前時期と同様に2%付近で一度大きなピークが現れる。これらは、ほとんどが石囲炉で、9式期においても齊一的に複式炉へと移り変わるわけではなく、複式炉前段階の石囲炉も継続して使用されていることを示している。4%以上の占有率を持つ炉は、全て複式炉で、大規模な炉が増加し、堅穴建物内における炉の存在感が増している様子が窺える。概ね6～12%に占有率の中心があり、9式期は、堅穴建物床面の約10%程度の大きさの炉を作る傾向にある。第16図からわかるように、形態は複式炉でもその規模にはばらつきがあり、炉の発達は窺えるものの、各発展段階の炉が分散して検出されているため、まとまりはみられない。

5 考察

分析から得た結果を基に、各時期の様相を考察していく。

(1) 各期の概略

8 b式期において、堅穴建物の規模、面積、占有率いずれにおいても標準偏差は大きく幅があり、計測数値にもばらつきがみられる。

9式期になると堅穴建物の規模は縮小し、標準偏差も減少傾向にあることから、ある程度の定型化が確認できる。この要因のひとつとして挙げられるのが複式炉の定着化であろう。先述したように、複式炉は、秋田県内において8 b式期から出現し、他地域でも同様の傾向を示す。石囲炉を始めとした複式炉前段階の炉と祖型的複式炉が併行して検出され始め、9式期には分布の中心が複式炉へと変化する。

第16図には、炉の発展段階の割合を時期ごとに示した。この図から8 b式期は複式炉前段階と祖型的複式炉がほぼ半数ずつ検出されていることがわかる。炉主軸長を観察すると、長さ1m以下では複式炉前段階の炉が主体となっている。一方で、1m以上の炉は、祖型的複式炉が主体となっており、1m前後が複式炉と複式炉前段階の境界となっている可能性が高い。これらのことから、複式炉前段階から複式炉への変遷過程で、炉が主軸方向に延伸していくことがわかる。この傾向は、9式期でも同様で、複式炉前段階の炉はそのほとんどが1m以下の主軸長を示す。第17図は、複式炉発展段階毎に炉の主軸長の平均値と標準偏差を示した図である。この図では複式炉前段階から上原型複式炉へと平均値の増加傾向が観察できる。一方、標準偏差は減少傾向を示し、主軸長の延伸に伴って規模の平均化が進み、定型化していく。

(2) 中期中葉（大木8 b式期）

直径3～7m程度の小・中規模の堅穴建物が多く検出されている。規模に規則性は認められない。平均床面積は、19.75 m²である。中期中葉～後期初頭までの各時期の平均面積の中では最大の値を示す。直径8m以上の大規模な堅穴建物は、ロングハウス型住居を除いてはほとんどみられない。

石囲炉が主として利用され、土器埋設石囲炉や石囲炉に前庭部（掘り込み）を伴うなどの複式炉前段階や祖型的複式炉が利用され始める（第16図）。前庭部の発達によって炉の規模は大型化し、石囲炉と比べ堅穴建物内の床面占有率は増大していく。堅穴建物の床面積は他時期より大きい一方、炉は比較的小型の石囲炉が主体となるため、炉の床面占有率は低い。

以上のことから、秋田県における中期中葉は、比較的大型な堅穴建物に複式炉前段階、祖型的複式炉を伴う場合が多く、続く複式炉の発展期へと至る出現期と捉えることができる。

(3) 中期後葉（大木9式期）

後葉になると竪穴建物の検出数が大幅に増加する。特に、直径4m規模の竪穴建物が多く検出され、規模の縮小と平均化が観察できた。平均化が進んだことで、その他の竪穴建物の規模は4m±2mに収斂する傾向にあり、結果的に竪穴建物の平均面積は中葉よりも減少している。

炉は複式炉が主体となる。中葉で祖型的複式炉が一定数検出されていたのに対して、当期ではより発展した複式炉の検出が増加し、炉の定着・大型化を窺うことができる。埋設土器周辺に石組みを施さなかつたり、床面に敷石を施さない複式炉が約半数程度見られ、簡素な作りの複式炉が多い（第16図）。この傾向は隣接する岩手県北上川流域でも報告されており、上原型複式炉の敷石や埋設土器の構成要素が一部欠落した複式炉が主体となっている（駒木野2005）。

複式炉が増加したことによる若干の定型化は認められるが、形態が統一されているとは言えず、多種多様な複式炉が観察できるのも当期秋田県の特徴である。

竪穴建物の面積は、縮小傾向にある。一方で炉の面積は増加しており、床面積における炉の占有率は対象時期内に最高値を示す。複式炉が定着・大型化した結果、竪穴建物の規模が4mへ平均化されていったと考えられる。

以上のことから、秋田県における中期後葉は、複式炉の定着・大型化が進み、それに伴って竪穴建物の縮小と平均化が進む定着期と位置付けることができよう。

（4）地城毎の傾向

①竪穴建物について

第18～20図に竪穴建物の主軸長、短軸長および面積の地域別の遷移を示した。8b～9式期にかけての遷移を読み取るのは、雄物川、米代川、八郎潟地域に限られ、主軸長は縮小し、雄物川地域を除いて短軸長が拡大する。主軸長の縮小に対して短軸長の拡大がわずかであることから、全体の傾向と同様に、面積は減少傾向にある。面積は地域毎に差があり、9式期の雄物川、米代川、八郎潟地域の順に平均値は高くなる。

竪穴建物の縮小、拡大幅は、地域毎に特色がある。雄物川地域においては、主軸長の縮小が認められ、短軸長には変化がみられない。8b式期では、主軸方向に長い梢円形を呈するものが多く、9式期になると主軸長、短軸長に差がない円形を呈するようになる。米代川、八郎潟地域においては、継続して主軸方向に長い梢円形の竪穴建物が利用されるという傾向が読み取れる。9式期のみ検出されている鳥海山麓地域は、主軸長、短軸長の差が少ない円形を呈し、雄物川地域の傾向と似る。八郎潟地域以北を県北、雄物川下流域より南を県南として概観すれば、県北部では梢円形を呈する竪穴建物が8b式期から継続して利用され、県南部では8b式期では県北部と同様の梢円形を呈する建物形態が主体だったが、9式期から円形に近い竪穴建物が多く利用されるようになると考えられる。

②炉について

炉の主軸長、短軸長、面積の平均値は、第21～23図に示したように、8b式期よりも9式期でいずれの数値も拡大傾向にある。8b式期は、雄物川地域と八郎潟地域で比較的大型の炉が利用され、全ての平均値で米代川地域の数値を上回っている。しかし、9式期に至るとその傾向は逆転し、米代川地域に比較的大型の炉が多く検出されるようになる。平均面積で見れば、雄物川地域は8b式期から44%の拡大、米代川地域では101%の拡大をみせる。

第24、25図に地域毎の炉形態割合を示した。米代川地域より雄物川地域に祖型的複式炉が多く検出されていることがわかる。雄物川地域では他地域に先んじて上原型複式炉がみられ、米代川地域よりも早い段

階で複式炉が定着化した可能性が高い。雄物川地域で定着化が先行したため、8 b 式期時点では祖型的複式炉、上原型複式炉といった複式炉前段階よりも規模の大きい炉が多く検出され、先述した米代川地域の炉に対する規模の大きさに繋がったと考えられる。9 式期に至ると炉形態の割合は地域性を高め、米代川地域では祖型的複式炉が過半数を占め、複式炉前段階の割合は前時期の 63% から 18% まで減少する。炉の主体が複式炉前段階から祖型的複式炉に変化したことで炉の規模は大幅に拡大する。雄物川地域では前時期で大半を占めていた複式炉前段階、祖型的複式炉が減少し、複式炉・上原型複式炉が大幅に増加する。炉の主体は祖型的複式炉から複式炉へと移るが、米代川地域と比較すると規模の拡大は緩やかである。特に短軸長にこの傾向が顕著である。炉の床面占有率を比較すると、雄物川地域が 9.6%、米代川地域が 8.6% を示す（第 26 図）。両地域共に堅穴建物は縮小しているが、米代川地域の堅穴建物は比較的大型で、炉の主体が祖型的複式炉のため占有率が低く、一方で雄物川地域では堅穴建物が縮小したことと併せて炉の主体が複式炉へと移ったため占有率が高くなる。

八郎潟地域は、雄物川、米代川地域と同様の傾向を示し、各計測部位で平均値が上昇している。特に短軸長の延伸が著しく、主軸長と近い値を示す。八郎潟地域は分析対象遺構数が 2 基のみで詳細な分析は行えないが、対象遺構が増加する末葉の分析の際に併せて検討する。

鳥海山麓地域の炉は全て、にかほ市上熊ノ沢遺跡から検出されたものである。炉形態の割合は雄物川地域と似るが、上原型複式炉の検出が著しい。

複式炉の分布について、目黒吉明は「形態的に整った発達を示し、かつ普遍的に普及したのは福島県・山形県であり、同地域が中心地であったといえる」と述べている（目黒 1982：156 頁 16 ~ 17 行）。

福島県、山形県が複式炉の分布の中心であるならば、形の整った上原型複式炉が山形県と秋田県の県境に隣接する鳥海山麓地域で割合多く検出され、雄物川地域で 8 b 式期から検出されているのは、複式炉が東北南部から伝播していく可能性を考える上で示唆的である。

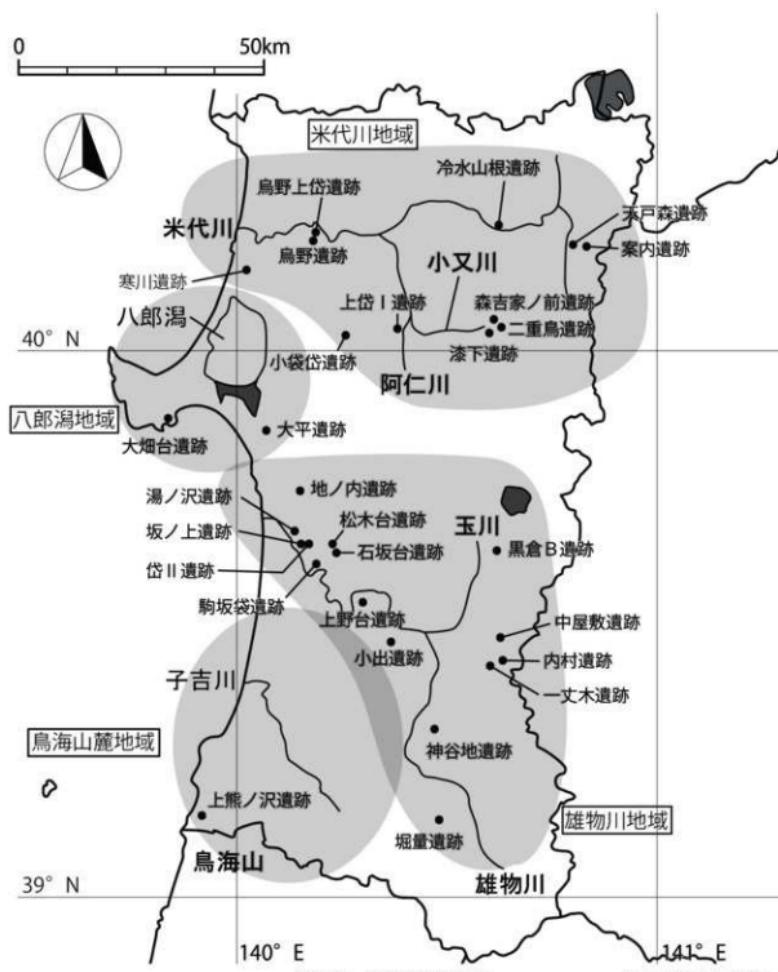
おわりに

本稿では中期中葉～後葉までの炉の発展の様子と傾向を述べた。中期末葉～後期初頭にかけての分析結果と考察については、次の機会に、対象時期全体を通しての計測値からわかる傾向も含めて報告する予定である。紙面の都合上二分割となり中途半端な感は否めないが、ご容赦頂きたい。

引用・参考文献

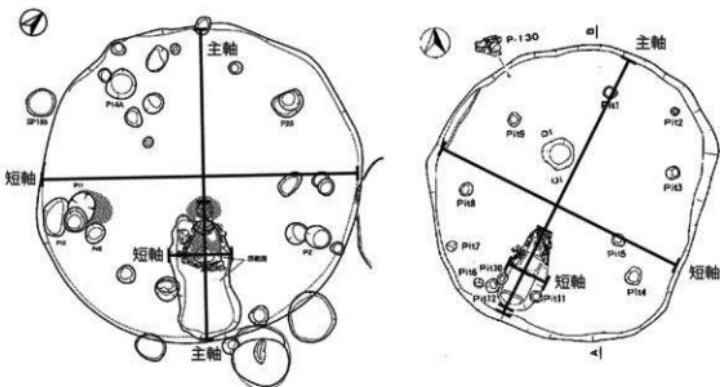
- 秋田県教育委員会 1981『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 82 集
- 秋田県教育委員会 1981『藤木遺跡、内村遺跡、桐木田遺跡、杉沢台遺跡、竹生遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第 80 集
- 秋田県教育委員会 1982『秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書 滝ノ沢 I 遺跡 滝ノ沢 II 遺跡 駒坂袋 I 遺跡 駒坂袋 II 遺跡』秋田県文化財調査報告書第 92 集
- 秋田県教育委員会 1984『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書 案内 III・IV・V・VI 道路』秋田県文化財調査報告書第 115 集
- 秋田県教育委員会 1984『東北縱貫自動車道発掘調査報告書 XI 篠右エ門館遺跡・案内 I 遺跡・妻の神 II 遺跡・下乳牛遺跡・西町 I 遺跡・西町 II 遺跡』秋田県文化財調査報告書第 119 集
- 秋田県教育委員会 1985『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 125 集
- 秋田県教育委員会 1986『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 I 石坂第 IV 遺跡・石坂台 VI 遺跡・石坂台 VII 遺跡・石坂台 VIII 遺跡・

- 石坂台IX遺跡・松木台III遺跡』秋田県文化財調査報告書第150集
- 秋田県教育委員会 1988『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－寒川I遺跡・寒川II遺跡－』秋田県文化財調査報告書第167集
- 秋田県教育委員会 1989『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III 上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡』秋田県文化財調査報告書第180集
- 秋田県教育委員会 1989『上岱I遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書184集
- 秋田県教育委員会 1991『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書IV－小出I遺跡・小出II遺跡・小出III遺跡・小出IV遺跡－』秋田県文化財調査報告書第206集
- 秋田県教育委員会 1991『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－上熊ノ沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第213集
- 秋田県教育委員会 1999『小袋岱遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書285集
- 秋田県教育委員会 2001『松木台III遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書326集
- 秋田県教育委員会 2001『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X－』秋田県文化財調査報告書第329集
- 秋田県教育委員会 2006『鳥野上岱遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－』秋田県文化財調査報告書第406集
- 秋田県教育委員会 2006『森吉家ノ前A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII－』秋田県文化財調査報告書第409集
- 秋田県教育委員会 2011『漆下遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXIII－』秋田県文化財調査報告書第464集
- 秋田市教育委員会 1983『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤G遺跡 野堤遺跡 湯ノ沢B遺跡』
- 秋田市教育委員会 1984『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 板ノ上E遺跡 湯ノ沢A遺跡 湯ノ沢C遺跡 湯ノ沢E遺跡 湯ノ沢F遺跡 湯ノ沢H遺跡 野形遺跡』
- 阿部昭典 1999「複式炉の研究－複式炉の成立について－」『新潟考古学談話会報』第20号
- 阿部昭典 2008『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
- 梅宮茂 1960「飯野白山住居跡報告」『福島県文化財調査報告書』第8集 福島県教育委員会
- 鹿角市教育委員会 1984『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26
- 越田和夫 1972『縄文時代中期における住居跡(炉跡)について』『福島大学考古学研究紀要第2冊』
- 駒木野智弘 2005「複式炉の地域的諸相 岩手」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム資料集』65-80頁
- 坂田邦洋 1985『考古学統計法』広雅堂書店 20頁
- 新海和広 2005「秋田県における複式炉の様相」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム資料集』81-95頁
- 菅原哲文 2006「山形県における複式炉の様相」『研究紀要』第4号 山形県埋蔵文化財センター 1-19頁
- 田沢町教育委員会 1986『黒倉B遺跡 第2次発掘調査報告』
- 日本鉱業株式会社船川製油所 1979『大烟台遺跡発掘調査報告書』
- 日本考古学会 2009『日本考古学協会 2009年度山形大会研究発表資料集』
- 丹羽茂 1971「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』第12号
- 目黒吉昭 1982「住居の炉」『縄文文化の研究』8 雄山閣出版 147-165頁
- ※この他第6～13表に記載の遺跡発掘調査報告書を参考にしたが、紙面の関係上削愛させて頂いた。後半(2)に併せて記載する。

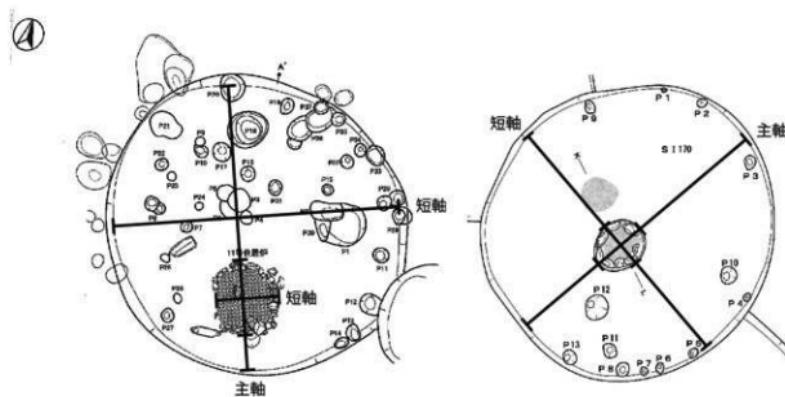


第1図 対象遺跡位置図





複式炉を伴う竪穴建物の場合



石圓炉を伴う竪穴建物の場合

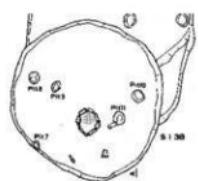


土器埋設炉の場合

※縮尺不同

第3図 計測箇所凡例図

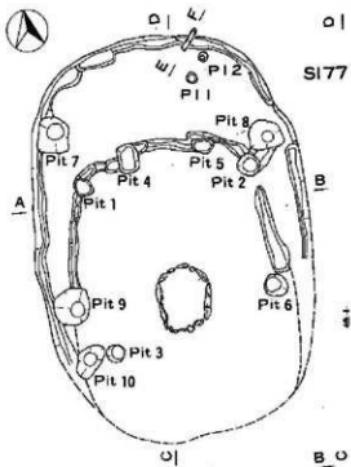
複式炉前段階



第38号住居跡（天戸森遺跡）

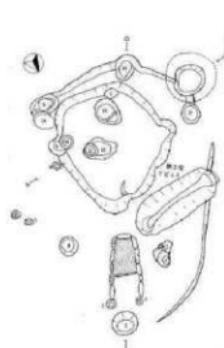


21号住居B炉（一丈木遺跡）

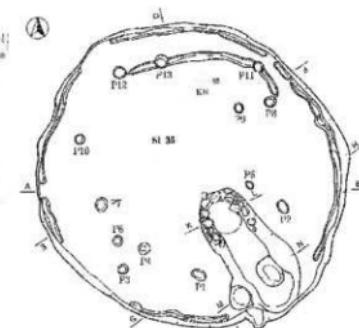


第77号住居跡（天戸森遺跡）

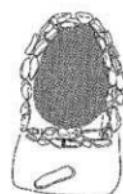
祖型的複式炉



第51号住居跡（大烟台遺跡）



SI35（松木台III遺跡）

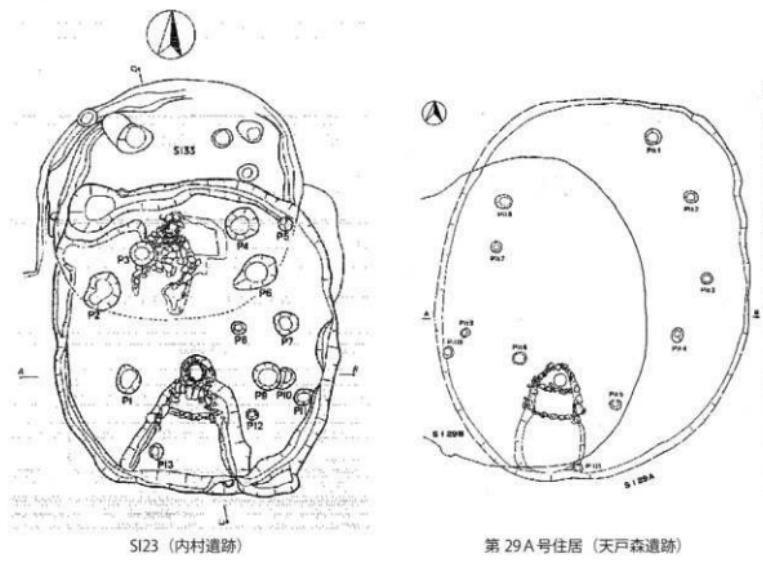


23号住居炉（神谷地遺跡）

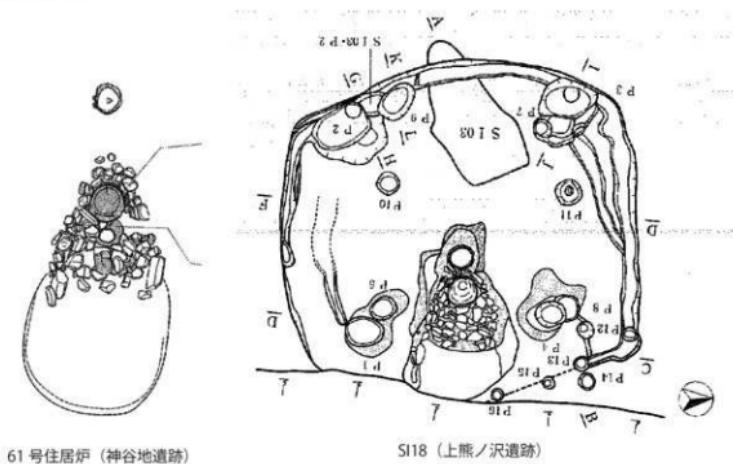
第4図 複式炉発展段階図1

※縮尺不同

複式炉



上原型複式炉

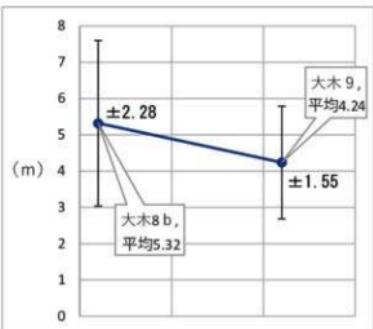


61号住居炉 (神谷地遺跡)

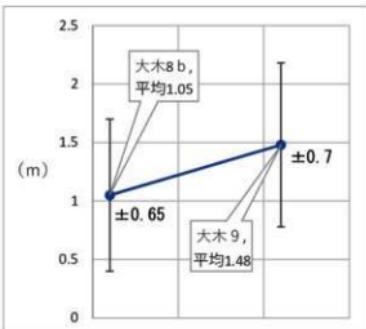
S118 (上熊ノ沢遺跡)

※縮尺不同

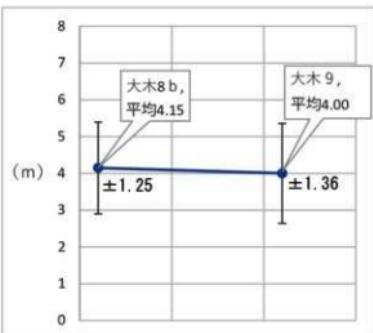
第5図 複式炉発展段階図2



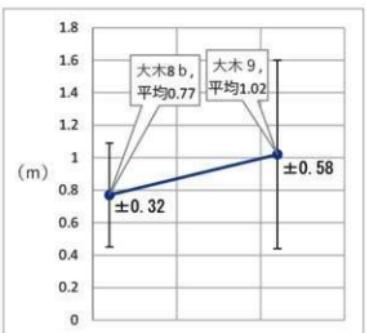
第6図 竪穴建物主軸長平均値・標準偏差



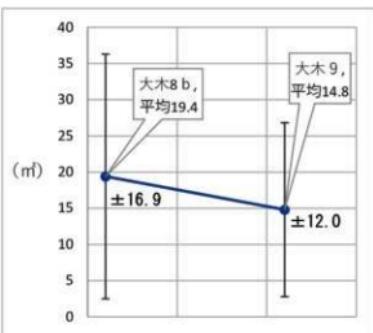
第9図 炉主軸長平均値・標準偏差



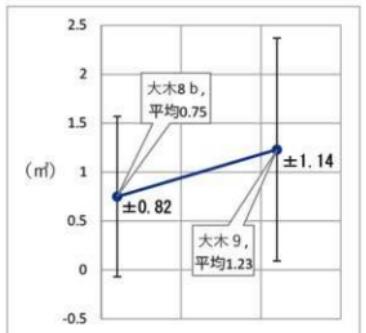
第7図 竪穴建物短軸長平均値・標準偏差



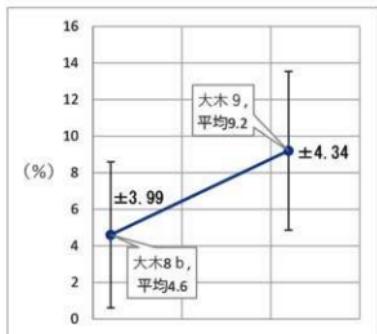
第10図 炉短軸長平均値・標準偏差



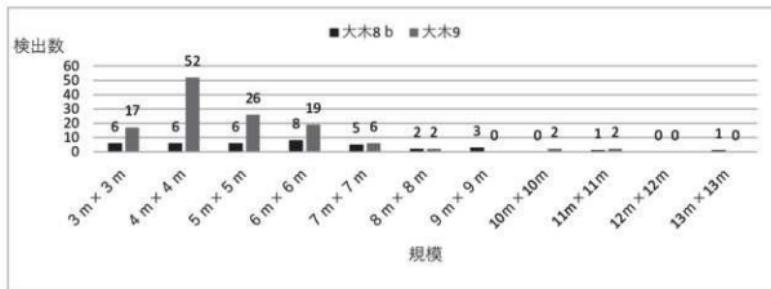
第8図 竪穴建物面積平均値・標準偏差



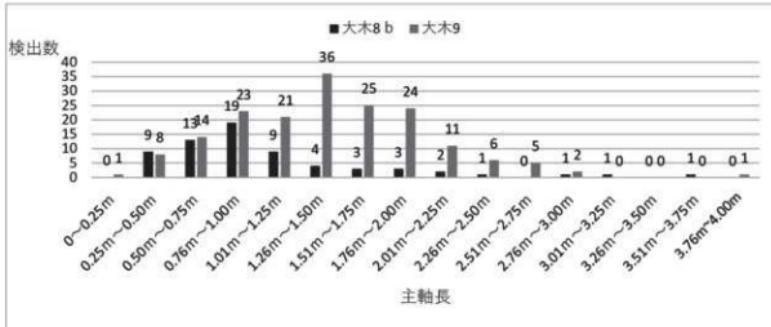
第11図 炉面積平均値・標準偏差



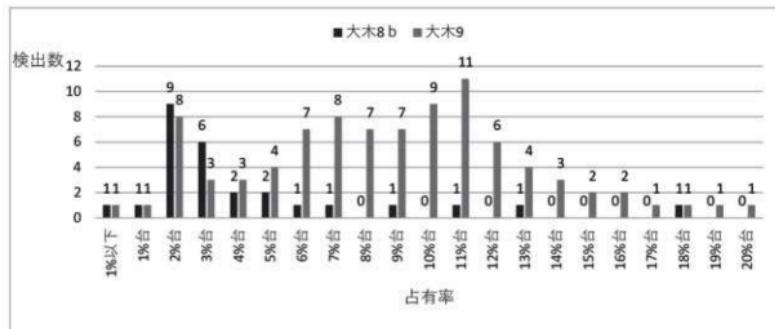
第12図 炉床面占有率平均値・標準偏差



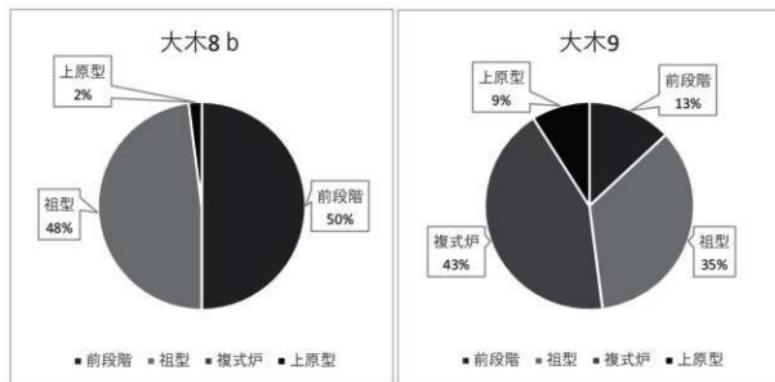
第13図 竪穴建物規模分布図



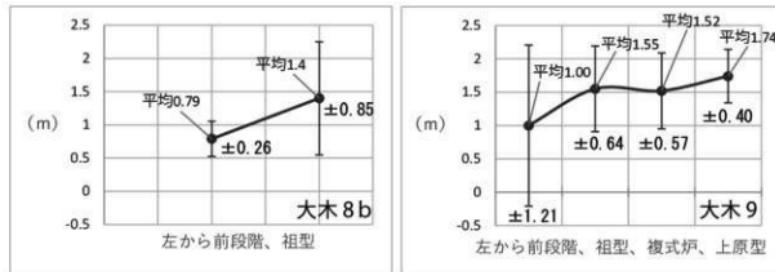
第14図 炉主軸長分布図



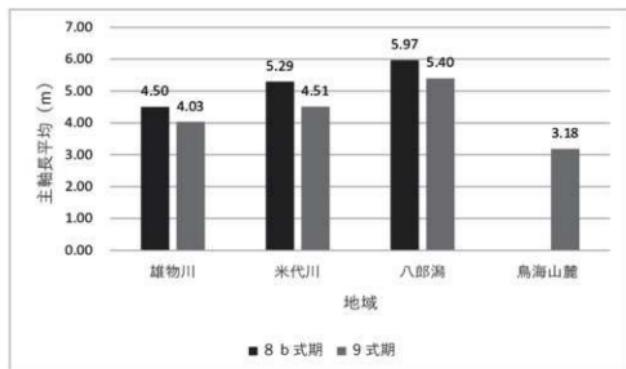
第15図 竪穴建物床面積に対する炉の占有率



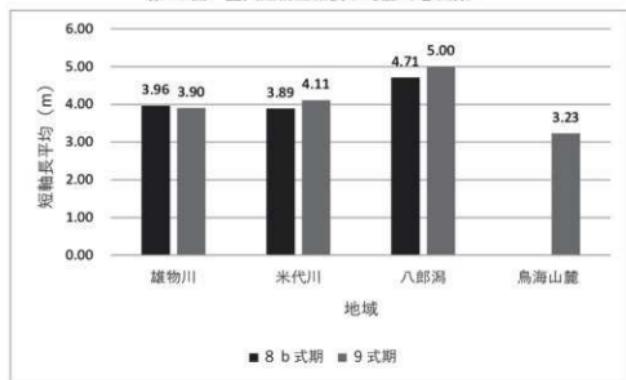
第16図 炉発展段階割合分布図



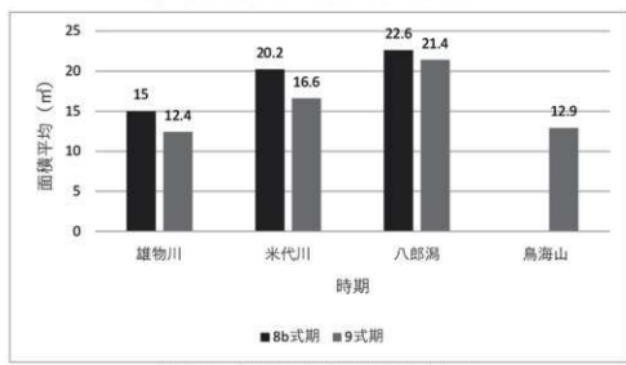
第17図 炉発展段階毎の炉主軸長平均値・標準偏差



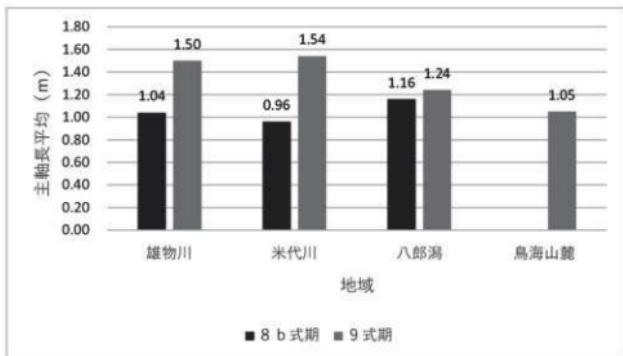
第18図 竪穴建物主軸長平均値（地域別）



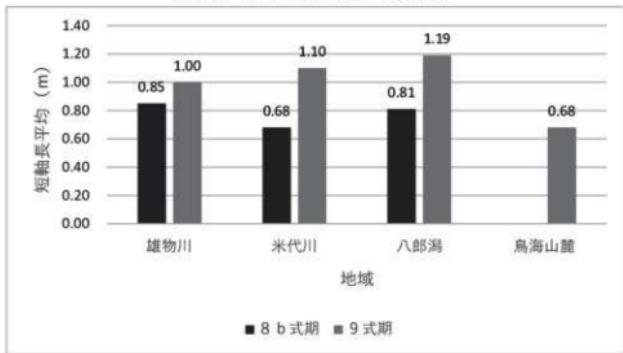
第19図 竪穴建物短軸長平均値（地域別）



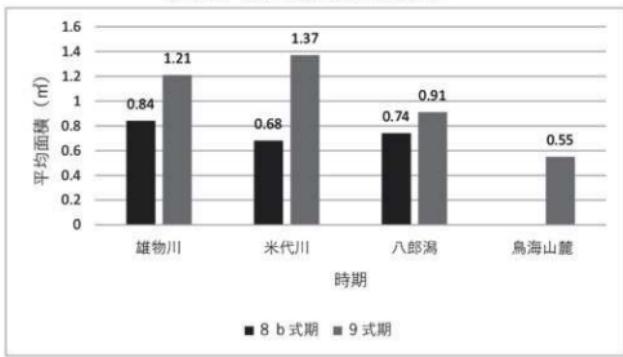
第20図 竪穴建物面積平均値（地域別）



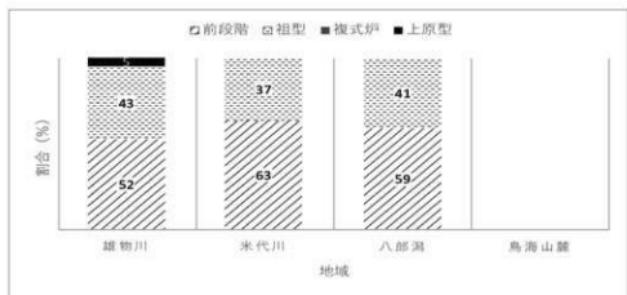
第 21 図 炉主軸長平均値（地域別）



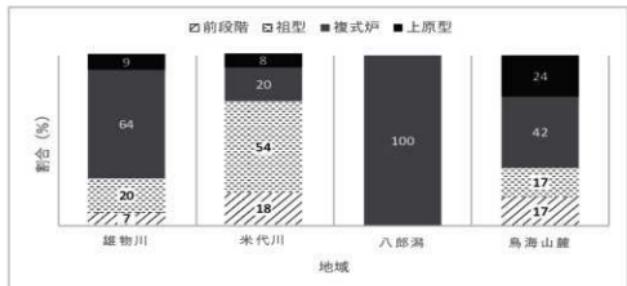
第 22 図 炉短軸長平均値（地域別）



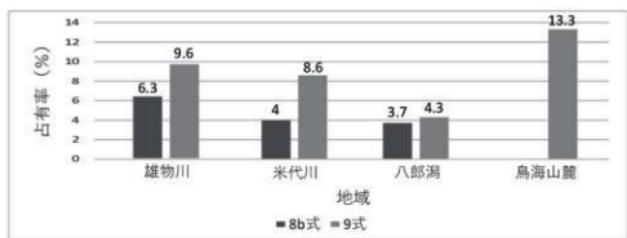
第 23 図 炉面積平均値（地域別）



第24図 地域毎の炉形態割合図(大木8b)



第25図 地域毎の炉形態割合図(大木9)



第26図 炉の床面占有率(地域別)

第1表 占有率における炉形態組成表(大木8b)※枠内の数字は検出数

	~1%	1%	2%	3%	4%	5%	6%	7%	8%	9%	10%	11%	12%	13%	14%	15%	16%	17%	18%	計
複式炉前段	3	7	5	1		1	1													18
祖型の複式炉	1		2	1		1					1									6
複式炉					1	1								1	1					4
上原型複式炉																		1	1	1

第2表 占有率における炉形態組成表(大木9)

	~1%	1%	2%	3%	4%	5%	6%	7%	8%	9%	10%	11%	12%	13%	14%	15%	16%	17%	18%	19%	20%	計
複式炉前段	1	1	3	2	1																8	
祖型の複式炉			3						3	3	4	6	6	1	1	1	1	2			31	
複式炉			2		2	4	4	4	4	3	2	5	5	2	2	1		1	1	1	44	
上原型複式炉				1		3	1			1			1								7	

第3表 穴穴建物計測値

	大木8 b			大木9									
	主軸長 (m)	短軸長 (m)	面積 (m ²)	主軸長 (m)			短軸長 (m)		面積 (m ²)				
平均値	5.32	4.15	19.4	4.24			4		14.8				
標準偏差	±2.28	±1.25	±16.9	±1.55			±1.36		±12				
計測値	2.45	2.25	4.9	2.31	3.40	4.09	5.69	2.30	3.36	4.33	3.5	9.0	16.5
	2.48	2.32	5.5	2.39	3.41	4.13	5.72	2.35	3.37	4.33	3.9	9.1	16.8
	2.56	2.50	6.0	2.41	3.41	4.18	6.07	2.39	3.38	4.36	4.4	9.2	16.9
	2.66	2.57	6.5	2.50	3.45	4.20	6.12	2.40	3.44	4.36	4.8	9.8	17.1
	2.81	2.66	7.8	2.51	3.50	4.23	6.40	2.40	3.44	4.41	4.9	9.8	17.4
	2.97	2.68	7.9	2.55	3.53	4.36	6.53	2.48	3.45	4.41	5.0	10.1	17.4
	3.38	2.86	7.9	2.59	3.53	4.39	6.80	2.57	3.47	4.48	5.0	10.2	17.6
	3.44	3.13	8.4	2.59	3.54	4.41	6.93	2.61	3.47	4.49	5.1	10.2	18.0
	3.47	3.19	9.5	2.62	3.57	4.46	7.41	2.65	3.50	4.52	5.1	10.3	18.1
	3.54	3.32	10.0	2.67	3.57	4.47	7.60	2.65	3.54	4.57	5.2	10.4	18.6
	3.81	3.47	10.2	2.70	3.60	4.48	9.16	2.66	3.54	4.67	5.3	10.6	19.9
	3.95	3.53	10.3	2.71	3.61	4.53	9.64	2.68	3.56	4.77	5.6	10.7	19.9
	4.28	3.60	11.0	2.72	3.62	4.58	10.0	2.69	3.62	4.84	5.9	10.8	20.1
	4.34	3.71	11.8	2.79	3.62	4.59	10.9	2.69	3.65	4.88	6.0	11.0	20.5
	4.39	3.76	12.8	2.82	3.66	4.71		2.80	3.66	4.92	6.1	11.1	21.0
	4.44	3.82	13.4	2.92	3.66	4.74		2.81	3.67	4.93	6.1	11.3	21.3
	4.58	4.12	15.0	3.05	3.66	4.77		2.82	3.73	4.94	6.2	11.6	21.6
	4.93	4.24	16.8	3.10	3.68	4.78		2.83	3.74	4.96	6.5	11.6	21.7
	5.16	4.33	20.2	3.12	3.72	4.88		2.84	3.77	4.96	6.8	11.6	21.7
	5.21	4.34	20.5	3.12	3.77	4.91		2.84	3.89	5.04	6.8	11.7	23.8
	5.30	4.34	20.8	3.13	3.84	5.04		2.96	3.91	5.08	6.9	12.2	24.6
	5.85	4.37	20.8	3.17	3.85	5.04		2.96	3.92	5.11	6.9	12.6	25.2
	5.91	4.42	21.7	3.23	3.85	5.10		2.99	3.92	5.50	7.4	12.7	25.9
	5.92	4.45	22.8	3.26	3.88	5.10		3.04	4.00	5.53	7.6	12.8	29.7
	5.92	4.54	22.9	3.26	3.89	5.21		3.07	4.00	5.56	7.7	12.9	37.2
	5.96	4.62	23.3	3.27	3.89	5.22		3.10	4.02	5.61	8.0	13.0	47.1
	6.17	4.79	23.7	3.27	3.90	5.28		3.11	4.03	5.65	8.1	13.2	50.2
	6.24	4.80	25.8	3.28	3.91	5.32		3.14	4.06	6.52	8.1	13.2	54.1
	6.41	4.80	26.7	3.31	3.95	5.42		3.16	4.07	6.69	8.1	13.4	55.5
	6.49	5.01	36.1	3.32	3.96	5.45		3.17	4.07	6.72	8.4	13.4	58.7
	6.73	5.03	36.8	3.33	3.99	5.48		3.17	4.11	7.16	8.6	13.8	71.0
	7.00	5.15	45.2	3.33	4.01	5.51		3.23	4.11	7.40	8.6	14.0	
	7.68	5.28	96.0	3.35	4.01	5.60		3.24	4.13	7.98	8.7	14.0	
	8.02	5.31		3.35	4.03	5.63		3.28	4.25	8.06	8.8	14.5	
	9.00	5.54		3.37	4.04	5.64		3.28	4.29	8.12	8.8	15.4	
	10.39	5.71		3.38	4.07	5.67		3.34	4.30	8.20	8.9	15.8	
	12.99	8.85		3.39	4.09	5.69		3.35	4.31		9.0	16.2	

第4表 炉の床面占有率

	大木8 b		大木9	
			(%)	
平均値	4.6		9.2	
標準偏差	±3.99		±4.34	
計測値	0.8	0.5	8.2	12.9
	1.2	1.7	8.3	13.3
	1.3	2.0	8.4	13.7
	1.8	2.0	8.5	13.8
	2.1	2.1	8.7	13.9
	2.1	2.4	9.0	14.0
	2.4	2.5	9.1	14.5
	2.4	2.5	9.4	14.7
	2.4	2.7	9.5	15.0
	2.5	2.9	9.7	15.3
	2.6	3.0	9.7	16.8
	2.6	3.2	9.9	16.8
	2.9	3.6	10.0	17.0
	3.1	4.0	10.1	18.2
	3.1	4.1	10.2	19.8
	3.3	4.6	10.2	20.2
	3.3	5.2	10.3	
	3.3	5.4	10.3	
	3.6	5.8	10.7	
	4.3	5.8	10.8	
	4.9	6.1	10.8	
	5.0	6.3	11.0	
	5.8	6.4	11.0	
	6.0	6.5	11.2	
	7.0	6.6	11.2	
	9.6	6.6	11.2	
	11.4	6.8	11.3	
	13.7	7.0	11.5	
	18.1	7.2	11.7	
	7.3	11.8		
	7.3	11.8		
	7.7	11.9		
	7.7	12.1		
	7.8	12.1		
	7.9	12.3		
	8.0	12.7		
	8.1	12.8		

第5表 炉計測値

	大木8 b			大木9													
	主軸長(m)	短軸長(m)	面積(m ²)	主軸長(m)				短軸長(m)				面積(m ²)					
				1.05	0.77	0.75	1.48	1.02	1.23	0.04	0.51	0.85	1.35	2.47			
平均値	± 0.65			± 0.32				± 0.82				± 0.7					
標準偏差																	
計測値	0.30	0.99	0.29	0.78	0.07	0.68	0.25	0.97	1.32	1.57	1.94	0.22	0.59	0.79	1.03		
	0.30	1.00	0.29	0.80	0.09	0.69	0.26	0.98	1.33	1.59	2.00	0.22	0.61	0.81	1.05		
	0.38	1.00	0.31	0.80	0.11	0.71	0.28	0.98	1.34	1.60	2.00	0.24	0.62	0.81	1.05		
	0.38	1.00	0.36	0.83	0.11	0.75	0.29	0.99	1.34	1.61	2.07	0.25	0.62	0.82	1.05		
	0.39	1.01	0.36	0.85	0.13	0.75	0.33	0.99	1.34	1.63	2.09	0.27	0.63	0.83	1.05		
	0.45	1.04	0.37	0.85	0.13	0.83	0.35	0.99	1.34	1.64	2.11	0.30	0.63	0.83	1.05		
	0.46	1.05	0.38	0.87	0.16	0.88	0.39	1.00	1.36	1.64	2.11	0.35	0.64	0.83	1.06		
	0.47	1.06	0.39	0.88	0.17	0.93	0.47	1.00	1.36	1.67	2.13	0.35	0.65	0.84	1.07		
	0.49	1.09	0.44	0.89	0.21	1.05	0.48	1.01	1.36	1.68	2.16	0.42	0.66	0.85	1.08		
	0.56	1.11	0.46	0.93	0.23	1.07	0.51	1.01	1.37	1.69	2.19	0.43	0.66	0.86	1.13		
	0.57	1.14	0.50	0.96	0.23	1.15	0.53	1.06	1.37	1.70	2.19	0.43	0.67	0.87	1.13		
	0.58	1.25	0.50	0.97	0.23	1.18	0.53	1.06	1.39	1.70	2.21	0.44	0.67	0.87	1.14		
	0.58	1.27	0.51	1.00	0.24	1.25	0.58	1.06	1.39	1.71	2.22	0.44	0.67	0.88	1.15		
	0.62	1.42	0.51	1.01	0.26	1.35	0.61	1.11	1.39	1.73	2.23	0.44	0.67	0.88	1.15		
	0.62	1.46	0.53	1.06	0.26	1.37	0.62	1.12	1.40	1.74	2.30	0.45	0.68	0.89	1.16		
	0.63	1.46	0.54	1.08	0.28	1.48	0.63	1.12	1.41	1.75	2.36	0.46	0.69	0.89	1.17		
	0.64	1.55	0.55	1.11	0.30	1.83	0.63	1.14	1.41	1.76	2.39	0.47	0.69	0.90	1.17		
	0.65	1.57	0.56	1.14	0.34	2.14	0.66	1.14	1.42	1.77	2.39	0.47	0.69	0.92	1.17		
	0.67	1.62	0.57	1.15	0.37	2.82	0.68	1.14	1.43	1.77	2.41	0.48	0.70	0.92	1.18		
	0.69	1.84	0.58	1.19	0.39	3.05	0.68	1.17	1.45	1.80	2.42	0.48	0.71	0.92	1.20		
	0.71	1.89	0.61	1.20	0.40	4.79	0.71	1.17	1.47	1.80	2.57	0.48	0.71	0.93	1.21		
	0.71	1.89	0.63	1.26	0.42	0.72	1.19	1.47	1.80	2.57	0.49	0.71	0.93	1.21	1.77		
	0.76	2.02	0.63	1.41	0.43	0.73	1.19	1.47	1.81	2.69	0.50	0.72	0.94	1.22	1.77		
	0.78	2.29	0.65	1.60	0.44	0.79	1.20	1.47	1.81	2.70	0.51	0.72	0.95	1.23	1.80		
	0.80	2.76	0.65	1.61	0.46	0.79	1.20	1.48	1.82	2.74	0.52	0.72	0.95	1.23	1.88		
	0.82	3.19	0.65	1.68	0.47	0.80	1.21	1.48	1.82	2.91	0.52	0.73	0.95	1.24	1.90		
	0.82	3.62	0.66	1.68	0.47	0.81	1.22	1.48	1.85	2.91	0.53	0.73	0.96	1.24	1.92		
	0.84	0.67	0.48		0.82	1.23	1.50	1.87	3.52	0.53	0.74	0.97	1.26	2.10	0.40		
	0.85	0.67	0.49		0.84	1.24	1.51	1.88	3.56	0.54	0.74	0.97	1.28	2.18	0.41		
	0.86	0.70	0.51		0.84	1.27	1.52	1.89	3.94	0.54	0.74	0.97	1.28	2.24	0.41		
	0.87	0.71	0.51		0.84	1.28	1.52	1.89		0.55	0.76	0.97	1.28	2.51	0.42		
	0.88	0.73	0.53		0.84	1.29	1.53	1.90		0.55	0.77	0.98	1.29	2.58	0.43		
	0.89	0.73	0.57		0.90	1.30	1.53	1.90		0.57	0.77	1.01	1.30	2.79	0.45		
	0.91	0.76	0.58		0.92	1.30	1.53	1.91		0.58	0.77	1.01	1.30	3.27	0.45		
	0.96	0.76	0.60		0.95	1.31	1.55	1.93		0.58	0.77	1.02	1.31	0.49	0.81		
	0.97	0.77	0.61		0.97	1.31	1.56	1.93		0.58	0.78	1.03	1.33	0.50	0.83		
					0.97	1.31	1.57	1.94		0.59	0.78	1.03	1.34	0.50	0.83		

第6表 秋田県竪穴建物・炉集成(中期中葉)①

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名(住居)	遺構名(炉)	炉形態	発掘段階	土器型式
1999	小袋岱遺跡	上小阿仁村	米代川	SI120	SI120炉-1	土器埋設石圓炉	粗型	大木8
1999	小袋岱遺跡	上小阿仁村	米代川	SI120	SI120炉-6	土器埋設石圓炉	粗型	大木8
1974	一丈木遺跡(3次)	美郷町	雄物川	29号住居	A	土器埋設石圓炉	粗型	大木8b
1974	一丈木遺跡(3次)	美郷町	雄物川	21号住居	B	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	23号住居	23号住居炉	石圓炉+前部(振り込み)	粗型	大木8
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	17号住居	17号住居炉	石圓炉+前部(振り込み)	粗型	大木8a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	8号住居	8号住居炉	土器埋設石圓炉	粗型	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	7号住居	7号住居炉	土器埋設石圓炉	粗型	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	5号住居	5号住居炉	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	11号住居	11号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	9号住居	9号住居炉2	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	3号住居	3号住居炉	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	12号住居	12号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	4号住居	4号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	6号住居	6号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	13号住居	13号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8b
1986	栗倉B遺跡(2次)	仙北市	雄物川	—	第6号炉	U字形石圓炉	粗型	大木8b
1986	栗倉B遺跡(2次)	仙北市	雄物川	—	第7号炉	石圓炉+前直部	粗型	大木8b
1986	栗倉B遺跡(2次)	仙北市	雄物川	—	第8号炉	U字形石圓炉	粗型	大木8b
1986	栗倉B遺跡(2次)	仙北市	雄物川	—	第5号炉	(円形)石圓炉	複式炉前段階	大木8b
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	13号住居	13号住居炉	内向石圓炉	複式炉前段階	大木8
2001	松木台Ⅱ遺跡	秋田市	雄物川	SI124	SI124炉	土器埋設部+(石圓部)+前直部	上型	大木8b
2001	松木台Ⅲ遺跡	秋田市	雄物川	SI135	SI135炉	石圓炉+前直部	粗型	大木8b
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	SI151	SI151炉	石圓部+前直部	粗型	大木8b
1983	喜ノ沢B遺跡	秋田市	雄物川	16号住居	16号住居炉	土器埋設炉	複式炉前段階	大木8
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	18号住居	18号住居炉	U字形石圓炉	粗型	大木8a~8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	13号住居	13号住居炉	U字形石圓炉	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	44号住居	44号住居炉	U字形石圓炉	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	25号住居	25号住居炉	U字形石圓炉	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	16号住居	16号住居炉	石圓部+前直部	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	45号住居	45号住居炉	方形土器埋設石圓炉	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	34号住居	34号住居炉	方形石圓炉(?)	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	51号住居	51号住居炉	石圓部+前直部	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	32号住居	32号住居炉	石圓炉+石圓炉(?)	粗型	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	8号住居	8号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	17号住居	17号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8

第7表 秋田県竪穴建物・炉集成(中期中葉)②

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名(住居)	遺構名(炉)	伊形態	発掘段階	土器型式
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	12号住居	12号住居炉	土基埋設炉	複式炉前段階	大木8
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	36号住居	36号住居炉	石窯炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	49号住居	49号住居炉	楕円形石窯炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	46号住居	46号住居炉	楕円形石窯炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	31号住居	31号住居炉	円形石窯炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	22号住居	22号住居炉	方形石窯炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	30号住居	30号住居炉	土器片圓炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	11号住居	11号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	35号住居	35号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8b
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	24号住居	24号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8
1979	大烟台遺跡	男鹿市	八郎潟	42号住居	42号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8b
1989	上岱 I 遺跡	北秋田市	米代川	S114	S114炉	土器堆設石圓炉	祖型	大木8b
1989	上野台遺跡	大仙市	米代川	S113	S113炉	土器堆設石圓炉	祖型	大木8b
1994	角野遺跡(第5次)	船代市	米代川	S1443	S1443炉	石圓部+前直部	祖型	大木8
1994	角野遺跡(第5次)	船代市	米代川	S1457	S1457炉	石圓部+前直部	祖型	大木8
1994	角野遺跡(第5次)	船代市	米代川	S1470B	S1470B炉	石圓炉+地床炉	複式炉前段階	大木8 b併行
1994	角野遺跡(第5次)	船代市	米代川	S1474	S1474炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8 b併行
1995	角野遺跡(第6次)	船代市	米代川	S1509B新	S1509B新炉	石圓部+前直部?	祖型	大木8
1995	角野遺跡(第6次)	船代市	米代川	S1509B古	S1509B古炉	石圓炉	複式炉前段階	大木8
1995	角野遺跡(第6次)	船代市	米代川	S1506	S1506炉	円形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第55号住居	55号住居炉	コの字状石圓炉	祖型	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第51号住居	51号住居炉	U字形石圓炉	祖型	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第42号住居A	42号住居A炉	円形石圓炉+(盛り込み)	祖型	大木8
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第111号住居	111号住居炉	円形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b併行
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第38号住居	38号住居炉	円形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第72号住居	72号住居炉	土器片圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第74号住居	74号住居炉	円形(石圓炉)	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第86号住居	86号住居炉	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第85号住居	85号住居炉	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第113号住居	113号住居炉	土器片圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第24号住居	24号住居炉	方形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第77号住居	77号住居炉	楕円形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	第78号住居	78号住居炉	円形石圓炉	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	—	第2号堆設土器	土器堆設炉?	複式炉前段階	大木8 b
1984	天戸森遺跡	圓角市	米代川	—	第1号堆設土器	土器堆設炉?	複式炉前段階	大木8 b
2006	森吉家ノ前 A (1次)	北秋田市	米代川	S1224	S1224炉	土器堆設炉	複式炉前段階	大木8

第8表 秋田県堅穴建物・炉集成（中期後葉）①

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名（住居）	遺構名（炉）	炉形態	発掘段階	土器型式
1985	石坂台I遺跡	秋田市	雄物川	1号B	B炉	土器背設部+石圓部+振り込み	複式炉	大木9
1986	石坂台II遺跡	秋田市	雄物川	S103	S103炉	土器背設部+振り込み	複式炉	大木9?
1986	石坂台III遺跡	秋田市	雄物川	S101	S101炉	土器背設部+（石圓部）+（前庭部）	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S112	S112炉	土器背設部+（右圓部）	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S135	S135炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S160	S160炉	土器背設部+右圓部+前庭部？	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S158	S158炉	土器背設部+振り込み	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S140	S140炉	（土器背設部）+右圓部+（前庭部）	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S139	S139炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9-10
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S139	S139炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9 僅現
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S113	S113炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S123	S123炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S113	S113炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S145	S145炉	土器背設部+右圓部+前庭部	上原型	大木9
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S147	S147炉	（土器背設部）+右圓部+前庭部	上原型	大木9-10
1981	内村遺跡	美郷町	雄物川	S129	S129炉	土器背設部+右圓部+前庭部？	上原型	大木9
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	15号住居	15号住居炉	（右圓炉）	複式炉前段階	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	69号住居	69号住居炉	土器背設炉	複式炉前段階	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	68号住居	68号住居炉	土器背設炉	複式炉前段階	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	48号住居	48号住居炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	47号住居	47号住居炉	（土器背設部）+（右圓部）+（前庭部）	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	52号住居	52号住居炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	42号住居	42号住居炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	39号住居	39号住居炉	土器背設部+（右圓部）+（前庭部）	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	43号住居	43号住居炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	31号住居	31号住居炉	右圓炉+右圓炉+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	40、41号住居	40、41号住居炉	土器背設部+（右圓部）+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	37号住居	37号住居炉	土器背設部+（右圓部）+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	32号住居	32号住居炉	右圓炉+右圓炉+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	38号住居	38号住居炉	土器背設部+（右圓部）+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	51号住居	51号住居炉	土器背設部+右圓部+（前庭部）	複式炉	大木9-10
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	46号住居	46号住居炉	土器背設部+右圓部+（前庭部）	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	28号住居	28号住居炉	右圓部+右圓部+前庭部	複式炉	9a~9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	34号住居	34号住居炉	土器背設部+（右圓部）+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	50号住居	50号住居炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9-10
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	53号住居	53号住居炉	土器背設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9b

第9表 秋田県堅穴建物・炉集成（中期後葉）②

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名（住居）	遺構名（炉）	炉形態	発掘段階	土器型式
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	44号住居	44号住居炉	土器堆設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	30号住居	30号住居炉	石圓炉+石圓炉+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	55号住居	55号住居炉	土器堆設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	57号住居	57号住居炉	土器堆設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9-10
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	24号住居	24号住居炉	石圓炉+前庭部	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	49号住居	49号住居炉	(石圓炉)+前庭部	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	35号住居	35号住居炉	土器堆設炉+置り込み	複型	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	45号住居	45号住居炉	土器堆設石圓炉	複型	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	33号住居	33号住居炉	(石圓炉)+前庭部	複型	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	29号住居	29号住居炉	石圓炉+前庭部	複型	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	18号住居	18号住居炉	石圓炉+(前庭部?)	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	16号住居	16号住居炉	石圓炉+(前庭部?)	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	27号住居	27号住居炉	石圓炉+前庭部	複型	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	26号住居	26号住居炉	石圓炉+前庭部	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	25号住居	25号住居炉	石圓部+前庭部	複型	大木9a~9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	14号住居	14号住居炉	石圓炉+前庭部?	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	19号住居	19号住居炉	石圓炉+(前庭部?)	複型	大木9a
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	61号住居	61号住居炉	土器堆設部+石組部+前庭部	上原型	大木9-10
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	56号住居	56号住居炉	土器堆設部(2つ)+石組部+前庭部	上原型	大木9b
2015	神谷地遺跡	横手市	雄物川	59号住居	59号住居	土器堆設部+石組部+前庭部	上原型	大木9-10
1986	黒倉B遺跡（2次）	仙北市	雄物川	—	第4号炉	土器堆設炉	複式炉前段階	大木9
1986	黒倉B遺跡（2次）	仙北市	雄物川	—	第10号炉	土器堆設部+石圓部	複式炉	大木9?
1986	黒倉B遺跡（2次）	仙北市	雄物川	—	第9号炉	土器堆設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9?
1986	黒倉B遺跡（2次）	仙北市	雄物川	—	第12号炉	土器堆設部+石圓部+(前庭部)	複式炉	大木9?
1991	小出I遺跡	大仙市	雄物川	S123	S123炉	土器堆設+石圓部	複式炉	大木9
1982	駒坂袋I遺跡	秋田市	雄物川	S101	S101炉	土器堆設部+石圓部	複式炉	大木9?
1982	駒坂袋I遺跡	秋田市	雄物川	S102	S102炉	土器堆設部+石組部	複式炉	大木9
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	21号住居	21号住居炉	(土器堆設部)+石圓部+前庭部?	複式炉	大木9-10
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	36号住居	36号住居炉	土器堆設部+置り込み	複式炉	大木9-10
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	32号住居	32号住居炉	土器堆設部+置り込み	複式炉	大木9-10
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	14号住居	14号住居炉	土器堆設部+置り込み	複式炉	大木9?
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	33号住居	33号住居炉	土器堆設部+石圓部+前庭部?	複式炉	大木9-10
1984	坂ノ上E遺跡	秋田市	雄物川	1号住居	1号住居炉	石圓炉+置り込み	複型	大木9
1997	地内遺跡	秋田市	雄物川	4号住居	4号住居炉	土器堆設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9
1997	地内遺跡	秋田市	雄物川	7号住居	7号住居炉	石圓部+前庭部	複型	大木9?
2004	中屢敷II遺跡	美郷町	雄物川	S1220	S1220炉	土器堆設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9

第10表 秋田県堅穴建物・炉集成（中期後葉）③

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名（住居）	遺構名（炉）	炉形態	発掘段階	土器型式
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S190	S190炉	上器座設部+石組部	複式炉	大木9
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S160	S160炉	上器座設部+石圓部+（前底部）	複式炉	大木9
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S131	S131炉	上器座設部+（石圓部）	複式炉	大木9
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S179	S179炉	上器座設部+（石圓部）+（前底部）	複式炉	大木9
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S129	S129炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S132	S132炉	上器座設部+（石圓部）+（前底部）	複式炉	大木9
2004	蛭塙遺跡	潟沢市	雄物川	S126	S126炉	上器座設部+石組部+前底部	上原型	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S1113	S1113炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S142	S142炉	上器座設部+石圓部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S186	S186炉伊	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S196	S196炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S138	S138炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S186	S186新伊	上器座設部+（石圓部）+前底部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S143	S143炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S182	S182炉	上器座設部+（石圓部）+前底部	複式炉	大木9
2001	松木台Ⅳ遺跡	秋田市	雄物川	S158	S158炉	石圓部+前底部	粗型	大木9
1984	湯ノ沢A遺跡	秋田市	雄物川	1号住居	1号住居炉	（土器座設部）+盛り込み	複式炉	大木9?
1983	湯ノ沢B遺跡	秋田市	雄物川	12号住居	12号住居炉	上器座設部+石組部+前底部	上原型	大木9?
1984	湯ノ沢C遺跡	秋田市	雄物川	3号住居	3号住居炉	上器座設部+盛り込み	複式炉	大木9-10
1984	湯ノ沢C遺跡	秋田市	雄物川	2号住居	2号住居炉	石圓部+前底部	粗型	大木9-10
1985	湯ノ沢D遺跡	秋田市	雄物川	3号住居	3号住居炉（新）	石圓部	複式炉前段階	大木9
1985	湯ノ沢D遺跡	秋田市	雄物川	2号住居	2号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9-10
1985	湯ノ沢D遺跡	秋田市	雄物川	4号住居	4号住居炉	石圓部+前底部	粗型	大木9
1985	湯ノ沢D遺跡	秋田市	雄物川	3号住居	3号住居炉（旧）	石圓部+前底部	粗型	大木9
1985	湯ノ沢D遺跡	秋田市	雄物川	9号住居	9号住居炉	上器座設部+石組部+前底部	上原型	大木9
2001	岱Ⅱ遺跡	秋田市	雄物川	S120	S120炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9?
2001	岱Ⅱ遺跡	秋田市	雄物川	S121	S121炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	—	SN40	上器座設炉	複式炉前段階	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	S102	炉3	上器座設炉	複式炉前段階	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	S109	S109炉	上器座設炉（複式炉）	複式炉	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	S112	S112炉	上器座設部+石組部	複式炉	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	S21	S21炉	上器座設部+石圓部+前底部	複式炉	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	S117	S117炉	上器座設部+石組部	複式炉	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	S104	S104炉	上器座設部+石組部	複式炉	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	—	SN20	上器座設石圓炉	粗型	大木9?
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	島海山麓	—	SN05	上器座設石圓炉	粗型	大木9

第11表 秋田県堅穴建物・炉集成（中期後葉）④

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名（住居）	遺構名（炉）	炉形態	発掘段階	土器型式
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	鳥海山麓	S102	泊炉	（土器堆設部）+右組部+前庭部	上原型	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	鳥海山麓	S115	S115B	土器堆設部+右組部+前庭部	上原型	大木9
1991	上熊ノ沢遺跡	にかほ市	鳥海山麓	S118	S118B	土器堆設部+右組部+前庭部	上原型	大木9
2001	太平遺跡	秋田市	八郎潟	S152	S152B	土器堆設炉+窓り込み（石圓部？）	複式炉	大木9
2001	太平遺跡	秋田市	八郎潟	S118	S118B	土器堆設部+右圓部	複式炉	大木9
1984	室内I遺跡	鹿角市	米代川	S1006	S1006B	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1984	室内VI遺跡	鹿角市	米代川	S1197	S1197B	右圓部+前庭部	粗型	大木9-10
2011	漆下遺跡	北秋田市	米代川	S1531	S1531B	土器堆設炉	複式炉前段階	大木9-10
2011	漆下遺跡	北秋田市	米代川	S110047	S110047B	残存外圍壁のみ	複式炉前段階	大木9-10
2011	漆下遺跡	北秋田市	米代川	S110011	S110011B	土器堆設部+右組部+前庭部	上原型	大木9-10
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1237B	S1237B	右圓炉	複式炉前段階	大木9~10併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1429	S1429B	右圓炉	複式炉前段階	大木9~10併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1464	S1464B	土器堆設炉	複式炉の段階	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1438	S1438B	土器堆設炉	複式炉の段階	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1470A	S1470A	土器堆設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1431	S1431B	土器堆設部+右圓部	複式炉	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1444	S1444B	土器堆設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1435A2	S1435A2B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1435B	S1435B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1442	S1442B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1444B	S1444B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1435C	S1435C	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1475	S1475B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1467	S1467B	土器堆設右圓炉	粗型	大木9~10併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1468A	S1468A	右圓部+前庭部	粗型	大木9~10併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1233	S1233B	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1425	S1425B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1994	魚野遺跡（第5次）	能代市	米代川	S1476	S1476B	右圓部+前庭部	粗型	大木9併行
1995	魚野遺跡（第6次）	能代市	米代川	S1509A古	S1509A古	土器堆設炉	複式炉前段階	大木9
1995	魚野遺跡（第6次）	能代市	米代川	S1498B	B	土器堆設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9 b
1995	魚野遺跡（第6次）	能代市	米代川	S1492	S1492B	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1995	魚野遺跡（第6次）	能代市	米代川	S1509A新	S1509A新	土器堆設右圓炉	粗型	大木9
1995	魚野遺跡（第6次）	能代市	米代川	S1501	S1501B	右圓部+前庭部	粗型	大木9~10
1995	魚野遺跡（第6次）	能代市	米代川	S1498A	A	馬蹄形右圓炉	粗型	大木9併行
2006	島野上岱遺跡	能代市	米代川	S102	S102B	前庭部（右圓部以上は簡略）	不明	大木9
2006	島野上岱遺跡	能代市	米代川	S156	S156B	土器堆設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9

第12表 秋田県堅穴建物・炉集成（中期後葉）⑤

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名 (住居)	遺構名(伊)	炉形態	発掘段階	土器型式
2006	鳥野上岱遺跡	能代市	米代川	S103B	S103B炉	上器群設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9
2006	鳥野上岱遺跡	能代市	米代川	S111	S111炉	石圓部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9-10
2006	鳥野上岱遺跡	能代市	米代川	S112	S112炉	石圓部+前庭部	祖型	大木9
2006	鳥野上岱遺跡	能代市	米代川	S140	—	堆積土器+燃焼跡(地床炉)	祖型	大木9-10
2006	鳥野上岱遺跡	能代市	米代川	S114	S114炉	石圓部+前庭部	祖型	大木9
2006	鳥野上岱遺跡	能代市	米代川	S103A	S103A炉	石圓部+前庭部?	祖型	大木9-10
1999	小袋岱遺跡	北秋田市	米代川	S1118	S1118炉	(石圓部)+盛り込み?	祖型	大木9-10
1988	寒川I遺跡	能代市	米代川	第9号住居	9号住居炉	上器群設部+(石圓部)	複式炉	大木9?
1988	寒川I遺跡	能代市	米代川	第10号住居	10号住居炉	上器群設部+盛り込み	複式炉	大木9?
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第3号住居	3号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第110B	110号住居炉B	石圓炉	複式炉前段階	大木9-10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第1号住居	1号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第27号住居	27号住居炉	石圓炉	複式炉の段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第52号住居	52号住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第110A	110号住居炉A	石圓炉	複式炉前段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第30号住居	30号住居炉	(石圓炉)	複式炉前段階	大木9-10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第62A B住居	62 A B住居炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第29号住居B	29号住居B炉	石圓炉	複式炉前段階	大木9
1994	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	S115	S115炉	円形石圓炉	複式炉前段階	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第123号住居	123号住居炉	上器群設部+(石圓部)	複式炉	大木9-10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第67号住居	67号住居炉	上器群設部+石圓部+盛り込み	複式炉	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第16号住居	16号住居炉	石圓部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9~10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第29号住居A	29号住居A炉	上器群設部+石圓部+前庭部	複式炉	大木9
1994	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	S123	S123炉	馬蹄形石圓炉	祖型	大木9進行?
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第21号住居	21号住居炉	石圓部+盛り込み	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第22号住居	22号住居炉	石圓部+(前庭部?)	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第11号住居	11号住居炉	(石圓部)+盛り込み	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第63号住居	63号住居炉	石圓部+盛り込み	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	S15A	炉A	石圓部+盛り込み	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第49号住居	49号住居炉	石圓部+盛り込み	祖型	大木9-10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第115号住居	115号住居炉	石圓部+盛り込み	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第13号住居	13号住居炉	石圓部+盛り込み	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第108号住居	108号住居炉	石圓部+前庭部	祖型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第62F住居	62 F住居炉	(石圓部)+盛り込み	祖型	大木9-10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第53号住居	53号住居炉	石圓部+盛り込み	祖型	大木9-10
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第102号住居	102号住居炉	石圓部+前庭部	祖型	大木9-10

第13表 秋田県堅穴建物・炉集成（中期後葉）⑥

刊行年次	遺跡名	所在地	地域	遺構名（住居）	遺構名（炉）	炉形態	発掘段階	土器型式
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第116号住居	116号住居炉	右圓部+掘り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第32号住居	32号住居炉	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第27号住居	27号住居土器窓	土器窓設右圓炉	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第31号住居	31号住居炉	(右圓部)+前庭部	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	S122	S122炉	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第8号住居	8号住居炉	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第15号住居	15号住居炉	(右圓部)+竪り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第7号住居	7号住居炉	(右圓部)+竪り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	S58	炉B	(右圓部)+竪り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	—	第2号屋外炉	右圓部+竪り込み	粗型	大木9併行
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第6号住居	6号住居炉	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第14号住居	14号住居炉	右圓部+掘り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第12号住居	12号住居炉	(右圓部)+竪り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第101号住居	101号住居炉	右圓部+前庭部	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第45号住居	45号住居炉	右圓部+竪り込み	粗型	大木9
1984	天戸森遺跡	鹿角市	米代川	第54号住居	54号住居炉	右圓部+右圓部+前庭部	上原型	大木9
2006	二重鳥A遺跡	北秋田市	米代川	S103	S103炉	土器窓設部+右圓部+(前庭部)	複式炉	大木9-10
2006	二重鳥B遺跡	北秋田市	米代川	S1282	S1282炉	右圓付土器窓設炉	粗型	大木9-10
2009	二重鳥B遺跡	北秋田市	米代川	S1253	S1253炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
2009	二重鳥B遺跡	北秋田市	米代川	S1274	S1274炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9-10
2009	二重鳥B遺跡	北秋田市	米代川	S1308	S1308炉	土器窓設部+右圓部+(前庭部)	上原型	大木9-10
2009	二重鳥B遺跡	北秋田市	米代川	S1305	S1305炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	上原型	大木9-10
1994	冷水山板遺跡	大館市	米代川	S110	石圓炉	複式炉前段階	大木9	
1994	冷水山板遺跡	大館市	米代川	S101	S101炉	右圓部+右圓部+前庭部	上原型	大木9
2004	二重鳥B遺跡	北秋田市	米代川	S172	S172炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
2003	二重鳥C遺跡	北秋田市	米代川	S153	S153炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
2003	二重鳥C遺跡	北秋田市	米代川	S158	S158炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	複式炉	大木9
2002	二重鳥D遺跡	北秋田市	米代川	S112	炉B	土器窓設部+右圓部	複式炉	大木9
2002	二重鳥D遺跡	北秋田市	米代川	S112	炉A	右圓部+前庭部	粗型	大木9
2002	二重鳥E遺跡	北秋田市	米代川	S101	S101炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	上原型	大木9
2010	森吉家／前A（3次）	北秋田市	米代川	S15560	S15560複式炉	土器窓設右圓炉？	粗型	大木9
2010	森吉家／前A（3次）	北秋田市	米代川	S15080	S15080炉	土器窓設部+右圓部+前庭部	上原型	大木9併行

〈論考〉弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通

大上 立朗*

はじめに

弥生時代併行期^(註1)、西方から碧玉・鉄石英製管玉が北海道、東北六県（以下、北日本と称する）へもたらされ、広く流通する。しかしこの遺物が極端に少ない地域がある。秋田県域である。本稿では弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通について考えていくが、出土点数の少ない秋田県域を特異な様相を呈する地域と捉え、管玉を自己消費せず広域に流通させる集団が当地域周辺に存在していた可能性を論じていきたい。

1 北日本の碧玉・鉄石英製管玉の流通をめぐる議論と課題

まず、これまで弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通経路がどのように想定されていたかを概観する。

寺村光晴は北日本出土の管玉について、法量の変遷、流通経路、消費のされ方等を総合的に考察した。北日本では碧玉・鉄石英製管玉製作遺跡が確認されていなかったため、これらは北陸で製作されたものと述べ、当初その流通経路については、阿武隈川—仙台平野—北上川—津軽平野・下北半島—渡島半島という太平洋側内陸部から北上するルートを想定していた（寺村 1974）が、後に玉作が活発に行われた佐渡の地理的環境を考慮し、日本海側の海上ルートの可能性も示した（寺村 1990）。

本間元樹も北海道の碧玉・鉄石英製管玉について、北陸産と考えるもの、その他の石材を用いて作られた管玉については直徑が異なるために在地産であると指摘した（本間 1995）。

斎野裕彦は北日本にもたらされた管玉を集成し、その生産地が時期ごとに異なると述べ、法量の類似性から、弥生時代前期には山陰産の管玉がもたらされると述べた。また、中期においては北日本に広く管玉が分布するようになり、その背景に北陸東部での玉作が活発化するとともに、在地における管玉製作が行われていた可能性を指摘した（斎野編 1998）。

青野友哉は北海道の玉類について論じる中で、碧玉製管玉が石狩低地帯日本海側に集中することから佐渡から日本海を介した交流があったとした（青野 1999）。

廣瀬時習は北海道の管玉の法量の地域性を指摘とともに、生産遺跡の管玉の法量と比較することで生産地の解明を試みた。佐渡の法量と一致するものが多いしながらも、一部は北陸南西部以西や未知の生産地で製作された可能性を示唆している（廣瀬 2004）。

大賀克彦は日本列島全域における管玉の流通を論じた。管玉の全長と直徑の平均値から時空間的分布を検討する中で、「領域」を設定した。直徑 0.2 ~ 0.4cm、全長 0.5 ~ 1.2cm の「領域 S」においては、東日本の方が西日本よりも全長が大きい「領域 Se」に属するとした。直徑が 0.4cm を超える「領域 F」においては東日本と西日本が明確に区別されるわけではないとしつつも、後者の方がより狭い範囲に集中するため、「領域 F'」とした。「領域 S」と直徑がほぼ同じながら全長が明らかに大きい「領域 L」は東日本でも中部高地から関東平野以北に限って分布すると述べた。このような違いが生じる背景には製作者の違いを指摘した。そして各地の管玉の流通経路を説明する中で、北日本については佐渡から日本海側を経る

*秋田県埋蔵文化財センター文化財主事

ルートと内陸部からの二つのルートによって管玉がもたらされたとした（大賀 2001）。

設楽博己は側面索孔回転式銛頭の分布から福島県域の集団の遠隔地間交流について論じたが、管玉に関しては東北北部に多く分布するため、そこから道南へもたらされたと述べた（設楽 2003）。

高瀬克範は管玉出土点数が多い石狩低地帯北部へは、道南部に管玉が少ないため、そこを中継地とはせずに、津軽半島周辺から直接管玉が持ち込まれたと述べた（高瀬 2014）。

根岸洋は弥生時代前期から中期前葉にかけての北東北の碧玉製管玉について検討を加え、中期前葉においては細形管玉が二枚橋式土器分布圏に、太形管玉が五所式土器及び類似土器の分布圏に見られることから流通経路が異なる可能性を指摘した（根岸 2020）。

理化学的な分析としては、蛍光X線分析による北日本の碧玉製管玉の産地同定が薦科哲男を中心に行われている。北海道・北東北では佐渡の猿八産を主体に、一部女代南B群が確認されている（薦科 1998・2000、薦科・東村 1995・1996a・b、薦科・福田 1997）。それに対し、福島県宮崎遺跡では一部猿八産もあるものの、女代南B群が主体を占めていることが判明した（薦科他 2016）。報告者の一人である設楽博己は、直径1.7cm以上の極太形管玉と翡翠製半玦形勾玉、第1次調査出土の小松式土器類似の土器、そして蛍光X線分析の結果から石川県小松市周辺との関係を指摘している。

土器のあり方から北日本の碧玉・鉄石英製管玉の流通を考えたのが石川日出志である。石川は、宇津ノ台式土器集団が北海道・北東北、仙台平野への碧玉・鉄石英製管玉の流通を担ったとし、その根拠として宇津ノ台式土器が、南方の小松式土器、北方の恵山式、田舎館式の要素を取り入れること、下越方面に分布域を拡大するとともに岩手県、宮城県北部に散発的に分布することを挙げた。また福島県域については、宇津ノ台式土器集団を介せず新潟方面から碧玉製管玉がもたらされたと述べ、加えて鉄石英製管玉が当地域に少ない点を指摘した（石川 2004）。

根岸洋は男鹿半島あるいは横手盆地を中継地点に、新潟県から北海道へと管玉が運ばれた可能性を指摘している（根岸 2016）。

相澤清利は北海道において、北陸起源と考えられるミニチュア土器と龍門寺式土器の影響を受けたと考えられる土器が、管玉を有する西桔梗B2遺跡、茂別遺跡から出土する点を指摘し、龍門寺式土器を担う集団によって北陸から管玉がもたらされた可能性を示唆している（相澤 2019）。

筆者は弥生時代中期後半の北陸において、その東西で管玉製作技術が異なり、それと対応するように東北系土器も分布することから、製品の供給先も異なると述べた。つまり、弥生時代中期後半の北日本の碧玉・鉄石英製管玉は石川県羽咋市以東の「タテ割り主体地域」からもたらされたと考えた（大上 2019b）。

以上をまとめると、北日本の碧玉・鉄石英製管玉の多くが北陸の玉作集団によって製作され、流通経路に太平洋側も挙げられるものの、日本海沿岸部の集団がその流通に大きな役割を担うことが明らかにされてきたといえる。しかし、以下の二点が課題として挙げられる。まず、北陸の玉作集団の展開と彼らの供給先の一つである北日本での管玉の分布のあり方が関連付けて考えられてはいない。次に、日本海沿岸部とその他の地域の管玉の分布が十分に比較検討されていないために、日本海沿岸部の集団の特質が明らかにされていない。次項からは北日本における管玉の分布のあり方を検討し、上記の課題について考えていく。

2 北日本における碧玉・鉄石英製管玉の分布

本稿で用いる時間軸は第1表のとおりである。作成にあたっては石川2012、石川編2005、大坂2007・

2010a・b・2012・2015、佐藤祐 2015、下濱 2016、根岸 2005・2006 を参考にした。また時期が不確定で、管玉の所属時期が三時期以上にまたがる可能性がある資料は取り上げていない（第1～3図、第2・3表）。

第1表 本稿で用いる時間軸

時期	北陸	新潟	福島	宮城	山形	秋田	岩手	青森	北海道
I期	柴山出村 糸木ジワリ	建立1 建立2	御代田 今和泉 南御山1	十三導東D 原	生石2B 生石2C 地蔵池/越沼	地蔵田 寒川I 谷起島	金附田群 五所 垂柳1 垂柳2	砂沢 二枚橋 惠山Ia	
II期									K39-14a層
III期	八日市地方7期 八日市地方8期	次上Ⅰ期 下谷地(古)	南御山2 二ツ釜	高田B 中在家南	堂森I 堂森II 三十刈I	百刈田 円田 御山村下 十三導 江保	宇津ノ台 河原田 はりま館	樋本 念仏閣/大石平1	K39-13b層 江別太田6層 恵山Ib1 恵山Ib2 恵山IIa
IV期									J江別太田5層 後北A
V期	戸水B 猫橋 法仏 月影	次上Ⅱ期 平田	和泉 天王山	下ノ内浦			美II 湯舟沢		恵山IIb 恵山IIc 鶴ノ木 後北B 後北C1
	白江		船ノ内	八木山越町		寒川II	赤六		後北C2-D

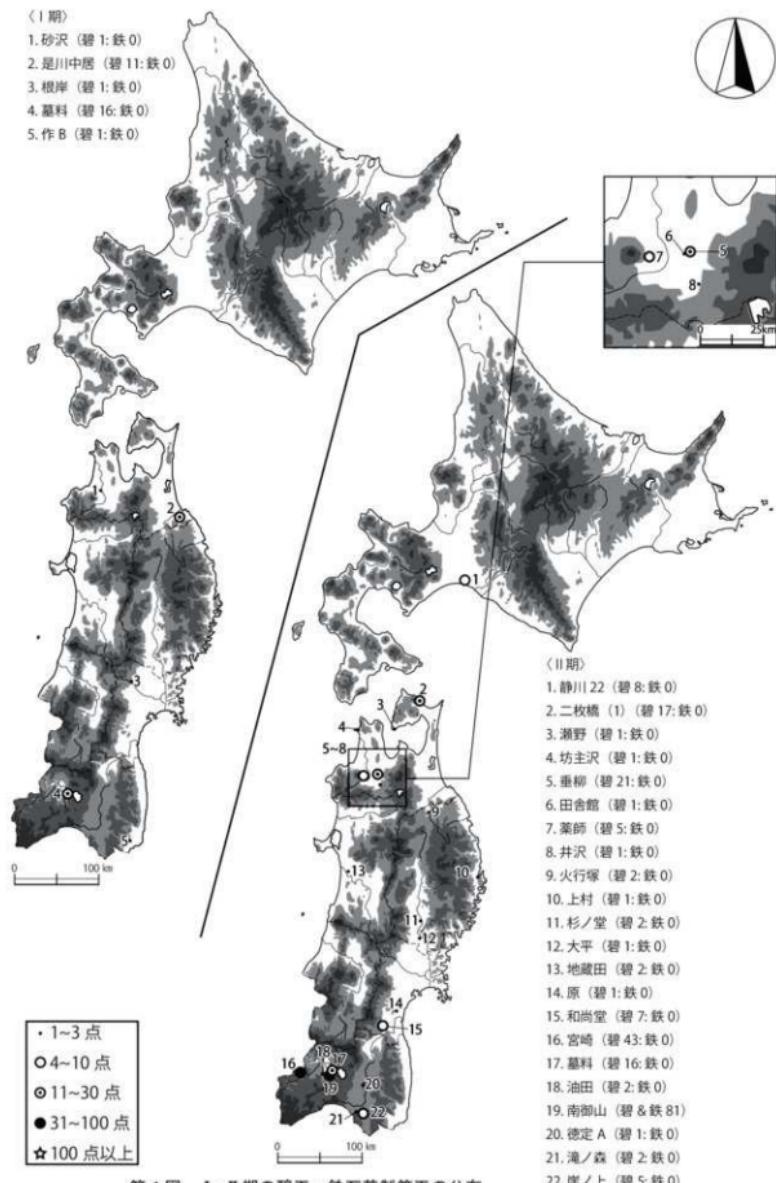
(1) I期（第1図）

この時期には散発的に分布する。出土数が1点の遺跡が多いが、青森県是川中居遺跡では第4号埋設土器の中に10点の碧玉製管玉が納められていた⁽¹⁾⁽²⁾。福島県墓石遺跡では16点の碧玉製管玉が出土しているが、次段階に属する可能性もある。

(2) II期（第1図）

管玉出土遺跡数が急増し、一遺構内から出土する管玉の数も増加する。太平洋側に多く分布する。また管玉が集中的に分布する地域も見られるようになる。

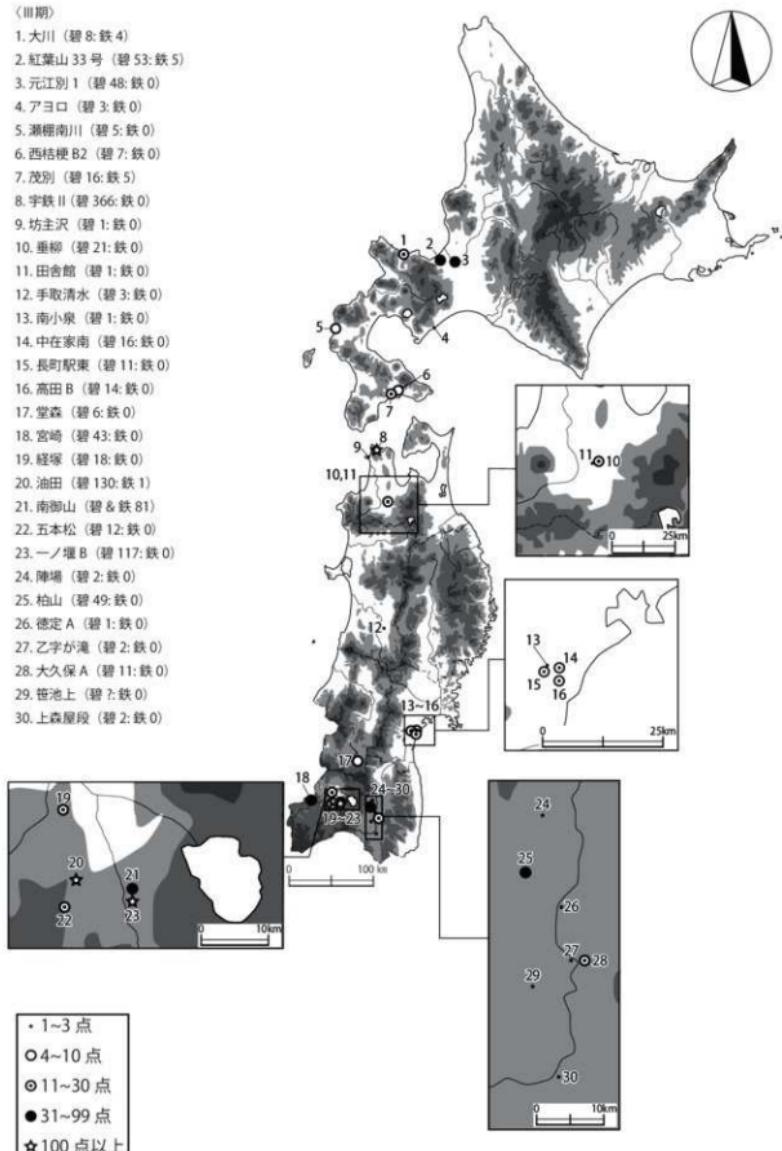
北海道では太平洋に面した静川II遺跡で、第4号土坑墓から2点、第16号土坑墓から6点の碧玉製管玉が出土しているのみで、当地域での管玉の流通はいまだ活発ではない。青森県域では津軽平野、津軽半島、下北半島で管玉が確認されている。いずれも碧玉製である。二枚橋（1）遺跡ではSK85及びその周辺から16点の碧玉製管玉が出土している。垂柳遺跡では合計21点の碧玉製管玉が出土しているが、いずれも遺構外出土である。周辺から出土した土器から次段階に属する可能性もある。福島県宮崎遺跡、南御山遺跡ではさらに多くの管玉が出土しているが、どちらも次段階にまで継続する可能性があり、II期に属する管玉の数量は不明確である。南御山遺跡で出土した鉄石英製管玉も次段階に属す可能性がある。岩手県、宮城県域でも管玉出土遺跡が増加する。1～2点の管玉を出土する遺跡がほとんどであるが、宮城県和尚堂遺跡SK1からは6点、SK2から1点出土している。SK1出土炭化物の年代測定の結果が2210±30yrBPを示すことから、当該期に位置付けられる可能性が高い。



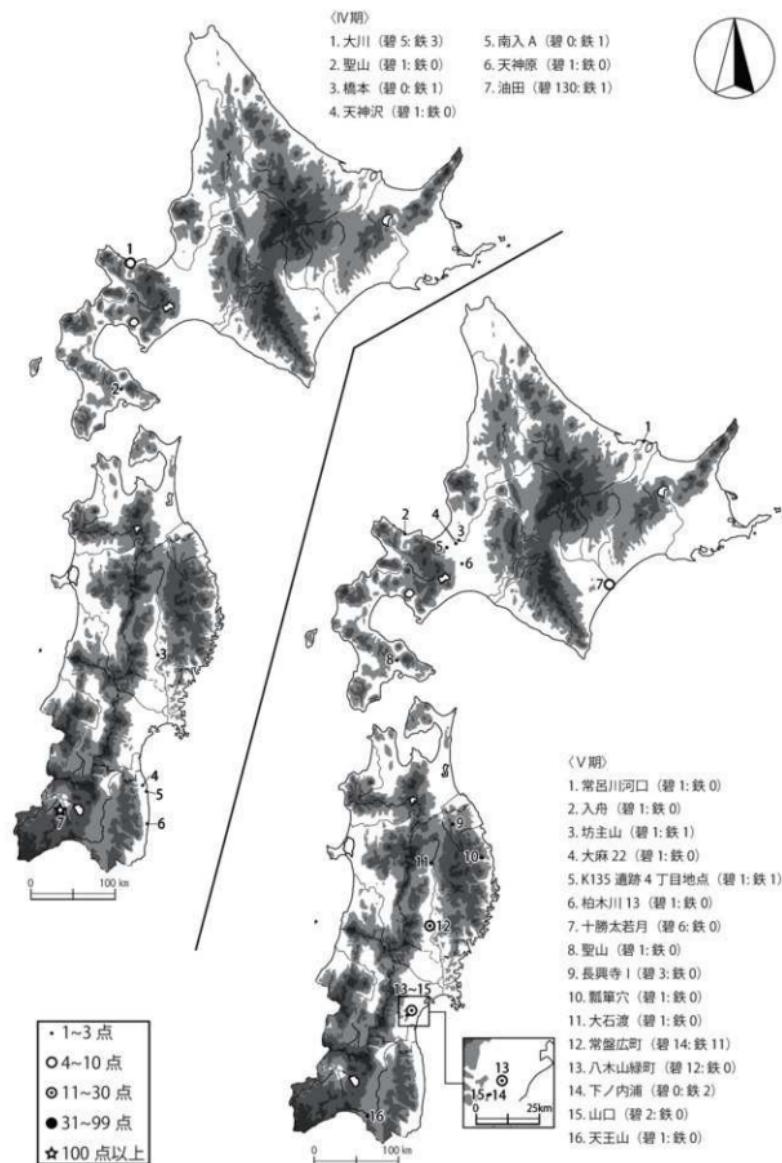
第1図 I・II期の碧玉・鉄石英製管玉の分布

〈Ⅲ期〉

1. 大川 (碧 8; 鉄 4)
2. 紅葉山 33 号 (碧 53; 鉄 5)
3. 元江別 1 (碧 48; 鉄 0)
4. 7ヨロ口 (碧 3; 鉄 0)
5. 潤糸南川川 (碧 5; 鉄 0)
6. 西桔梗 B2 (碧 7; 鉄 0)
7. 茂別 (碧 16; 鉄 5)
8. 宇字 II (碧 366; 鉄 0)
9. 坊主沢 (碧 1; 鉄 0)
10. 垂柳 (碧 21; 鉄 0)
11. 田舎館 (碧 1; 鉄 0)
12. 手取清水 (碧 3; 鉄 0)
13. 南小泉 (碧 1; 鉄 0)
14. 中在家南 (碧 16; 鉄 0)
15. 長町駅東 (碧 11; 鉄 0)
16. 高田 B (碧 14; 鉄 0)
17. 堂森 (碧 6; 鉄 0)
18. 宮崎 (碧 43; 鉄 0)
19. 綾塚 (碧 18; 鉄 0)
20. 油田 (碧 130; 鉄 1)
21. 南御山 (碧 & 鉄 81)
22. 五本松 (碧 12; 鉄 0)
23. 一ノ堰 B (碧 117; 鉄 0)
24. 陣場 (碧 2; 鉄 0)
25. 柏山 (碧 49; 鉄 0)
26. 徳定 A (碧 1; 鉄 0)
27. 乙字が滝 (碧 2; 鉄 0)
28. 大久保 A (碧 11; 鉄 0)
29. 笹池上 (碧 7; 鉄 0)
30. 上森屋段 (碧 2; 鉄 0)



第2図 Ⅲ期の碧玉・鉄石英製管玉の分布



第3図 IV期・V期併行期の碧玉・鉄石英製管玉の分布

(3) III期（第2図）

管玉出土遺跡数が最も多くなり、一遺構内からの管玉の出土量も最多となる時期である。中には管玉出土点数が100点を超える遺跡も出現するようになる。鉄石英製管玉の流通もこの時期には確実に開始される。また北海道での流通が本格化するのもこの時期である。このように北日本における管玉の流通の画期となる時期である。

北海道では道央部から道南部にかけて分布する。大川遺跡や紅葉山33号遺跡、瀬棚南川遺跡のように日本海に面した場所に立地する遺跡も出現する。紅葉山33号遺跡GP-26、GP-52、元江別1号土坑墓19では遠隔地にも関わらず、比較的多くの碧玉製管玉が出土している。また紅葉山33号遺跡GP-26では鉄石英製管玉が5点出土している。青森県では下北半島で管玉が見られなくなるが、津軽半島先端部の宇賀II遺跡第14号土坑墓では356点の碧玉製管玉が出土し、北日本での最多例となる。前時期には散発的に管玉が分布していた岩手県だが、この時期には確認されていない。秋田県では、手取清水遺跡で3点の碧玉製管玉が出土しており、2点が図示されている。いずれも遺構外出土であるが、本遺跡出土土器が手取清水4群を主体とすることからIII期と判断している。宮城県では仙台平野に集中的に管玉出土遺跡が分布する。中在家南遺跡SK-36や長町駅東遺跡SK214では比較的多く出土している。山形県では堂森遺跡1号土坑から6点の碧玉製管玉が出土している。福島県では前時期よりもさらに管玉出土遺跡が増加するが、浜通りには分布していない。一遺構内から多量に碧玉製管玉が出土するケースが増加し、一ノ堰B遺跡1号土坑墓では65点、73号土坑墓では34点、柏山遺跡第2号小堅穴では21点の碧玉製管玉が出土している。油田遺跡からも大量に管玉が出土しているが、一部は次段階に属する可能性がある。南御山遺跡では碧玉製、鉄石英製の管玉が合計81点出土しているが、その内訳は不明である。

(4) IV期（第3図）

管玉出土遺跡数が減少し、一遺構内から出土する管玉も1～3点程度となる場合が多い。また鉄石英製管玉のみを出土する遺跡が出現するようになる。

前時期まで管玉が集中的に分布する青森県域であるが、確実にIV期に属する碧玉・鉄石英製管玉は未確認である。岩手県では橋本遺跡で鉄石英製管玉が1点出土している。福島県では油田遺跡出土の管玉の一部がこの時期に当たる可能性があるものの、明確な数量は不明である。前時期まで管玉が集中していた会津・中通りではほとんど見られなくなる。一方、前時期まで希薄だった浜通りでは新たに3遺跡が出現する^(注3)。管玉はいずれも1点のみと少ない。南入A遺跡では鉄石英製管玉のみが1点出土している。

(5) V期（第3図）

管玉出土遺跡数が前時期に比べると増加するものの、依然として1～3点の管玉を出土する遺跡が主である。北海道ではその分布域を道東まで拡大させる。本州島では太平洋側にのみ分布する。鉄石英製管玉が前時期に比べ、その分布量を増加させる。岩手県常盤広町遺跡では一遺構内から碧玉製14点、鉄石英製11点が出土している。北海道坊主山遺跡でも墓壙から各1点ずつ出土している。K135遺跡4丁目地点でも各1点出土しているが、いずれも遺構外出土である。宮城県下ノ内浦遺跡では鉄石英製管玉のみが2点出土している。

3 III期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通の背景

前項では北日本における碧玉・鉄石英製管玉の分布を見てきた。I期からIII期にかけて、出土遺跡数、出

土量とともに増加し、流通が活発化していく様子が確認された。またⅢ期においては集中的に管玉が分布する地域が出現し、宇鉄Ⅱ遺跡に代表されるように一遺構内から大量に管玉が出土する事例も最多となることが判明した。さらに当期にはその分布域が拡大し、石狩低地帯まで広く分布・流通するようになる。このようにⅢ期の北日本において、管玉の流通が活発になる背景には一体何があったのか。この問題を解くために玉作集団の展開と、流通を担った集団について見ていくこととする。

(1) 玉作集団の展開

北陸でもⅢ期になると管玉製作の様相に変化が見られる。それまで石川県八日市地方遺跡、福井県下屋敷遺跡などに代表される北陸西部の玉作遺跡において、ヨコ割りとタテ割りの施溝分割を併用する管玉製作が行われていたが、八日市地方7期前半になるとタテ割りの施溝分割技術を主体とする管玉製作を行う集団が出現する^(注4)。富山県江尻南遺跡ではタテ割りの施溝分割をより多く採用した管玉製作が行われていることが明らかになり、共伴する土器もタテ割りを主体とする玉作遺跡の中では最古となることから「当遺跡周辺が新穂技法を確立した有力候補地の1つとなるだろう」(高岡市教育委員会 2017)と報告された。

筆者は江尻南遺跡出土の管玉未成品について、四角柱状素材(分割・形割c)作出に至るまでの施溝分割手順を分析した結果、当遺跡ではタテ割りを主体とするものの、八日市地方7期後半以降の北陸東部の施溝分割手順に比べるとヨコ割りの出現頻度が高いことから、管玉製作技術の面でも古手の様相を呈していると考えた(大上 2019a)。このように八日市地方7期前半にはタテ割りの施溝分割を多用する集団が登場し、八日市地方7期後半以降になると、石川県羽咋市以東ではさらにタテ割りに特化し、施溝分割手順にも強い共通性がみられる管玉製作が行われるようになることから、筆者はこの地域を「タテ割り主体地域」と呼んだ。またこの地域には量の多寡はある、秋田県域、福島県域の土器及びそれらの影響を受けた土器が分布することから、主要供給先の一つに東北方面が考えられるとした(大上 2019b)。このように、Ⅲ期の北日本で管玉流通量が増加する背景の一つに、タテ割り主体地域での管玉製作の開始が考えられる。

(2) 流通を担った集団

では、生産地から消費地へ管玉はどのようにして持ち込まれていたのだろうか。

Ⅲ期の秋田県域には横長根A式が分布する。横長根A式のハケメ整形は新潟平野北部において、古い段階の小松式(八日市地方7~8期)の間接的影響を受けたことにより採用された(石川 2012)。またこの時期に男鹿半島周辺に遺跡が増加するのだが、それらの立地も新潟平野北部と類似することが指摘されている(石川前掲)。そしてⅣ期になると田舎館式、恵山式、小松式の要素を取り込む宇津ノ台式土器が成立する。石川は北方、南方両地域との共通性をもつ宇津ノ台式土器がより西方に分布を拡大させるとともに、宮城県北部、岩手県といった隣接地にも散見されることから、宇津ノ台式土器集団が碧玉・鉄石英製管玉の広域流通に大きな役割を担ったとした(石川 2004)。

このようにⅢ~Ⅳ期の秋田県域の集団が北陸東部及びその周辺と活発な交流を続けていたにも関わらず、当地域に碧玉・鉄石英製管玉が少なくなるのは不自然であると感じられるかもしれない。しかし、それは自らが管玉を消費すると考えた場合である。他所から入手した管玉をさらに別な場所へ流通させた場合、そこに残る管玉の数は少なくなるだろう。Ⅲ~Ⅳ期の北日本の管玉の分布を見た際、秋田県域で希薄となるのは、そこにいた集団がそもそも消費者ではなかったことを示すと考えられる。生産地と消費地を往来し、物資を広域に流通させた「仲介者」(レンブルー他 2007)の可能性がある。宇鉄Ⅱ遺跡、紅葉山33号遺跡、元江別1遺跡のように、遠隔地にも関わらず管玉を多く有する遺跡が日本海側に偏ることもその証拠の

一つとなろう。

Ⅲ～Ⅳ期には南御山2式、二ツ釜式、川原町口式土器及びそれらの影響を受けた土器も北陸で確認されるのみならず、小松式土器類似の土器が福島県域で出土することから福島県域の集団も玉作遺跡及びその周辺で碧玉・鉄石英製管玉を入手していたと考えられる。しかし福島県域の集団は自らも管玉を大量に消費しており、この点が秋田県域の集団とは決定的に異なる^(註5)。

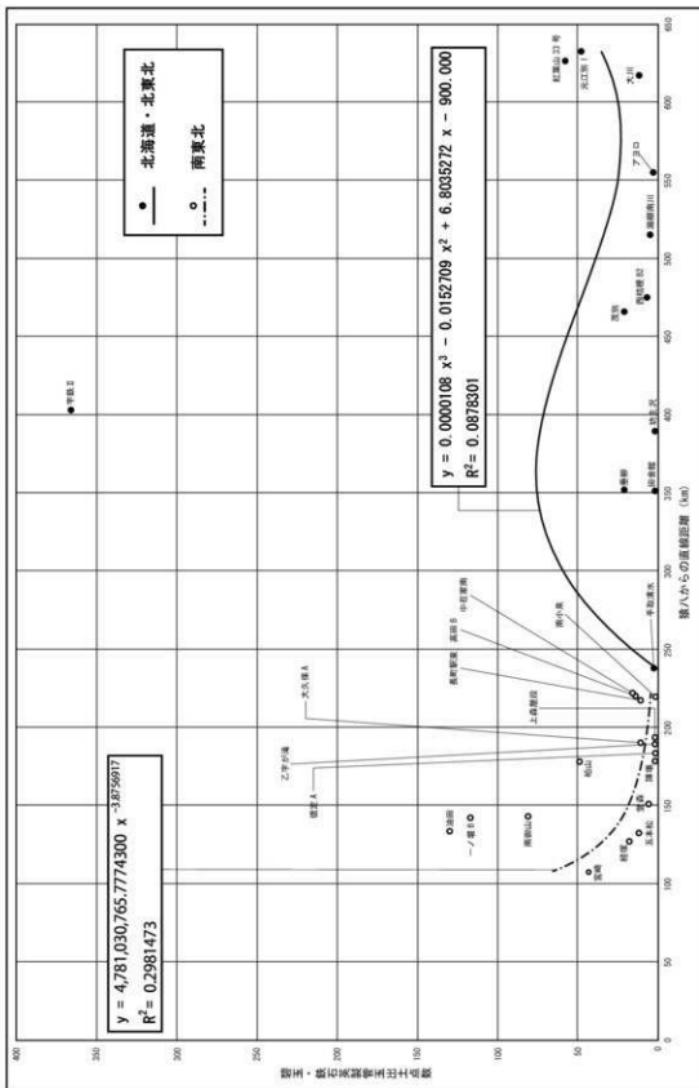
なお、垂柳遺跡では南御山2式土器、西桔梗B2遺跡では龍門寺式系統の土器が出土し、噴火湾から駿河地方にかけての太平洋沿岸域では側面索孔回転式鉢頭が分布することから、福島県域の集団が遠隔地と交流を行っていたことが明らかになっている（鈴木2000、石川2001、設楽前掲）。それに加えて、西桔梗B2遺跡では北陸起源と考えられるミニチュア土器と龍門寺式土器の影響を受けたと考えられる土器が、茂別遺跡ではミニチュア土器が出土していることから、福島県域の集団が北海道・北東北へ管玉を運んだ可能性も指摘されている（相澤前掲）。しかし筆者は、会津・中通りでの管玉消費量が膨大であるためにこの可能性は低いと考える。側面索孔回転式鉢頭の分布から北海道までは浜通りから太平洋沿岸域を経由するルートが想定されるが、猿八から浜通りに至る途上では、会津・中通りにおいて大量に管玉が消費されている。浜通りに管玉がもたらされるのはⅣ期を待たなければならず、出土してもその量は少ないとみ、Ⅲ～Ⅳ期に北方へ流通させるほどの余剰があったとは考えにくい。そのため、福島県域の集団を介した管玉の流通網は南東北に限られると推測される^(註6)。この流通経路を「太平洋側内陸部ルート」と呼称する。

このようにタテ割り主体地域で玉作が開始、盛行するⅢ～Ⅳ期には秋田、福島県域の集団がそこへ進出し、管玉を入手するが、それぞれの流通経路上での交易システムは異なる可能性がある。

4 原産地からの距離と管玉出土点数の減少パターンからみた二つの交易システム

次に、原産地からの距離に応じた管玉出土点数の減少パターンに着目し、前項で示した仮説を検証していきたい。交易システムが異なる場合、管玉出土点数の減少パターンも異なる様相を示すはずである。なお対象とするのは、管玉生産地がある程度推定でき、資料数が最も多いため傾向が掴みやすいⅢ期に限定し、原産地は佐渡の猿八とする。東北系土器がタテ割り主体地域に分布することと、藁科を中心とした螢光X線分析により、北日本では猿八産の碧玉が多用されていることが判明しているからである。福島県宮崎遺跡では女代南B群が主体を占めるが、これは時期差が関係していると考えられる。宮崎遺跡はⅡ～Ⅲ期にまたがる可能性があるが、Ⅱ期には佐渡を含むタテ割り主体地域で管玉製作が行われていない。Ⅱ期から管玉製作を行っている。より西方の玉作集団から管玉を入手した可能性がある。

第4図は、猿八からの直線距離（X軸）と管玉出土点数（Y軸）について、各遺跡のデータをプロットしたものである。また、あくまで視覚的な理解を促すために、最小二乗法により近似しそれぞれの管玉出土点数の減少パターンのモデルを提示した。これはMicrosoft Excelの近似曲線オプションを用いて最小二乗法を実施し、作成したものである。北海道・北東北（ $237.98 \leq x \leq 626.24$ ）の近似曲線を選択する際に基準としたのはデータの変動の数と R^2 （決定係数）である。一般的には R^2 が高いほどより妥当なモデルを示しているとされるが、北海道・北東北の近似曲線の場合、多項式近似の次数を四次以上に設定すると R^2 はより高くなるものの、yがマイナス値をとってしまい、実態にそぐわない。そのため三次式を用いている。また切片は-900に設定しているが、これは $x=237.98$ （猿八から手取清水遺跡までの直線距離）の時、yがマイナス値にならないようにするためである。南東北（ $107.05 \leq x \leq 219.98$ ）については、xが増加する



第4図 原産地からの距離と管玉出土地点数の関係

につれ γ の減少率が小さくなるため累乗近似を用いた。なお、ここでは対数変換したデータに対して最小二乗法を適用している。では、この図から読み取れることを確認していきたい。

南東北では猿八からの距離が離れるにつれ管玉出土点数は減少する。それに対して、北海道・北東北では猿八からの距離と管玉出土点数に相関関係は見られない。比較的距離が離れている宇鉄II遺跡や紅葉山33号遺跡、元江別1遺跡での出土量は多いが、より距離が近いはずの手取清水遺跡などでの出土量は少ない。このように、南東北と北海道・北東北では異なる減少パターンが確認され、それは前項で想定したような交易システムの違いを示していると考えられる。

つまり、南東北では原産地により近い集団が優先的に品物を入手し、それを自己消費しながら、残った一部を近隣の集団へ受け渡すという行為が連続して行われたと推測される。隣接する二者間での財の授受が結果的に連鎖した形態、いわゆるリレー式の財の移動を示す。そのために原産地から離れるほど管玉出土点数が少なくなるのである。それに対して北海道・北東北では原産地からの距離と管玉出土点数に相関関係は見られず、原産地により近い集団がより多くの管玉を消費するわけではないことがわかる。宇鉄II遺跡や紅葉山33号遺跡、元江別1遺跡など遠隔地にもかかわらず管玉を多く保有する遺跡の集団が、直接生産地へ赴く可能性は低い。当地域の土器が北陸で確認されていないからである。生産者が当地域へやってくる可能性についても、同様の理由から低いと考えられる。消費者間同士でのリレー式の財の授受では、流通経路上でそれらが消費されるために分布範囲に限界がある^{註9}。そのためⅢ期の北日本において、生産地から200kmを超えるような遠隔地で碧玉・鉄石英製管玉が多量に出土するという現象は、このような交易システムでは説明がつかない。自己消費を目的とせずに、原産地から品物を入手し、他集団へもたらす仲介者を想定する必要がある。そして繰り返しになるが、土器のあり方と管玉の分布状況から秋田県域の集団を仲介者として位置づけるのが最も妥当である。また、仙台平野に位置する長町駅東遺跡、高田B遺跡、中在家南遺跡は猿八からの距離が離れているにもかかわらず管玉出土点数が若干多い。福島県域の集団のみを介して管玉を入手したと考えると、その数はより少なくなるはずである。秋田県域の仲介者が仙台平野周辺まで足を伸ばしていた可能性がある。このように、北海道・北東北、仙台平野周辺では原産地からの距離と管玉出土点数に相関関係は見られず、その背景には仲介者の存在があったと考えられる。彼らを介した、この流通経路を「日本海沿岸ルート」と呼称する。

おわりに

北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通について、Ⅲ期を中心見てきた。これまでの検討をまとめると次のようになる（第5図）。

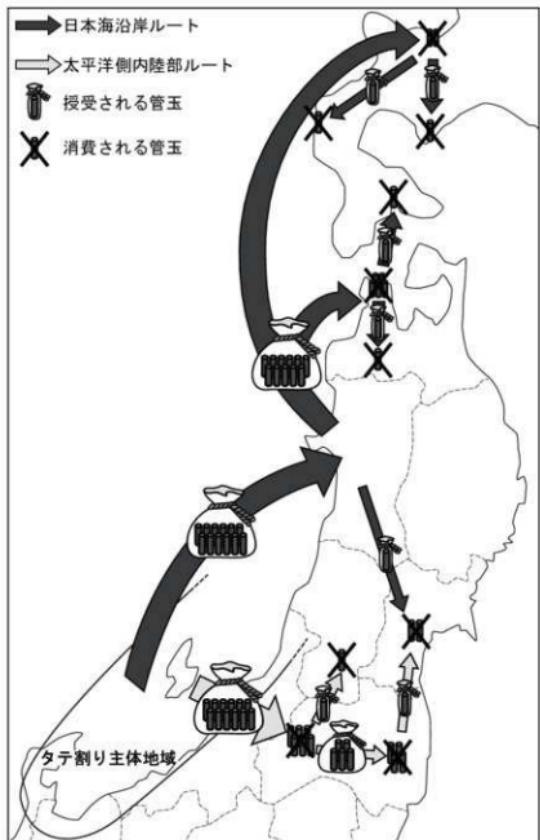
北陸のタテ割り主体地域において新たな技術を駆使した管玉製作が開始すると、当地域周辺へ福島県域、秋田県域の集団が進出し管玉を入手するようになる。そして前者は南東北へ、後者は北海道・北東北、仙台平野付近まで管玉を流通させる。福島県域の集団を介する太平洋側内陸部ルート上では、消費者間でリレー式に管玉が授受されていたために、原産地からの距離が離れるにつれてその流通量は減少する。それに対して、日本海沿岸ルート上では秋田県域の集団が仲介者としての役割を担うことで、管玉が遠隔地へ多量に流通していた。そのために原産地からの距離は管玉の多寡に影響しない。

このように北日本の碧玉・鉄石英製管玉の広域流通を担う仲介者として、秋田県域の集団の果たした役割は大きかったのである。今回はⅢ期を中心見てきたが、その後の時期においても秋田県域では他地域

に比べると管玉出土点数は少なく、IV期には宇津ノ台式系土器がその分布域をさらに拡大させる。彼らが仲介者としての役割を果たしていた時間はより長かった可能性がある。

なお北海道・北東北においては、仲介者から管玉を多量に入手した集団がさらに周辺の集団へその一部を再分配するか、あるいは仲介者がそれぞの集団へ何らかの理由により供給量を調整しながら受け渡すという二つの可能性がある。また仙台平野で管玉が多く見られる理由として、仲介者から管玉を多く入手できたからと考えることもできるが、あるいは太平洋側内陸部ルートと日本海沿岸ルートの両ルートから管玉を入手したために、その合計数が多くなるという推測も成り立ちそうである。これらについては、今後も管玉の分析を継続していくことで明らかにしていきたい。

最後に、今回は管玉の少なさから秋田県域の集団を仲介者として推測したが、そもそも管玉を流通させることで得た報酬を明らかにしなくては、この説が成り立たないことは言うまでもない。他地域に比べて出土数が突出する遺構・遺物、あるいは自らが獲得・生産していない非自給物資が管玉交易の報酬に相当する可能性があり、その解明のためには管玉以外の考古資料についても、秋田県域と周辺地域の比較検討を行っていく必要があるだろう。



第5図 III期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通

註

- 縄文時代晩期末以降、東北では弥生文化、北海道では続縄文文化が展開する。本稿ではこの時代を弥生時代併行期と呼ぶ。
- 大賀は是川中居遺跡出土の碧玉製管玉を佐渡産と考え、その所属時期は北陸東部で管玉製作が始まる段階まで下ると述べている（大賀 2010）。しかし北陸東部での管玉製作はIII期以降に開始されるため矛盾が生じる。是川中居遺跡第4号埋設土器の時期は砂

- 沢式期であり、当遺出土のような直径6mm以上の太形管玉がⅠ期の北東北に分布することが明らかにされている（根岸2020）ことから、当期に位置付けるべきと考える。
- 3 いわき市平塙諸荷遺跡では碧玉製管玉18点が出土しており、時期はⅡ～Ⅳ期の可能性がある（財団法人いわき市教育文化事業団1998、高島2003）。
 - 4 従来、ヨコ割りの施構分割を多用し、その後に研磨を行うのが「大中の湖南技法」（佐藤宗1970）、タテ割りの施構分割後に側面剥離を行うのが「新他技法」（計良・椎名1961）と定義されており、石川県の邑知郡、河北郡周辺を境界にして西に前者、東に後者が分布するとされてきた（寺村1980）。
 - 5 福島県域では第1～3回に示した遺路のみならず、所属時期が不明確なため今回対象としなかったが、いわき市平塙諸荷遺跡（財団法人いわき市教育文化事業団1998、高島2003）で18点、石川町鳥内遺跡（石川町教育委員会1998）で33点、下郷町五百地遺跡（樋口1983）で6点、いわき市砂畠遺跡（財団法人いわき市教育文化事業団2002）で1点の碧玉製管玉が出土している。
 - 6 米沢市堂森遺跡1号土坑は「ノマノ彫B型土坑墓」の可能性が指摘されており、会津方面の墓制が採用されている（佐藤祐2011）ことから、碧玉製管玉も会津方面からもたらされたと推測される。
 - 7 大久保徹也は、「互酬連鎖交換」（レンフルー他2007）に相当するモデルである「バケツリレー方式」での財流通のシミュレーションを行った（大久保2008）。このモデルでは、供給された財を各集団が消費するために二者間での交換の度にその量が減り、広域に財が流通しないことが明らかになった。また大久保は、財の供給量を増加させた場合を想定すると、その広域流通は達成されるものの、各集団が自己消費分を大幅に超える量を授受するという点が二者間での交換としては不自然であると述べた。そこでこのモデルの実態は、「個別的・局所的な二者間交換の連鎖あるいは累積」ではなく、「全体的な財の分配過程の一コマ」であり、「財の提供者と受け手の間に仲介役が差し込まれるようなスタイルが起因的に発生する形式」であるとした。つまり「仲介者に媒介された財の移動・拡散」がその本質であると述べた。筆者は本稿においてリレー式の財の移動について考える際、大久保の論を大いに参考にしているが、「仲介者」についての認識は異なる。大久保は自己消費分を確保しながら他の多くを引き渡す存在と考えているが、本稿では自己消費せず、物資を流通させる存在を「仲介者」と呼んでいる。大久保は、「仲介者」が一ヵ所にとまるか、各所を巡回するかは確定しがたいと述べているが、レンフルーは「仲介者」について「旅をしながら消費者へ様々な物資を届け」、その目的は「利潤を追求するため」としている（レンフルー他前掲）。つまり入手した物資の自己消費が主目的ではない。そのように考えると、弥生時代併行期の北日本では、入手した物資を自己消費しないにも関わらずその生産地へ赴く集団が存在しており、彼らこそ「仲介者」にふさわしいと言えよう。

引用・参考文献

- 相澤清利2019「東北地方における北陸系弥生土器の模倣について」『宮城考古学』21 15～32頁 宮城県考古学会
 青野友哉1999「碧玉製管玉と琥珀製玉類からみた統調文化の特質」『北海道考古学』35 69～82頁 北海道考古学会
 石川日出志2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』113 57～94頁 駿台史学会
 石川日出志2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』120 47～66頁 駿台史学会
 石川日出志2012「弥生時代中期の男鹿半島と新潟平野の道路群」『古代学研究所紀要』17 15～31頁 明治大学古代学研究所
 石川日出志編2005『関東・東北弥生土器と北海道統調文土器の広域編年』明治大学考古学研究室
 石川町教育委員会1998『鳥内遺跡発掘調査報告書』
 大上立朗2019a「北陸の施構分割技術とその展開」『2019（令和元）年度 日本玉文化学会あわら大会研究発表要旨』11～20頁 日本国玉文化学会あわら大会実行委員会
 大上立朗2019b「弥生中期後半における北陸玉作集団と東北系集団」『秋田考古学』63 43～59頁 秋田考古学協会

- 大賀克彦 2001 「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』86-4 321-362頁 日本考古学会
- 大賀克彦 2010 「女代南B群碧玉製管玉に関する認識」『中原遺跡IV』280-293頁 佐賀県教育委員会
- 大久保徹也 2008 「バケツリレーの物資調達方式は有効なモデルか? - または弥生社会は如何にして心配することを止めて非自給物資を調達したか-」『日本史の方法』7 78-89頁 日本史の方法研究会
- 大坂拓 2007 「恵山式土器の編年-北海道島南部における続繩文時代前半期土器編年の再検討-」『駿台史学』130 58-83頁 駿台史学会
- 大坂拓 2010a 「続繩文時代前半期土器群と本州島東北部弥生土器の並行関係」『北海道考古学』46 89-104頁 北海道考古学会
- 大坂拓 2010b 「田舎館式土器の再検討-津軽平野南部における弥生時代中期土器型式の変遷と型式間交渉-」『考古学集刊』6 39-66頁 明治大学文学部考古学研究室
- 大坂拓 2012 「仙台平野の弥生土器」『発掘富沢!!』34-39頁 仙台市教育委員会
- 大坂拓 2015 「北海道(南部・中央部)『弥生土器』考古調査ハンドブック12 447-473頁 ニューサイエンス社
- 計良由松・椎名卓也 1961 「後期弥生式文化の攻玉法-佐渡新徳王作遺跡群の資料を中心として-」『考古学雑誌』47-1 19-25頁 日本考古学会
- コリン・レンブルー・ポール・バーン 2007 「考古学-理論・方法・実践」東洋書林
- 斎野祐彦編 1998 『アクセサリーの考古学』財団法人仙台市歴史文化事業団 仙台市富沢遺跡保存館
- 佐藤宗男 1970 「大中の湖南遺跡における玉作について」『古代文化』22-1 10-19頁 古代学協会
- 佐藤祐輔 2011 「米沢市堂森遺跡の再検討-東北地方南部・弥生時代中期後半の墓制について-」『地底の森ミュージアム・論文の森』広場研究報告2010』 2-23頁 (財)仙台市民文化事業団仙台市富沢遺跡保存館
- 佐藤祐輔 2015 「東北」『弥生土器』考古調査ハンドブック12 397-446頁 ニューサイエンス社
- 財団法人いわき市教育文化事業団 1998 『平塙諸荷遺跡』
- 財団法人いわき市教育文化事業団 2002 『荒田目条里制遺構・砂畠遺跡』
- 設楽博巳 2003 「続繩文文化と弥生文化の相互交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』108 17-44頁 国立歴史民俗博物館
- 下濱貴子 2016 「第IV章 科学的年代測定の成果と広域編年」『八日市地方遺跡II 第5部土器・土製品編 第6部自然化学分析編 第7部補遺編』 319-330頁 小松市教育委員会
- 鈴木正博 2000 「『明神越式』の制定と『恵山式縁辺文化』への途」『茨城県考古学雑誌』12 15-40頁 茨城県考古学協会
- 高岡市教育委員会 2017 『江尻南遺跡』
- 高島好一 2003 「東日本最大の弥生墓跡-いわき市平塙諸荷遺跡-」『発掘ふくしま3』 30-34頁 福島県立博物館
- 高瀬克範 2014 「続繩文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』185 15-61頁 国立歴史民俗博物館
- 寺村光晴 1974 「西桔梗 B2 遺跡の管玉-弥生時代文物の東北進と管玉の問題」『西桔梗-函館圓流通センター建設用地内遺跡調査報告書』 436-459頁 函館圓開発事業団
- 寺村光晴 1980 『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館
- 寺村光晴 1990 「タマの道-タマからみた弥生時代の日本海-」『日本海と北国文化』 133-158頁 小学館
- 根岸 洋 2005 「志藤沢式土器の研究(1)~秋田大学所蔵資料の再報告を中心に~」『秋田考古学』49 1-33頁 秋田考古学協会
- 根岸 洋 2006 「志藤沢式土器の研究(2)-秋田県内の弥生前期・中期の土器編年について-」『秋田考古学』50 1-23頁 秋田考古学協会
- 根岸 洋 2016 「繩文-弥生時代における人・モノの動き」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』30 1-18頁 秋田県埋蔵文化財センター

- 根岸 洋 2020 「第11章 東北北部における碧玉製管玉」『東北地方北部における縄文／弥生移行期論』 209–215頁 雄山閣
- 樋口弘一 1983 「南会津郡下郷町五百地遺跡の弥生式土器」『福島考古』24 1–32頁 福島県考古学会
- 廣瀬時習 2004 「続縄文時代の装身具をめぐる諸問題」『弥生のころの北海道』 68–73頁 大阪府立弥生文化博物館
- 本間元樹 1995 「恵山文化にみる弥生文化的要素・序説」『大阪府埋蔵文化財センター研究助成報告書 研究紀要』2 35–57頁 大阪府埋蔵文化財センター
- 萬科哲男 1998 「茂別遺跡出土のヒスイ製玉、碧玉製管玉の産地分析」『上越町茂別遺跡』第2分冊 14–38頁 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 萬科哲男 2000 「K435遺跡、K135遺跡出土の玉類の産地分析」『K435遺跡 第2次調査』 159–168頁 札幌市教育委員会
- 萬科哲男・東村武信 1995 「大川遺跡出土管玉の産地分析」『1994年度大川遺跡発掘調査概報』 26–37頁 余市町教育委員会
- 萬科哲男・東村武信 1996a 「入舟遺跡出土管玉の産地分析」『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』 22–29頁 余市町教育委員会
- 萬科哲男・東村武信 1996b 「大中山13遺跡出土管玉の産地分析」『七飯町大中山13遺跡(3)』 44–51頁 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 萬科哲男・福田友之 1997 「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査年報』21 青森県立郷土館 83–92頁
- 萬科哲男・周東一也・渡部明美・設楽博己 2016 「福島県金山町宮崎遺跡再発掘出土弥生時代玉類の産地分析」『福島県立博物館紀要』30 福島県立博物館 29–61頁

第2表 北日本における碧玉・鉄石英製管玉出土遺跡（1）

弥生時代併行期の北日本における碧玉・鈍石英製管玉の流通

第3表 北日本における碧玉・鉄石英製管玉出土遺跡（2）

（論考）湯沢市館堀城跡出土の在地瓷器系陶器

小山 美紀*

はじめに

秋田県内の中世城館や拠点的集落遺跡からは、12～16世紀に生産された中世陶器が多く出土する。国産の中世陶器はその系譜から瓷器系と須恵器系に二分され、東北地方では瓷器系陶器は主に太平洋側、須恵器系陶器は日本海側を中心に流通する傾向にある。秋田県内では、能代市のエヒバチ長根窯跡と大仙市の南外窯跡群の2か所の須恵器系陶器生産地が確認されており、遺跡から出土する中世陶器も須恵器系陶器が大半を占める。瓷器系陶器が出土する遺跡は僅かしか知られていない。

このように県内では瓷器系陶器の出土自体が稀であるが、湯沢市に位置する館堀城跡は、在地産の瓷器系陶器（以後、在地瓷器系陶器と呼ぶ）が出土した特異な遺跡である。この在地瓷器系陶器は、常滑窯の影響を受け生産が開始された常滑系在地瓷器系陶器であり、本稿では他の常滑系在地瓷器系陶器との比較検討から具体的な生産地比定を試みる。また、付着漆や袋物需要、新興勢力者の台頭を踏まえて、在地瓷器系陶器が館堀城跡へ持ち込まれた経緯についても検討したい。

1 館堀城跡の概要

館堀城跡は、湯沢市寺沢字館堀に位置する（第1図）。雄物川の支流である役内川から東へ約300m、東西を尾根状にのびる山々に囲まれた標高約165mの河谷低地に立地する。県営は場整備事業に伴い、平成11（1999）年に発掘調査が行われた。調査の結果、二重に巡る堀をはじめ、掘立柱建物跡97棟や溝跡37条、柱穴列7条、堅穴状遺構7基、火葬墓36基等が検出され、13～14世紀を中心とする方形居館であることが判明した（第2図）。外堀（SD01）は上幅3.4～8.2m、深さ1～1.9m、内堀（SD02）は上幅4.7～7.8m、深さ1.4～1.8mで、堀に伴う土壙状の高まりも確認されたが、後世の耕作による改変を受けており規模や形状は不明である。出土した遺物から内堀は13世紀代とされるが、外堀の構築時期は不明である。その他の遺構からも概ね13～15世紀の遺物が出土した。

国産陶磁器は未報告を含め、計770点が出土した。瓷器系陶器は計528点でそのうち20点が図示され、在地瓷器系陶器を除くと、古瀬戸製品は鉢皿2点、小鉢1点、入子1点、花盆2点、

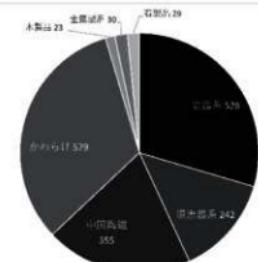


第1図 遺跡位置図

*秋田県埋蔵文化財センター文化財主事



第2図 館堀城跡遺構配置図（秋田県教委2001aに加筆）



折縁深皿 1 点、越前窯製品は甕 3 点、広口壺 1 点である。その他に山茶碗（尾張型 5 型式 1 点、東濃型大烟大洞古・新段階各 1 点、大洞東 1 点）がある（高橋 2003）。須恵器系陶器は計 242 点で、そのうち甕 4 点、壺 T 種 1 点、四耳壺 1 点、小壺 2 点、擂鉢 25 点の 33 点が図示された（第 1 表）。その中には大仙市に位置する南外窯跡群製品 2 点、能代市に位置するエビバチ長根窯跡製品と思われる製品が 3 点確認され^(注1)、これらの在地須恵器系陶器は未掲載資料にも多数含まれている。中国陶磁は青磁、白磁、青白磁、染付が出土した。青磁は碗・杯・皿・香炉等が 261 点出土しており、同安窯系 1 点を除き、大半が龍泉窯系である。白磁は壺・碗・皿・香炉等が 49 点、青白磁は合子・小壺蓋・碗・壺・皿・瓶等が 35 点、明代の染付皿が 10 点出土した。その他には、かわらけ 579 点（手づくね 1 点）、楓・箸等の木製品 23 点、経筒蓋・錢貨等の金属製品 30 点、硯や砥石等の石製品 29 点など多くの遺物が出土した（秋田県教育委員会 2001a）。高橋学は館堀城跡の出土遺物について、かわらけと中国陶磁の出土点数の多さ、須恵器系陶器を凌駕する瓷器系陶器の出土比率（第 3 図）、出土事例の少ない山茶碗と滑石製石鍋の出土を出羽北半の常識を覆す特筆すべき事項と指摘している（高橋 2004）。

2 報告された在地瓷器系陶器

報告された在地瓷器系陶器は、9 点でいずれも甕である（第 4 図、第 5 図 4～9）。検討を試みるにあたり、以下に個別の計測値や調整技法、胎土等の観察結果を記述する。

【第 4 図 1】口径 35.2 cm、口縁～胴部残存高 29.4 cm、最大径 58.1 cm である。口縁部は受け口状を呈し、縁帯幅は 1.7 ~ 1.9 cm である。頸部はハの字に開き、肩はややいかり肩となる。口縁部は指ナデ調整が施され、頸基部は 1 段強いナデ調整が行われる。肩～体部内面は丁寧な横ナデ調整が施され、肩部外面は横ナデ・ヘラナデ調整、体部外面はヘラ搔き上げ調整が施される。体部内面には漆が付着し、外面は凍て割れがみられる。器表面は灰白色～灰色を呈し、自然釉がかかる。胎土は密で 2 ~ 6 mm 大の白色礫を含み、灰色を呈する。

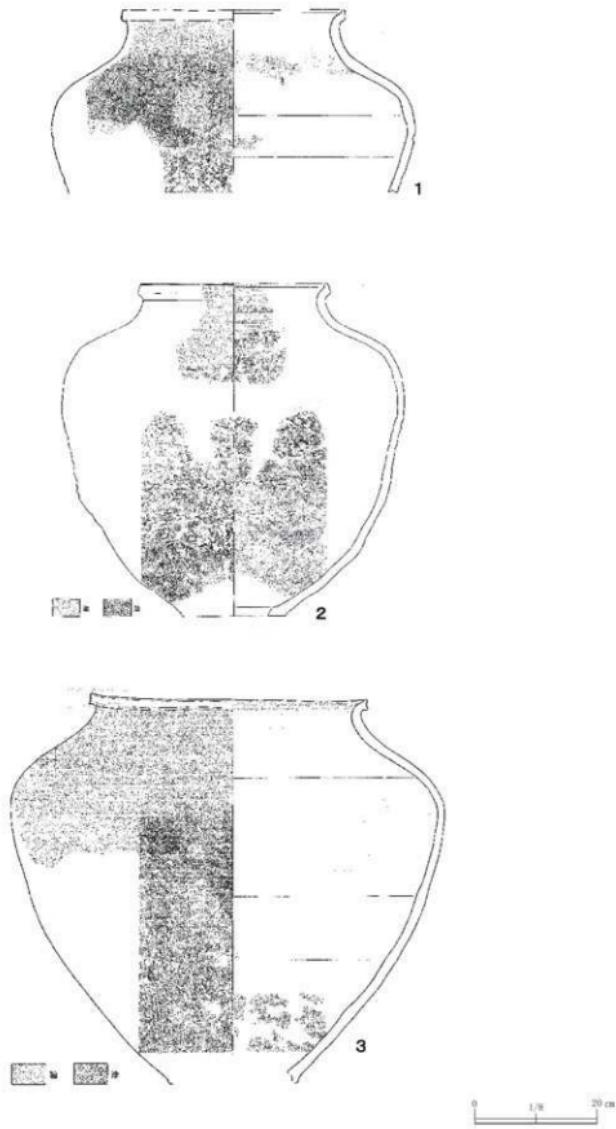
【第 4 図 2】口径 34.5 cm、器高 53.7 cm、最大径 55.0 cm、底径 16.6 cm である。口縁部は受け口状を呈し、縁帯幅は 2.1 cm である。頸部はハの字に開き、底部～胴部は屈曲点が多く成形段階がよく分かる。調整をみると、口縁部は指ナデ調整が施され、肩部～体部内面は凍て割れにより調整が不明瞭であるが、体部下半は丁寧なナデ調整が施される。外面は肩部周辺と体部下半にヘラ搔き上げ調整が確認できる。体部内面だけでなく、外面や底部にも漆が付着している。器表面はオリーブ褐色を呈し、

胎土は密で2~3mmの大白色礫を含み、灰色を呈する。

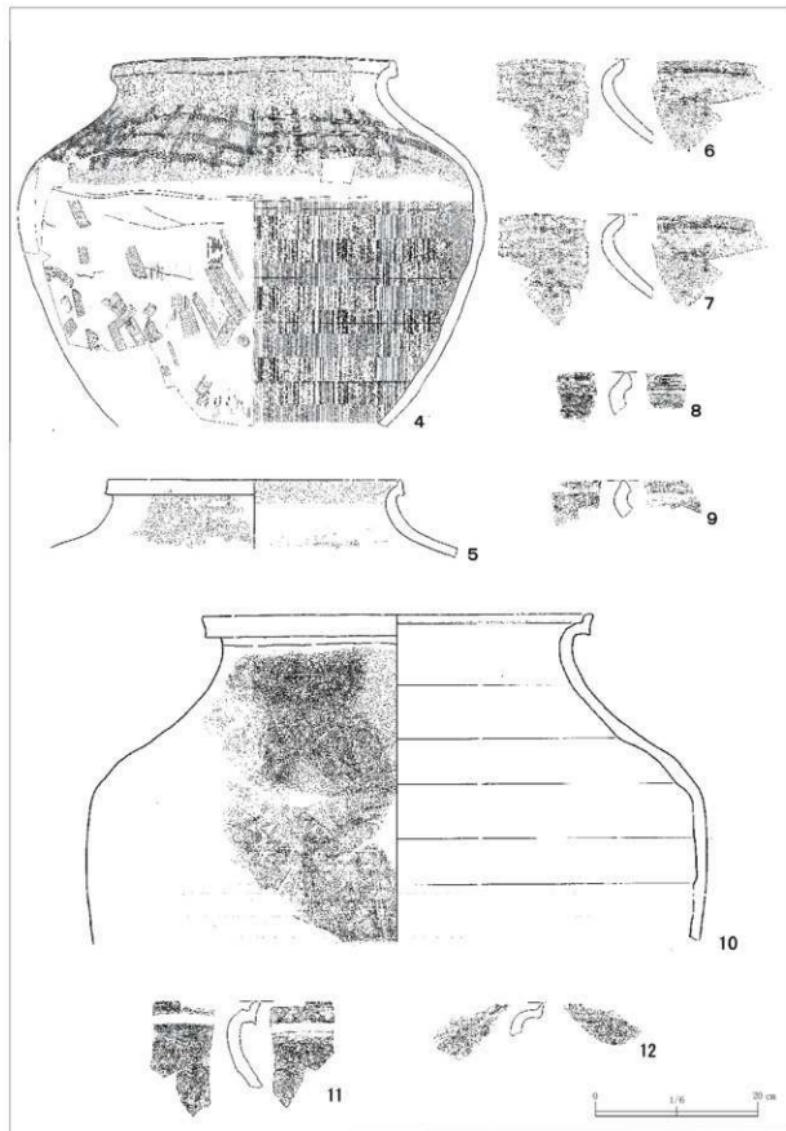
【第4図3】口径43.8cm、器高63.0cm、最大径69.5cm、底径20.4cmであるが、底部中央は欠損している。口縁部は受け口状を呈し、縁帶幅は1.9cmで、僅かに縁帶下端が垂れ下がる。頸部はハの字に開き、胴部は直線的である。口縁部周辺に指ナデ調整が施される。肩部~体部内面は丁寧な横ナデ調整と指オサエ調整が施される。肩部外面は自然釉により調整が不明瞭だが、体部外面は約3cm幅に8目程度の粗い櫛目状工具により左回りにヘラ挿き上げ調整が施される。器表面は暗オリーブ褐色を

第1表 報告書掲載遺物

報告書掲載 図版番号	種別	器種	産地	時期	出土地点
第55図31	瓷器系	鉢皿	古瀬戸	古瀬戸中期Ⅱ	LF55
第55図32	瓷器系	鉢皿	古瀬戸	古瀬戸中期Ⅰ・Ⅱ	LF61
第55図33	瓷器系	小鉢	古瀬戸	古瀬戸後期Ⅲ	LP59
第55図34	瓷器系	入子	古瀬戸	古瀬戸前期Ⅲ~中期Ⅲ	MK55・60
第55図35	瓷器系	花盆	古瀬戸	古瀬戸中期Ⅰ・Ⅱ	LP50
第55図36	瓷器系	花盆	古瀬戸	古瀬戸中期ⅠかⅡ	LP50
第56図37	瓷器系	折縁深皿	古瀬戸	古瀬戸中期Ⅰ・Ⅱ	LA40
第58図42	瓷器系	壺	越前	越前Ⅱ期	LF-LK40, LM43
第60図46	瓷器系	広口壺	越前	越前Ⅱ~Ⅲ期	LF-LI45
第61図47	瓷器系	壺	越前	越前Ⅱ期	LF40, LJ-LK42
第62図52	瓷器系	壺	越前	越前Ⅱ期	SKP1969・MF50
第62図53	須恵器系	壺	珠洲	珠洲Ⅱ期	MD58, 表探
第62図54	須恵器系	壺	珠洲	珠洲Ⅲ期	MG50
第62図55	須恵器系	壺	珠洲	珠洲Ⅲ~IV期	LM54, LP55, MN57
第63図56	須恵器系	壺	珠洲	珠洲Ⅰ~Ⅱ期	LR53, LT54, MD59, MF50 MK50・53・54, ML53
第64図57	須恵器系	壺	珠洲	珠洲Ⅱ期	MF54, MK50・53・54
第64図58	須恵器系	小壺	エビバチ長根	珠洲Ⅰ期か	LP53
第64図59	須恵器系	小壺か	エビバチ長根	珠洲Ⅰ期か	LG60
第64図60	須恵器系	四耳壺	エビバチ長根	珠洲Ⅰ期か	MC-MD59
第65図61	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期か	SKP643, LP55
第65図62	須恵器系	擂鉢	南外	珠洲Ⅱ期	LP45, LR55
第65図63	須恵器系	擂鉢	南外	珠洲Ⅱ期	LT60
第65図64	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲VI~VII期	SK4420
第65図65	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	SB627-P6A
第65図66	須恵器系	擂鉢	珠洲?	珠洲Ⅱ期か	MI45
第66図67	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	LO53, LP55
第66図68	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	LL44
第66図69	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	SKP1053
第66図70	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	LP55
第66図71	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	MD37
第67図72	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期	SK11380
第67図73	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ~Ⅲ期か	LM58
第67図74	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅴ期	LF60
第67図75	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ~Ⅲ期	LN52
第67図76	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅲ期	LM52
第67図77	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅲ期	SB15-P2
第67図78	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅴ期	LS60
第68図79	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲IV期か	MK54
第68図80	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲V期	SKP3586, SK3637
第68図81	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅱ期か	MK44
第68図82	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅰ~Ⅱ期	SK3821, LP50, MA58
第68図83	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅰ~Ⅱ期	LT63
第68図84	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅰ~Ⅱ期	LN54
第68図85	須恵器系	擂鉢	珠洲	珠洲Ⅰ期か	SK3637, LL51



第4図 在地瓷器系陶器（1）



第5図 在地瓷器系陶器（2）・越前窯製品

呈し、3mm大の長石粒の噴き出しがみられ自然釉が厚くかかる。胎土は密で2~5mm大の礫を含み、灰色を呈する。

【第5図4】口径34.2cm、口縁～胴部残存高45.3cm、最大径57.6cmである。口縁部は受け口状を呈し、縁帯幅は1.9cmで、縁帯上端を擒み上げた後に工具により整形している。肩部外面には3~5目の格子状の櫛目文様が一周し、横位の櫛目文は右回りに施されている。体部内面は漆が付着し、外面はヘラ搔き上げ調整やナデ調整が施される。器表面はオリーブ褐色～暗褐色を呈し、自然釉がかかる。胎土は密で2~6mm大の礫を含み、灰色を呈する。

【第5図5】口径36.4cm、残存高9.6cmである。口縁部は受け口状を呈し、僅かに縁帯下端が擒まみ出される。縁帯幅は1.7cmである。頸部はハの字に開き、他の個体に比べ肩が張るプロポーションである。頸部外面は自然釉により調整が不明瞭だが、内面にはロクロ調整や横ナデ調整が施される。器表面は灰白色～灰色を呈し、自然釉がかかる。胎土は密で直径2~5mm大の礫を含み、灰色を呈する。

【第5図6】口縁残存高10.6cmである。口縁部はやや受け口状を呈し、縁帯幅は1.7cmである。口縁部は指ナデ調整が施され、頸基部を1周するナデ調整により仕上げている。肩部内面には丁寧な横ナデ調整が施され、指オサエ痕が残る。器表面は灰色～薄茶色を呈し、直径1mm大の長石粒の噴き出しがみられ自然釉が厚くかかる。胎土は密で直径1~2mm大の礫を含み、灰白色～薄橙色を呈する。

【第5図7】口縁残存高13.5cmである。口縁部はやや受け口状を呈し、縁帯幅は1.8cmである。頸部はロクロ調整が施され、縁帯部の調整が行われた後に頸部上方を指で押されて整えており、頸部内外面に指オサエ痕

第2表 常滑系東北諸窯一覧表

窯跡群	窯跡	所在地	分類	窯	操業時期
伊豆沼	熊野A	宮城県栗原市	常滑系	3基	12世紀中頃～後半
	熊野B	宮城県栗原市	常滑系	3基	
	熊野C	宮城県栗原市	常滑系	2基	
	熊野D	宮城県栗原市	常滑系	5基	
三本木	山峠沢	宮城県栗原市	常滑系	8基	
	東沢	宮城県栗原市	常滑系	13基	
	品ノ浦	宮城県栗原市	常滑系	18基	
	多喜田	宮城県大崎市	常滑系	1基	12世紀中頃～後半
白石	芦ノ口	宮城県大崎市	常滑系	1基	
	一本杉	宮城県白石市	常滑系	20基	12世紀末～14世紀前半
	東北	宮城県白石市	常滑系	11基	
執行坂	黒森	宮城県白石市	常滑系	2基	
	南の沢	宮城県白石市	常滑系	1基以上	
	秋行坂	山形県鶴岡市	常滑系	1基以上	12世紀中頃
梁川	長坂	山形県鶴岡市	常滑系	1基以上か	12世紀中頃
	八郎	福島県伊達市	常滑系	4基以上	12世紀末～13世紀前半
	種ノ沢A	福島県会津若松市	常滑系	4基	14世紀前半
大戸	種ノ沢B	福島県会津若松市	常滑系	1基	13世紀前半
	下丸A	福島県会津若松市	常滑系	6基	13世紀前半
	中丸A	福島県会津若松市	常滑系	10基	12世紀中頃
	中丸B	福島県会津若松市	常滑系	6基	13世紀中頃
	谷地平A	福島県会津若松市	常滑系	7基	13世紀後半～14世紀



第6図 常滑系東北諸窯分布図

が残る。肩部内外面には丁寧な横ナデ・指オサエ調整が施され、内面には粘土紐輪積み痕が残る。器表面は暗灰色を呈し、自然釉がかかる。胎土は密で直径1~2mmの大の礫を含み、灰色を呈する。

【第5図8】口縁残存高5.1cmである。口縁部はやや受け口状を呈し、縁帯幅は1.9cmである。第5図7と同様に頭部内外面に指オサエ痕が残るが、やや強めに押さえられている。器表面は暗灰色を呈し、直径1mmの大の長石粒の噴き出しがみられ自然釉がかかる。胎土は密で直径2mmの大の白色礫を含み、灰色を呈する。

【第5図9】実測図の口縁残存高は4.5cmであるが、縁帯外面がもう少し直立するものと思われる。口縁部は受け口状を呈し、縁帯幅は1.7cmである。口縁部周辺は指ナデ調整、頭部内面はロクロ調整と横ナデ調整が施される。器表面は暗灰色を呈し、自然釉がかかる。胎土は密で直径2mmの大の白色礫を含み、灰色を呈する。

以上の9点は、口縁形態から瓷器系の中でも常滑窯の系譜を持つ常滑系に分類される。N字状を呈さず、典型的なT字状にもならない口縁形態は、常滑窯や越前窯（第5図10~12）、加賀窯などの他の常滑系瓷器系陶器とは明らかに異なる作工であり、東北地方で生産された在地瓷器系陶器の特徴（東北中世考古学会2003）と一致する。

3 常滑系在地瓷器系陶器窯との比較

（1）常滑系在地瓷器系陶器の概要

東北地方の常滑系在地瓷器系陶器窯は、宮城県の伊豆沼窯跡群・三本木窯跡群・白石窯跡群、山形県の執行坂窯跡、福島県の八郎窯跡・大戸窯跡群の6つがある（第6・7図^{〔注3〕}・第2表）。未発見窯の存在^{〔注3〕}も考慮する必要があるが、館堀城跡出土の在地瓷器系陶器は、これらのが在地窯のいずれかで生産された可能性が高い。

【伊豆沼窯跡群】宮城県栗原市に位置する。館堀城跡に最も地理的に近く、宮城県北部～岩手県にかけて、平泉を中心に点々と流通が確認されている。熊狩A窯跡（東北歴史資料館1979）では甕壺鉢のほか、皿が生産された。甕は口縁部が受け口状を呈する。縁帯幅は約1.5cmで、口縁内側に太い沈線が巡るもの（第7図1・2）が多い。ごく僅かではあるが、斜格子状の押印や鳥が描かれた破片（第7図3）も出土している。

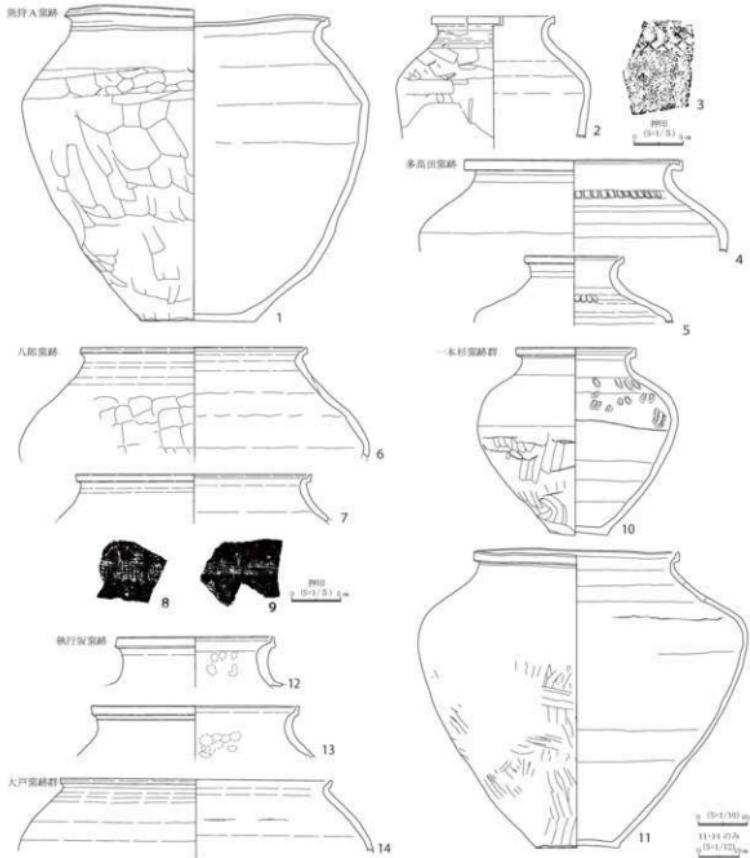
【三本木窯跡群】宮城県大崎市に位置する。多高田窯跡（三本木町教育委員会1978）では甕壺鉢が生産された。甕は口縁部が受け口状を呈し、縁帯幅は1.5~2.0cmで口縁内側に沈線が巡る（第7図4・5）。製品の特徴から伊豆沼窯跡群との類似性が指摘されるが、口縁形態が伊豆沼窯跡群より後出的である。出土事例が少なく、流通範囲は明らかでない。

【白石窯跡群】宮城県白石市に位置する。一本杉窯跡（宮城県教育委員会1996）では未使用も含め20基の窯体が連なるように発見され、15トンもの遺物が出土したことから、従来の在地窯に対するイメージを一新した。甕壺鉢に加え、火鉢、五輪塔、卸皿、研など多様な器種を生産しており、多様なヘラ書きが特徴的である。甕は口縁部が受け口状を呈し、縁帯幅は約2cmであるが、縁帯幅が長いものから短いものへ、肩部がやや張るものからなで肩のものへと変化する。底部内面～体部内面には丁寧なナデ調整が施される（第7図10・11）。宮城県南部～福島県北部に流通する。

【執行坂窯跡群】山形県鶴岡市に位置する。常滑系東北諸窯では唯一日本海側に位置し、執行坂窯跡

(羽黒町教育委員会 2002) で出土した瓜と蝶が描かれた刻画文壺が注目を集めた。甕壺鉢のほか、小皿を生産した。甕は口縁部が受け口状を呈し、縁帶幅は 1.9 cm 前後である（第 7 図 12・13）。周辺遺跡からの出土事例は確認されていない。

【梁川窯跡】福島県伊達市に位置し、常滑系東北諸窯の中では最古となる窯跡である。八郎窯跡（梁川町教育委員会 1987）では甕壺鉢のほか、短頸壺、皿などを生産した。甕は口縁部が受け口状を呈し、縁帶幅は 1.6 cm 前後である。肩部はなで肩気味で、胴部内面には粘土紐輪積み痕が明瞭に残る（第 7 図 6・7）。僅かではあるが、正方形及び長方形の斜格子状の押印を持つ（第 7 図 8・9）など、常滑系在地瓷器系陶器の中では最も常滑窯に忠実である。福島県内の阿武隈川流域に流通する。



第 7 図 常滑系東北諸窯

【大戸窯跡群】福島県会津若松市に位置する。12世紀末当初は須恵器系であったが13世紀に瓷器系へ転換した。上雨谷6号窯をはじめとする瓷器系窯（会津若松市教育委員会1994）では甕蓋鉢のほか、椀、鉢皿、硯などを生産した。甕は基本的に受け口状を呈し、縁帯幅は1.4～2.0cmで次第に広くなる（第7図14）。窯跡を中心に会津地方に流通する。

以上のように、甕の口縁部はいずれも受け口状を呈するが、縁帯幅や沈線の有無など口縁端部の形態、調整技法、押印の有無などに違いが認められる。

2) 館堀城跡出土遺物との比較

館堀城跡で出土した甕のうち、プロポーションが推定できる個体の特徴を整理してみると、器形については①頸部がハの字に開き、肩部が器高に比して高い位置にあること、②口縁部は縁帯幅が1.8cm前後であること、③縁帶外面が直立し、端部は丸みを帯びること、④口縁内側に沈線はないが、縁帯との境が明瞭であることが挙げられる。その他、⑤内面調整が丁寧に行われること、⑥押印を持つものがないこと、⑦肩部に櫛目文が描かれるものがあることも特徴的といえる。しかし、肩部や縁帯幅、内面調整の特徴^(注4)（①・②・⑤）はいずれの窯跡にも当てはまり、押印の有無（⑥）は窯跡から出土した点数の少なさから窯跡を識別する指標とはならない。窯跡毎の差異が見出せる口縁部の形態（③・④）からは、縁帶上端がやや摘まみ上げられ、端部が丸みを帯びるという特徴が指摘できる。東北諸窯の中では伊豆沼窯跡群もしくは白石窯跡群のものに近似するとの指摘^(注5)があるように、宮城県域で生産されたものとみられる。しかし、縁帶の発達に注目すると、館堀城跡で出土した甕はあまり縁帶が発達しておらず、L字状とならないものも多い。伊豆沼窯跡群と白石窯跡群を比較すると、後者の方が縁帶の発達が進行していることから、館堀城跡で出土した在地瓷器系陶器は伊豆沼窯跡群のものである可能性が高いと考える。

両窯の流通状況をみると、伊豆沼窯跡群は館堀城跡から約96kmの栗原市に位置しており、流通範囲は窯跡から北方の岩手県域である^(注6)（第8図）。一方、白石窯跡群は館堀城跡からは約170km離れており、窯跡を中心とする流通範囲の北限は宮城県七北田川流域である（第9図）。常滑系在地瓷器系陶器窯がいずれも数都程度の狭域流通の様相をみせる（飯村1995）ことから、距離的にみても伊豆沼窯跡群の



第8図 伊豆沼窯跡群出土分布図



第9図 白石窯跡群出土分布図

ものが流通している可能性が高い。

(3) 櫛歯文を持つ個体

ここで櫛歯文を持つ個体の存在（第5図4）に注目したい。

東北諸窯では伊豆沼窯跡群の熊狩A窯跡、白石窯跡群の一本杉窯跡、執行坂窯跡で文様を持つものが出土している。

熊狩A窯跡は鳥、執行坂窯跡は瓜と蝶が描かれており、館堀跡のような櫛歯文はみられない。一本杉窯跡では、計164点のヘラ書き文様が報告され、文字が書かれるもの、記号が書かれるもの、文様が描かれるもの大きく三つに分けられている。

そのうち、櫛歯文が描かれるものが2点のみで、波状文を持つ広口壺頭部（第10図1）と上下方向の多条文を持つ壺体部の小片（第10図2）である。常滑窯ではこのような櫛歯文を持つものは見当たらず、珠洲窯から影響を受けた在地瓷器系陶器の特徴といえる。

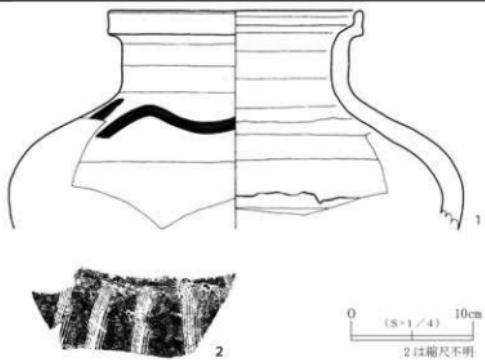
先に推定した伊豆沼窯跡群では櫛歯文を持つ個体は見つかっていないため、現時点では櫛歯文によつて産地を同定することはできないが、口縁部形態や流通範囲から伊豆沼窯跡群の可能性が高いと推定したい。確実な産地同定には、胎土分析等の科学的な実証の蓄積が待たれる。

4 在地瓷器系陶器と漆

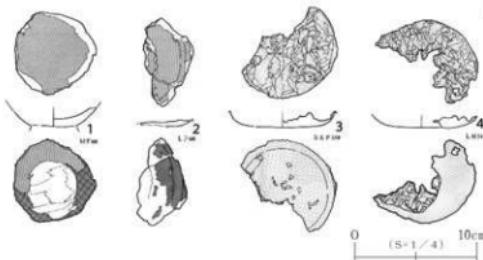
(1) 漆容器と補修・補強

館堀城跡で出土した在地瓷器系陶器は、接合面に漆が付着する1点を除き、大半の壺内面の広範囲に漆が付着していることも大きな特徴である。漆は底部から頸部にかけて付着しており、口縁部及び外面には付着していない。凍て割れによる剥離面には漆が付着していないため、凍て割れが起ったのは破壊された後とみられる。

この壺が漆容器として使用されたとすれば、相当量がこの容器に蓄えられたとみられる。遺跡内からは漆塗りの椀やパレットとして利用されたと考えられる木製皿（第11図）が出土しており、漆塗布行為が行われていたのは間違いない^(註7)。ここで注目したいのは、館堀城跡で漆が付着するのは在地



第10図 一本杉窯跡出土櫛歯文壺



第11図 館堀城跡出土漆付着木製品

瓷器系陶器の甕に限られる点である。漆容器として使用されたとすれば、在地瓷器系陶器は漆用、それ以外の珠洲・越前窯製品は水や酒・油用というように、産地別に容器としての役割が異なっていた可能性が高い。しかし、頸部まで液体漆が入れられていたとすれば、栽培木、ましてや自然木では貯いきれないほどの漆が貯蔵されていたこととなる。大型の甕は漆の長期保存には向きでなく、口縁周辺部に漆が付着した痕跡はなく、自然硬化を防ぐために漆紙等で蓋をした痕跡も見いだせない。これまで漆パレットとして利用された陶片は多数報告されているが、確実に漆容器とされるのは広島県草戸千軒町遺跡の木製漆桶のみである（広島県立博物館2017）。以上のことから、館堀城跡のような大型の甕に漆を長期保存したとは考えにくいため、漆貯蔵以外の用途の可能性を考えてみたい。

漆貯蔵容器以外に漆が付着する理由の一つとして、漆による補修がある。焼成中に生じたヒビ割れに漆を塗った布を貼ったり、漆を甕の内外面から押し当てたりして補修した製品が各地から確認され、補修行為に伴う痕跡とみられる漆付着製品も確認されている（鈴木2008・吉崎2017）。しかし、館堀城跡の製品は漆付着部分にヒビ割れや石ハゼではなく、布や紙が貼られた様子もみられないため、補修行為に伴う漆の付着ではない。補修以外には漆を使用し製品を補強した可能性が考えられるが、補修に比べ補強事例はほとんど報告されていない。福島県猪俣保城跡で出土した在地瓷器系陶器5点は、分析の結果から漆により補強し長期間使用した可能性が指摘されている（田中2017）が、補強と認定するにはより多くの根拠が必要と思われる。

（2）漆の肉眼観察

館堀城跡の在地瓷器系陶器内面に付着した漆の肉眼観察からは、①口縁部を除く内面全体の広範囲に漆が付着しているものの、剥落した部分も多い。成形時に形成された頸部内面の粘土紐輪積み痕や横ナデ調整により繩が移動した僅かな窪み内にまで付着する場所がある一方、それよりも下方の窪み内には付着しない場所がある。②漆表面には小さな凹凸がみられる。③肩部内面下方では幅約1mm程度の筋痕を観察できる場所がある。この筋はロクロ目に沿うものが多いが、ロクロ目に約30度の角度で斜交する部分も認められる。また、頸部及び肩部上方にはみられない。④肩部内面に長さ4mm、幅約1mmの植物纖維のような不純物が僅かに混入する様子が観察できるという特徴が挙げられる（第12図）。

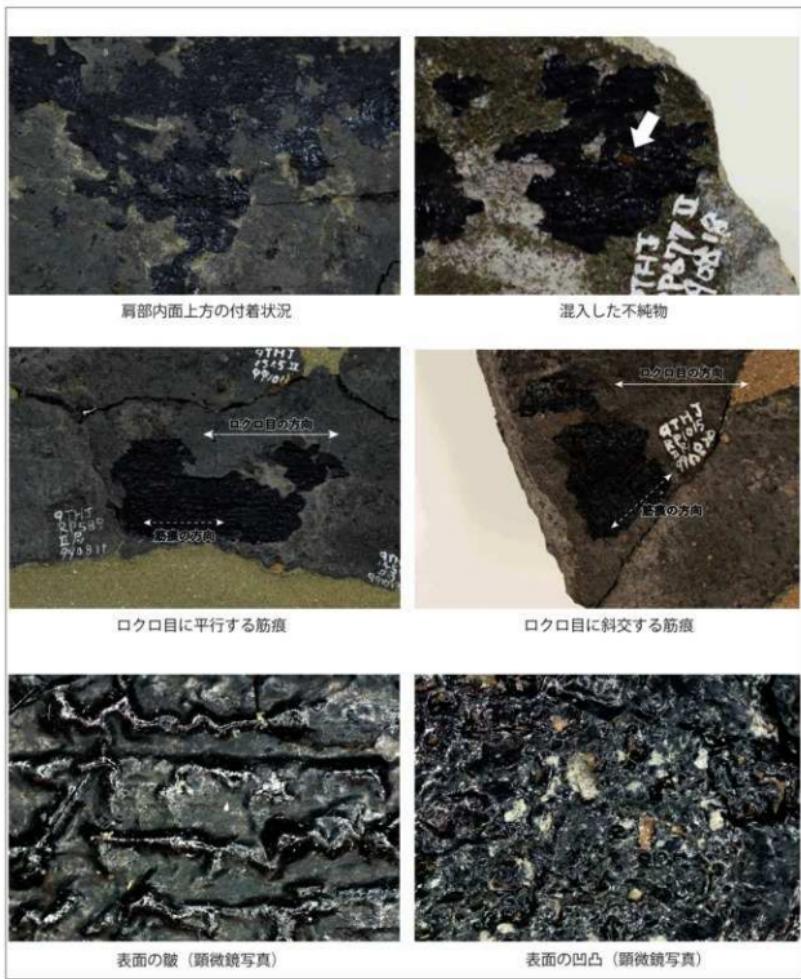
以上のことから、筋痕はヘラ状あるいは刷毛状の道具が当たられた痕跡と推測できる。容器内に残った漆を掻き出すならば、ロクロ目に直交する方向に掻き出すのが合理的であるため、ロクロ目に平行する筋痕は漆の塗布行為により残った痕跡と考えたい。

（3）漆の塗布行為と大甕

館堀城跡で出土した珠洲や越前などの他産地の製品には前述のような痕跡は一切みられず、在地瓷器系陶器にのみ漆を塗布する理由があったとみられ、その理由について考えてみたい。

出土した在地瓷器系陶器は、最も大きい個体で最大径が69.5cmにもなる。底径は20cm程しかなく、自立するもののかなり不安定である。そのため、遺跡内から埋甕遺構は検出されていないが、ある程度土中に埋められた状態で使用されたと思われる。また、多くの破片が接合できたことから、比較的まとまった状態で廃棄された可能性が高い。

甕・甕の利用形態について考察した荻野繁春は、埋甕を食料貯蔵用や生産活動用に分けている（荻野1992）。館堀城跡の場合、内容物由来の付着物が認められないため、藍甕や油甕などの生産活動に



第12図 館堀城跡出土漆付着製品の特徴

使用されたものではないと考えられる。骨片や銭の出土もなく、多くの破片が遺構外からの出土であるため埋納容器として使用されたものでもない。

ここで注目したいのは、遺跡内から井戸跡が検出されていない点である。通常であれば、屋敷地内に数基の井戸跡が検出されることが多い。しかし、館堀城跡は役内川の旧河道上に立地するため、砂礫層に井戸を掘削するよりも周辺から水を汲んだ方が容易であったと思われる。館内には水を貯蔵する設備が必要不可欠だったと思われ、その貯蔵容器として大甕が使われた可能性は高い。

在地瓷器系陶器の胎土は、珠洲や越前に比べると小礫が多く密度が低い。水などの液体の貯蔵容器としては強度に差が生じたとみられ、そのために館堀城跡では在地瓷器系陶器の補強を目的に漆の塗布行為が行われた可能性が高い。しかし、越前焼では焼成が甘い壺類の内面に水漏れ防止を目的として漆を塗布する事例^(注9)があるものの、一般的に貯蔵容器に漆を塗布する行為があれば、県内外の城館遺跡や拠点の集落遺跡で出土する様々な産地の陶磁器で既に事例が報告されているものと思われる。在地瓷器系陶器に限ってみても、そのような事例は確認されていない。館堀城跡の在地瓷器系陶器と窯跡出土の陶片には胎土や焼成具合の極端な違いが認められないため、館堀城跡での使用環境では補強行為を行わないと在地瓷器系陶器を使用できなかつたのだろうか。

以上のように、筆者は館堀城跡の在地瓷器系陶器に付着した漆を、在地瓷器系陶器の補強に由来すると考えた。しかし、現状では推測の域を出ないため、在地瓷器系陶器が多く出土する太平洋側を中心に類例の増加を待ちたい。

5 新興勢力者と在地瓷器系陶器の関係

(1) 在地瓷器系陶器に対する袋物需要と流通ルート

館堀城跡で出土した国産陶器の主要器種は、鉢類は須恵器系、袋物は瓷器系が主体である。鉢類は大半を珠洲窯製品、一定量を南外窯製品が占め、僅かに含まれる在地瓷器系陶器の小片は主体的に流通したものではない。袋物の一部に珠洲窯製品がみられるが、多くが越前窯・在地瓷器系陶器の常滑系瓷器系陶器で占められる状況は、瓷器系を袋物に用いる嗜好の現れとみられる。

しかし、県内全域をみると当該期の常滑系瓷器系陶器が出土する遺跡は非常に少ない。常滑窯製品は12世紀代のものが多く出土するが、13世紀代の出土例はない。越前窯製品は、祓川I遺跡、後城跡、館堀城跡で確認されており、いずれも壺・壺類である。東北地方では、十三湊遺跡以外に当該期の越前窯製品が一定量出土する遺跡はなく、流通ルートは限られたものであったと推測される。このように、13世紀代は常滑系瓷器系陶器が潤沢に流通する状況ではなかったために、袋物需要を満たす代替品として在地瓷器系陶器が選ばれたと考えられる。館堀城跡出土の在地瓷器系陶器は常滑窯編年5~6a型式に比定され、奥州合戦以後、東北地方において常滑窯製品の流通量が減少した時期にある。一方、珠洲窯は常滑窯とは対照的に13世紀以後に流通圏を拡大させており、日本海側の袋物需要は珠洲窯を代表とする須恵器系陶器が担っていた。館堀城跡も在地瓷器系陶器を持ち込まなくとも、袋物需要を満たすことができた状況下にあったといえる。

このような状況下の県内で在地瓷器系陶器が確認された遺跡は、管見の限り、館堀城跡と横手市に所在する観音寺廢寺跡^(注10)の二例のみである。両遺跡は土崎湊から雄物川を介して各領主の領域をリレー方式で中継した（市村2002）。流通経路とは、異なるルートを持っていたと考えられる。

館堀城跡のある横堀地区は、雄物川の支流で中近世の雄物川舟運の終点である役内川が流れる。また役内川と並行して古代律令期の出羽山道道路と考えられている中世羽州大道が通っており、古くから物流の拠点であった（第13図）。周辺には鶴沼城跡（秋田県教育委員会1980）、桐木田遺跡（秋田県教育委員会1982）、新屋敷遺跡^(注11)（秋田県教育委員会2005）などの平地居館や板碑群が集中して分布していることからも、現地支配の拠点として館が築かれたものと思われる。

羽州大道を南下すると、秋田県と宮城県の県境に鬼首峠がある（第14図）。出羽国と多賀城を結ぶ

峠越えは古代から利用されており、鬼首峠に至る道筋には中世の板碑や館跡が点在している（秋田県教育委員会 1986）。伊豆沼窯跡群との位置関係からみれば、在地瓷器系陶器は途中まで河川を利用して運搬した後、陸路で鬼首峠を越えて館堀城へ持ち込まれた可能性が高いと考えられる。

(2) 館堀城周辺地域の領主と小野寺氏一族

館堀城の居住者は小野寺氏一族の菅六郎内記であると伝えられ、館堀城が居館、北方約 500m の山腹に位置する草井崎城が詰め城と想定されている（秋田県教育委員会 1981）。しかし、菅六郎内記は関ヶ原合戦により石見国に流罪となつた小野寺義道の家臣であり、13～14 世紀を中心とする出土遺物の年代と一致しない。

13～14 世紀の雄勝郡の有力者は、文治 5（1189）年の奥州合戦後、地頭に任命された下野国に本拠を持つ下野小野寺氏の小野寺道綱である。小野寺氏本流はその後も下野国に居住しており、庶流である仙北小野寺氏の小野寺経道が雄勝郡へ入部した時期は 13 世紀後半とみられ（遠藤 1988）、間もなく館堀城が築かれたこととなる。これを裏付けるように、当該地域には館堀城をはじめ、13 世紀を主体とする遺跡や中世後半に属する城館が密集しており、当時の主要道と考えられる道沿いには 14 世紀代の紀年銘を持つ板碑が多数残っている。

伊豆沼窯跡群周辺をみると、当時の迫川周辺は新田郡に属するとみられ、在地有力者として、下野小野寺氏の一族である新田氏・登米氏が候補に挙げられる（田中 2003）。新田小野寺氏は下野小野寺氏の庶流で、新田に移住しその名を新田氏と改めた。登米氏はその新田氏の庶流の一つである。新田小野寺氏の始祖である重房が新田を押領したのは 12 世紀末とみられ、仙北小野寺氏よりやや早い段階で新田の地へ入部した（遠藤 1988）。伊豆沼窯跡群の製品は、平泉遺跡群をはじめ、宮城県内の北条氏一族関連屋敷や寺院を中心に流通しており、在地有力者の勢力拡大の一環として陶器生産を開始したものと思われる。

このように、館堀城跡と伊豆沼窯跡群周辺の有力者は、同時期に下野小野寺氏から分かれた同族関係にある。館の配置と陶器窯の開窯は新天地の基盤作りの一環とみられ、館堀城跡が交通の要衝に位置し、陸路を使って大甕が運搬されていることから、両者の間には流通基盤を形成する協力関係が成り立っていたと考えられる^{〔注 12〕}。



第 13 図 館堀城跡と役内川・中世羽州大道推定ルート

おわりに

13世紀代に活発化する在地瓷器系陶器生産の背景には、奥羽合戦を経て新たに入部した新興勢力者たちの存在がある。須恵器系陶器文化圏である出羽地方において瓷器系陶器がまとめて出土するのは、新興勢力者である小野寺氏一族が袋物に瓷器系陶器を用いるという概念を持続けていたことの現れである。しかし、一方では、新たな土



第14図 館船城跡周辺・近世主要交通路

地での基盤作りの一環である陶器生産が確立していなかったとみることもできる。県内では13世紀代に須恵器・瓷器折衷系陶器窯の影響を受けた須恵器系陶器窯とされる南外窯跡群（吉岡1988）が生産を開始しており、この開窯にも新興勢力者が関与したものと思われる。

奥州合戦以後、新興勢力者の入部によって出羽地方の中世社会は大きな転換期を迎える。その変化に陶磁器生産と流通が大きく関わるのは確実で、広域流通品である中国陶磁、古瀬戸や珠洲などの国産陶器はもちろん、狭域流通品である在地陶器流通を明らかにする必要がある。しかし、狭域流通がゆえに流通範囲が不確定な窯跡も多く、基礎的な研究の蓄積が待たれる。

本稿を執筆するにあたり、以下の方々から貴重なご教示をいただきました。この場を借りて、感謝申し上げます。飯村均、五十嵐一治、及川真紀、木村孝一郎、佐藤俊、榎原滋高、高橋学、中野晴久、室野秀文、森まどか、藤澤良祐、八重樫忠郎、吉川耕太郎（五十音順、敬称略）

註

- 1 藤澤良祐氏による実見結果を受け、第1表に記載した報告書掲載の第55図35・36は花盆、第56図37は折線深皿に器種名を変更した。また、古瀬戸製品及び山茶碗は藤澤氏、それ以外の製品の产地と時期は筆者の実見によるものである。須恵器系陶器については、珠洲窯製品ではない未発見窯のものが含まれている可能性があるが、在地窯ではないものを一括して珠洲と表記した。
- 2 第7図は、各常滑系在地瓷器系陶器窯報告書（参考文献参照）の掲載図版を再トレースし、作成した。
- 3 伊豆沼窯跡群の流通範囲内である岩手県盛岡市の台太郎遺跡でも在地瓷器系陶器が出土しており、盛岡市近郊に未発見の窯跡が存在する可能性がある。台太郎遺跡出土の甕は菊花文の押印を持つに対し、館船城跡で出土した甕は押印を持たないため、台太郎遺跡出土製品とは異なる窯跡のものと思われる。秋田県南部では、在地瓷器系陶器が出土する遺跡がほぼ存在しないため、未発見窯跡が存在する可能性は低いと思われる。
- 4 熊狩A窯跡、多高田窯跡、一本杉窯跡、八郎窯跡、執行坂窯跡製品を実見した結果、一本杉窯跡製品が最も丁寧に内面調

整が行われている印象を受けた。しかし、具体的な調整方法や使用工具等の差異は現段階では指摘できず、窯跡の識別指標には至っていない。

- 5 藤澤良祐氏・中野晴久氏・八重樋忠郎氏の指摘による。
- 6 窯跡が特定できていないが、伊豆沼窯跡群の可能性が高い在地瓷器系陶器を含む（羽柴 1998）。
- 7 木製皿に溜まった漆の分析から、漆紙により蓋がされていたことや精製度の異なる漆を何度か使用していることが判明している（秋田県教育委員会 2001a）。
- 8 猪久保城で出土した漆付着製品は、分析から屋内かまたは一時に日光のある場所に置かれていた可能性が指摘されているものの、付着状態は漆容器と断定できる状況にないとされた（福島県文化センター 1994）。
- 9 森まどか氏の教示による。
- 10 観音寺廃寺跡では1点の在地瓷器系陶器片が出土しており、13世紀代のものとみられる（秋田県教育委員会 2001b）。
- 11 新星敷遺跡では9点の常滑窯製品が出土しており、大半が2～3型式に比定される（小山 2018）。
- 12 七海雅人氏は、新田重房の前に新田郡へ入った河原毛太郎も小野寺氏一族の可能性があると指摘し、河原毛の地名が残る秋田県湯沢市との関連を推測している。また、出羽国内の地名を名字とする人物が陸奥国内の御家人として配置された理由は不明であるが、この河原毛が陸奥と出羽の国境に近接することから、奥羽両国の境界・両属的な性格が反映した可能性について言及している（七海雅人 2002）。

参考文献

- 会津若松市教育委員会 1994『会津大戸窯（遺物編）』会津若松市文化財調査報告書第37号
- 秋田県教育委員会 1980『鶴沼城跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第73集
- 秋田県教育委員会 1981『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集
- 秋田県教育委員会 1982『桟木田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第95集
- 秋田県教育委員会 1986『歴史の道調査報告書Ⅳ 南部羽州街道』秋田県文化財調査報告書第141集
- 秋田県教育委員会 2001a『館堀城跡－県営ほ場整備事業（寺沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第320集
- 秋田県教育委員会 2001b『観音寺廃寺跡－土地改良総合整備事業（緊急生産調整型）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第321集
- 秋田県教育委員会 2005『新星敷遺跡－一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第389集
- 飯村均 1995「(5) 東北諸窯」『概説 中世の土器・陶磁器』真研社
- 市村高男 2002『中世出羽の海運と城館』『中世出羽の領主と城館』奥羽史研究叢書2 高志書院
- 遠藤巖 1988「雄勝郡地頭小野寺氏」『出羽路92』秋田県文化財保護協会
- 荻野繁泰 1992「壺・甕はどのように利用されてきたか」『国立歴史民俗博物館研究報告第46集』国立歴史民俗博物館
- 小山美紀 2018『秋田県内出土の常滑窯製品』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第32号』秋田県埋蔵文化財センター
- 三本木町教育委員会 1978『多高田窯跡調査報告』
- 鈴木弘太 2008「漆の付着した甕－鎌倉・米町道跡出土の常滑窯製品－」『鎌倉考古』No.52 鎌倉考古学研究所
- 高橋学 2003『滑石製石鍋と山茶碗－雄勝町館堀城跡出土の事例から－』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第17号』秋田県埋蔵文化財センター

- 高橋学 2004 「秋田県館廻城跡と出土陶磁器—成立期の状況を中心に—」『貿易陶磁研究第24号』 日本貿易陶磁研究会
- 田中則和 2003 「熊狩A窯跡」「多高田窯跡」「中世奥羽の土器・陶磁器」高志書院
- 東北中世考古学会 2003 『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 東北歴史資料館 1979 『伊豆沼古窯 熊狩A窯跡発掘調査報告』
- 七海雅人 2002 「鎌倉幕府と奥州」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4 高志書院
- 羽黒町教育委員会 2002 『執行坂窯跡—第2次発掘調査報告書一』羽黒町文化財調査報告書第3集
- 羽柴直人 1998 「岩手県内から出土する東北地方産の陶磁器」『東北地方の在地土器・陶磁器II』東北中世考古学会第4回研究
大会資料 東北中世考古学会
- 広島県立博物館 2017 『草戸千軒町遺跡漆器関係資料2—出土漆器等の科学分析と食漆器の諸問題—』草戸千軒町遺跡調査研究
報告12
- 福島県文化センター 1994 『猪俣保城』福島県文化財調査報告書第308集
- 宮城県教育委員会 1996 『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第172集
- 梁川町教育委員会 1987 『八郎窯跡群』梁川町文化財調査報告書第12集
- 吉岡康暢 1988 「北東日本海域における中世窯業の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告第16集』国立歴史民俗博物館
- 吉崎伸 2017 「不良品の大甕」『洛史 研究紀要第11号—京都市埋蔵文化財研究所設立40周年記念号—』公益財團法人京都市
埋蔵文化財研究所

〈資料紹介〉 大仙市星宮遺跡未報告資料の検討

—九年橋遺跡出土土器と類似する土器を中心に—

小松 和平*

はじめに

星宮遺跡は秋田県大仙市横堀に位置する縄文時代晩期、弥生時代中期末、平安時代の複合遺跡である（仙北町教育委員会 1992、1999）。平成 8 年～10 年に行われた調査で、縄文時代晩期の捨て場と弥生時代～古代の水田跡が見つかっている。当遺跡の資料調査の際、未報告の縄文時代晩期後葉～弥生時代中期中葉の土器を確認し、その中から大洞 C₂～A' 式土器の型式設定に当てはまらない資料を抽出した。これらは「九年橋形式」⁽¹⁾（鈴木 2018）に類似した一群のほか、「九年橋形式」に含まれていない満巻文等有する従来の型式設定に当てはまらない土器も含む。本稿では上記の資料について報告し、その他の未報告資料については次稿で報告する。

未報告資料を含めると、星宮遺跡の時期が縄文時代晩期前葉～弥生時代中期中葉、弥生時代中期末、平安時代となり、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉まで連続的に追うことができる。

1 星宮遺跡の位置と周辺の遺跡（第1図）

星宮遺跡は齊内川によって形成された扇状地西方の沖積低地に位置している。標高は約 34m で、北 1km に庄堰川、南 1km に川口川が流れている。

当遺跡の周辺には星宮 II 遺跡、星宮 III 遺跡、杉下 II 遺跡、杉下 III 遺跡といった縄文時代晩期を中心とする遺跡が位置している。また、西 1km に平安時代の水田が検出された半在家遺跡、西 2.5km に弥生時代前期～中期前半の土器が出土した上野 II 遺跡、南東 3km に史跡払田柵跡が位置する。

2 掲載土器について

未報告資料の中から文様を比較的識別できるものを選び図示した。各文様の呼称は第2図に従う。尚、鉢形文、矩形文については（鈴木 2018）の呼称に従う。以下、文様ごとに a～d 類に分類し、特徴を述べる。

（1）a 類：鉢形文を有する土器（第3図1、第4図2・3）

短沈線を組み合わせた鉢形文が施される土器で、第3図1、第4図2・3 がこれに該当する。1 は浅鉢形土器の口縁部～胴部片である。口唇部には山形突起と二個一対の突起が見られ、二個一対の突起間に沈線が施される。口縁部～胴部にかけて四字文上半部とその直下に短沈線による鉢形文が施される。地文は LR で、地文施文後、地文が消えない程度にナデ調整をしている。口唇部・口縁部の沈線内を赤彩している。口縁部内面には横位の沈線が施される。2 は壺形土器の肩部と思われる。平行沈線間に平行短沈線による鉢形文が施される。3 は小波状口縁を有する鉢形土器の口縁部～胴部片である。口唇部の波状間に沈線を施す。口頭部～胴部上半にかけて二条の平行沈線と、その間に短沈線による鉢形文が施される。口縁部内面には横位の沈線が施される。

（2）b 類：矩形文を有する土器（第4図4・5）

隆線連子文とも呼ばれる（設楽 2014）。沈線または影去技法によって方形または隅丸方形が施される土器

*秋田県埋蔵文化財センター文化財主事

で、第4図4・5がこれに該当する。4は壺形土器の肩部片である。椭円もしくは隅丸方形の沈線の内側を浅く彫去、矩形文を描いている。5は壺形土器の頸部～肩部片である。平行沈線直下に彫去技法によるボジティブな矩形文が施される。

(3) c類：同心円文もしくは満巻文を有する土器（第4図6・7）

沈線によって同心円文もしくは満巻文が施される土器で、第4図6・7がこれに該当する。6は器種が判然としない。部位は口縁部である。口唇部には二個一対の突起が見られる。口縁部文様は二条の平行沈線下に沈線による同心円文が施される。口縁部内面には横位の沈線が施される。7は壺形土器の胴部片と思われ、沈線による満巻文が施される。沈線間が狭いため、ボジティブな満巻文にも捉えられる。

(4) d類：羽状・矢羽根状文を有する土器（第4図8・9、第5図10～18）

沈線または隆線によって羽状・矢羽根状文が施される土器で、第4図8・9、第5図10～18がこれに該当する。本稿では2カ所以上屈曲するものを羽状文、1カ所のみ屈曲するものを矢羽根状文に区別する。8は深鉢形もしくは鉢形土器の頸部～胴部片である。頸部に沈線によって湾曲する羽状文が描かれている。9は深鉢形もしくは鉢形土器の口縁部～胴部片である。口縁部～頸部へ沈線による羽状文が施される。10は壺形土器の肩部～胴部片である。四字文直下に沈線による矢羽根状文が施される。11は壺形土器の胴部片である。沈線によって羽状文もしくは矢羽根状文が施され、その直下に横位の沈線が施される。12は壺形土器の肩部片と思われる。短沈線による規則性のない矢羽根状文が施される。13は壺形土器の肩部である。短沈線による規則性のない矢羽根状文が施される。14は壺形土器の肩部～胴部片である。横位の沈線間に短沈線による矢羽根状文が施される。15は壺形土器の肩部片である。横位の沈線間に矢羽根状文が施される。他のd類とは異なり、隆線手法によるボジティブな矢羽根状文が施される。16は壺形土器の肩部である。工字文間に半單位ずらした矢羽根状文が施される。17は壺形土器の肩部片である。上下対になる四字文を多段にし、その間に短沈線によるやや単位のずれた矢羽根状文が施される。18は浅鉢形土器もしくは高坏の口縁部片である。口唇部には点列が施され、口縁部には平行沈線とその間に矢羽根状文が施される。

3 考察

出土層位が不明なため土器の型式学的特徴と類例から各土器の帰属時期を考察していく（第1表）。

(1) a類

1の類似資料は今回確認できなかったが、隆線手法による四字文の上半部が認められ、また口縁部と胴部の文様帶が分かれていることから大洞A式の範疇に収まるものと考えた。3は大洞C式と大洞A式で判断に迷うが、屈曲の強い大洞C式の鉢形土器より緩やかに湾曲する大洞A式の鉢形土器に断面形が似ており、また1と同様に鋸歯文が単線であることから大洞A式に比定されたと考えた。2は複線の鋸歯文が特徴で、器種は違うが第6図1と類似している。第6図1は沈線による幾何形（鋸歯文）が認められ、この施文手法は高橋龍三郎によって細分された大洞C式II段階（大洞C式新段階）に当たる（高橋1993）。2の鋸歯文も高橋が示した幾何形の沈線文の可能性があるため、2は大洞C式新段階と考えられる。

(2) b類

4、5は地文がなく沈線でのみ構成され、彫去、隆線手法が認められることから大洞A式に該当すると考

えられる。いざれも破片で全像が判然としないが、九年橋遺跡出土の矩形文を有する壺形土器（第6図2・3）に着目すると、その多くの文様帶が広く胴部の下半まで及んでいるため、やや判断に迷うが大洞A式に比定されるると考える。4、5も同様である。

(3) c類

6、7も地文がなく沈線でのみ構成されているため大洞A式期に該当すると思われる。6の類似資料は今回確認できなかつたが、7は器種・文様とともに山王廻遺跡V層から出土した短頸広口壺（第6図4）に類似する。第6図4に比べて満巻が隅丸方形状ではあるが、文様構成が類似している。第6図4は伊東・須藤によって大洞A式に当てはめられている（伊東・須藤1985）。東北地方以外では、新潟県の青田遺跡で類似する文様の壺形土器（第6図5）が出土している（新潟県教育委員会2004）。長軸は異なるが、「門」字状の沈線が何重にも重なっており、口縁部に浮線網状文が施されていることから鳥屋2a式（大洞A式新段階併行）に位置づけられている。第6図4も口縁部に匹字文、胴部に満巻文が施され、第6図5と文様構成が同じであるため、大洞A式新段階と考える。7も同様に大洞A式新段階と考える。

(4) d類

8、9の時期は判然としない。第6図6のように工字文・匹字文を伴わず地文に沈線の羽状文のみであるため、第6図6と同様に大洞C₁式新段階と捉えがちであるが、口縁部が緩やかに外反する大洞A式の特徴を持つため、大洞C₁～A₁式と考える。また、福島県等では大洞A式期に浮線文系とは別に羽状文や平行沈線文等の沈線文系土器が出土するため、この類例の可能性もある。10、11のような典型的な羽状文を有する壺形土器は工字文・匹字文を伴い、胴部下半まで文様が及ぶことが多いため大洞A₁式とされている。したがって、10、11も大洞A₁式と考える。12、13は矢羽根状文の部分しか残存していないが、14のように匹字文もしくは工字文を伴う可能性が高い。また、矢羽根状文の上下で沈線の本数が異なっており、同じような不規則な羽状文は鳥屋2a式（第6図7）にも見られることから、12～14は大洞A₁式新段階の範疇に収まると考える。15～17のような典型的な矢羽根状文を有する壺形土器は大洞A₁式よりも幅の狭い工字文・匹字文が伴い、文様も胴部上半に収まる傾向が強いため大洞A₁式とされている。15～17も同様に大洞A₁式の範疇に収まると考える。18も15～17と同様に典型的な矢羽根状文を有するため大洞A₁式の可能性を考えたが、福島県郡山市の滝ノ口遺跡（郡山市教育委員会1988）SI01出土の類似資料（第7図1）が同遺構内で水I式中段階に属する浅鉢形土器（第7図2）などと折り重なって出土している。したがって、18も同様に水I式中段階併行の大洞A'式古段階に属すると考える。

以上をまとめると、下記のようになる。

a類：大洞C₁～A₁式（2：大洞C₁式、1、3：大洞A₁式）

b類：大洞A₁式

c類：大洞A₁式

d類：大洞C₁～A'式（8、9：大洞C₁～A₁式、10～14：大洞A₁式、15～17：大洞A₁式、

18：大洞A'式）

第1表

	a類	b類	c類	d類
大洞C式				
大洞A ₁ 式				
大洞A ₂ 式				
大洞A'式				

本稿掲載土器編年図

全欄向として④側は上下で断面を分けている

まとめ

今回の報告で県内においても大洞C₁～A'式期に従来の型式設定に当たはまらない文様を有する土器を確認することができた。中には南東北・北陸（下越）に類例を見出せるものもあり、土器文様が九州・西日本からの影響だけでなく、南東北・北陸（下越）からの影響も受けているということがわかるのではないだろうか。

大洞C₁～A'式期は文様が多様化し、帰属時期の把握が困難な資料が多い。星宮遺跡出土資料は九年橋遺跡出土資料と同様に、大洞C₁～A'式以後の大洞式土器について、各型式のメルクマールを有する土器と今回取り上げたような土器が共存する希有な事例である。既存の報告資料から同様の類例を探し、今回取り上げたような文様の系統を追うことが今後の課題となる。また、本稿で編年的位置付けを行ったが、一部の類例との対比にとどまったと言わざるを得ない。今後類例を調査した上で、今回取り上げたような従来の型式設定に当たはまらない土器群と共に土器の型式を確認し、その群の帰属時期を検討していく必要がある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、星宮遺跡未報告資料の観察・図化にあたって大仙市教育委員会の星宮聰仁氏にご配慮頂いた。末筆ながら感謝の意を表する。また、文献収集等において以下の方々にご協力頂いた。あわせて感謝の意を表する。

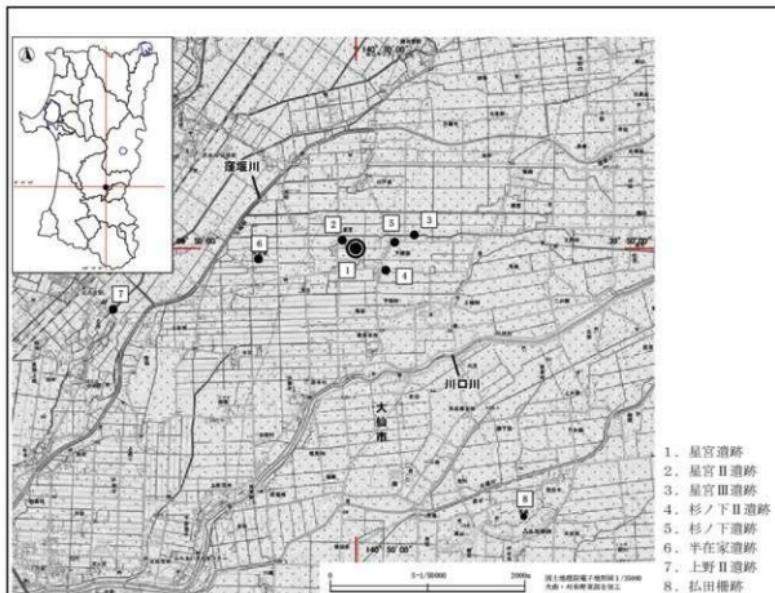
小澤英幸、通野健、根岸洋、安田創（五十音順・敬称略）

註

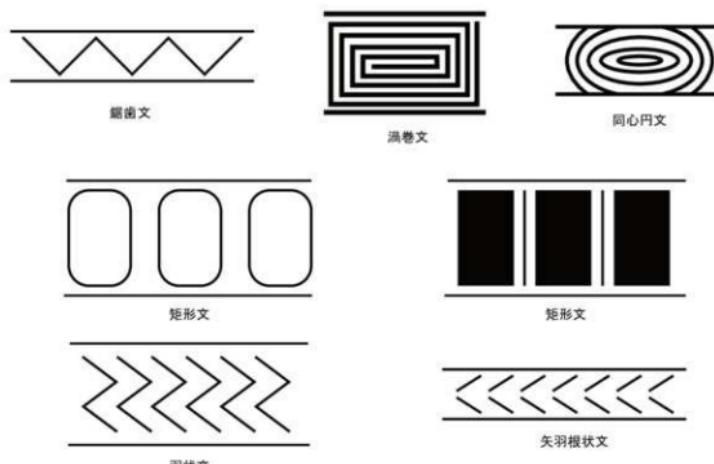
「九年橋形式」とは鈴木が九年橋遺跡出土土器の中で大洞C₂～A式間の型式を特定できない土器群を総称したものである（鈴木 2018）。大洞C₂式から系譜を連續的に追えない網目文、矢羽状文、羽状文、矩形文等が挙げられ、それらの文様が北九州の大洞C₂～A式並行である板付I式や鞍羅木脚心に見られることから、九州や西日本との交流によって「九年橋形式」が形成されたと考えられている。

参考文献

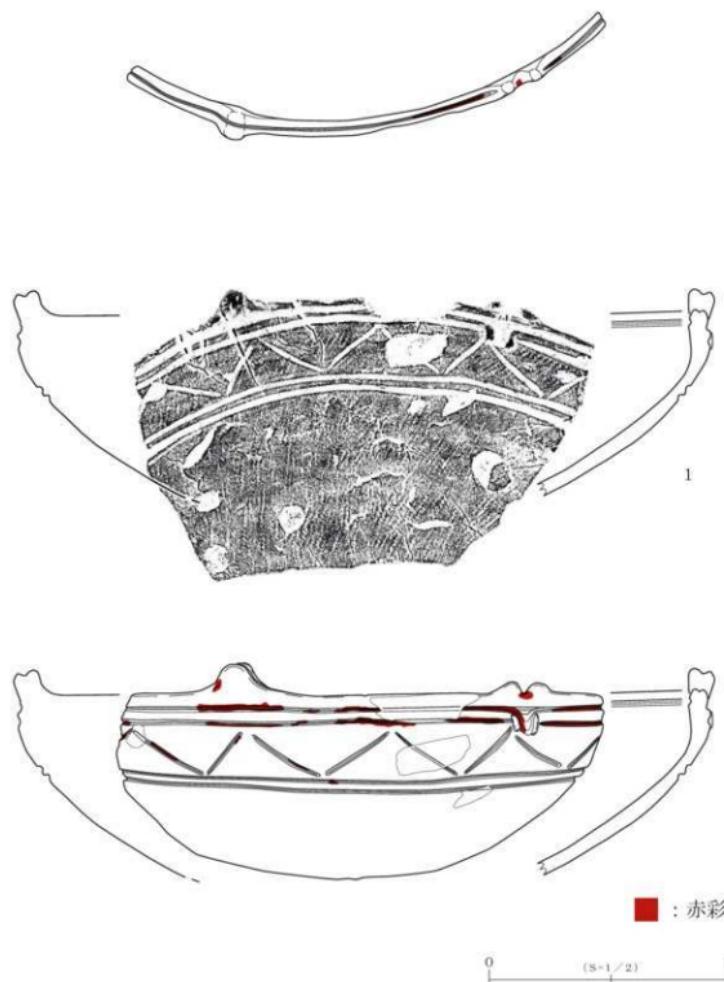
- 伊東信雄・須藤隆編 1985『山王団遺跡調査記録』一迫町教育委員会
郡山市教育委員会 1988『龍ノ口遺跡－中山地区土地改良共同施行事業関連発掘調査報告書』2
設楽博己 2014『縄文社会と弥生社会－日本歴史－私の最新講義』歌文舎
鈴木克彦 2018『縄文晚期・変革期の亀ヶ岡文化における遠隔交流の意義』鈴木克彦編『亀ヶ岡文化』論の再構築』季刊考古学 別冊 25 雄山閣
鈴木克彦 2019「九年橋遺跡の九年橋形式（資料編）」『玉文化』第16号 日本玉文化研究会
仙北町教育委員会 1992『星宮遺跡範囲確認調査報告書』
仙北町教育委員会 1999『星宮遺跡－県営横堀地区担当手賀成基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』仙北町文化財調査報告書 第3集
高橋龍三郎 1993『大洞C₂式土器細分のための諸課題』『先史考古学研究』第4号
大仙市教育委員会 2015『上野II遺跡－北大曲変電所昇圧工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』大仙市文化財調査報告書第21集
新潟県教育委員会 2004『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集
藤村東男編 1977『九年橋遺跡第3次調査報告書』北上市教育委員会
藤村東男編 1991『九年橋遺跡第10次調査報告書（補遺）』北上市教育委員会



第1図 主な周辺遺跡位置

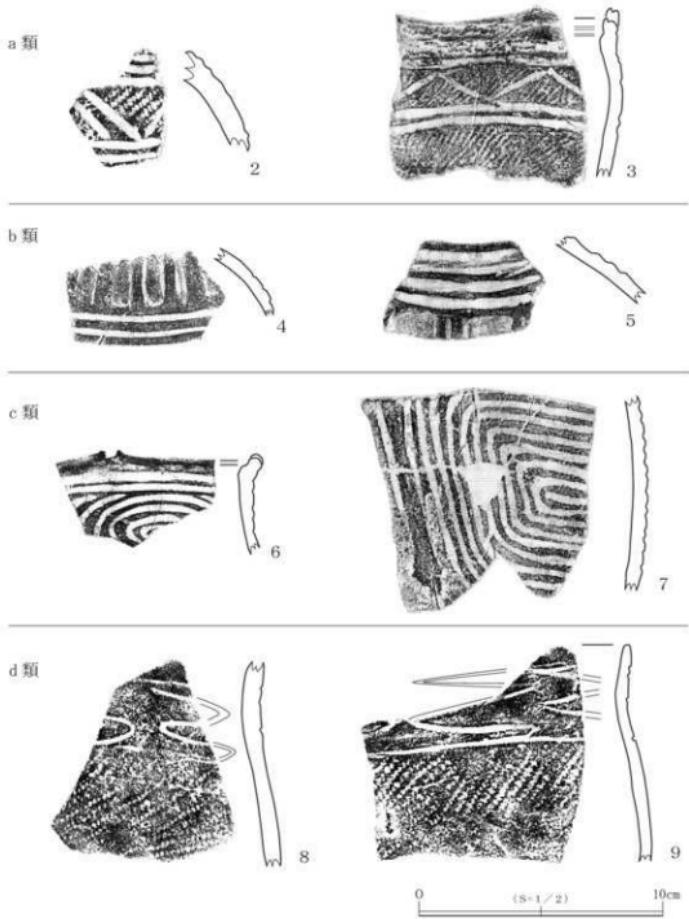


第2図 文様模式図



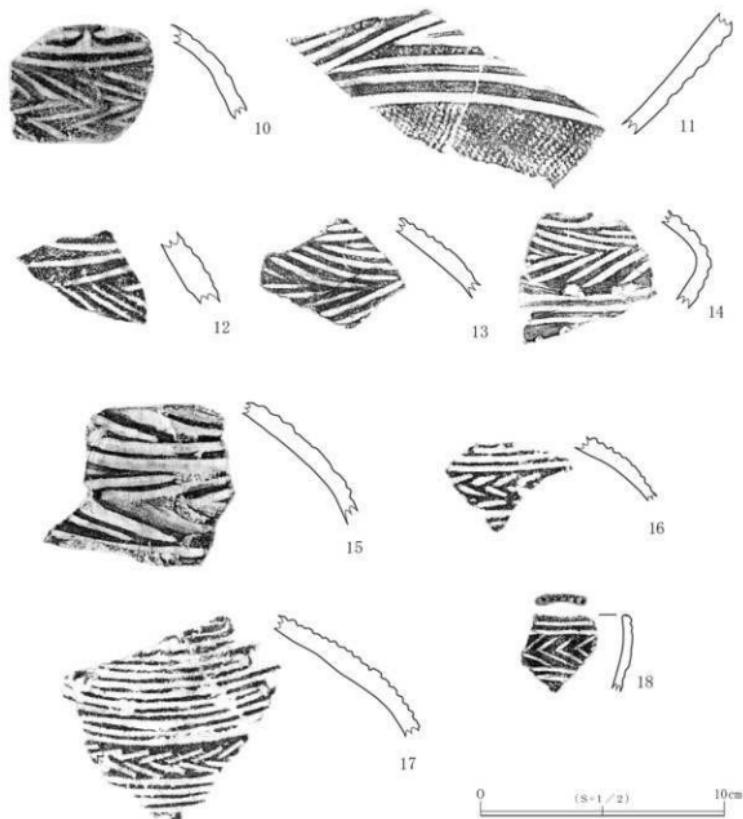
No.	類型	式式	施錆分析(所見)	外面(地火、錆色、など)	内面(施錆など)	色調	備考
1	*	大深A式	浅鉢形、口縁部～側部	1.川口コートナマード、口唇部二箇所～対突起間への注錆、 2.やや暗く深い色の注錆、注錆内多部	ナド、ミガキ、水平波線	10YR8/1褐色灰色	外面に灰ハゼ

第3図 a 類土器



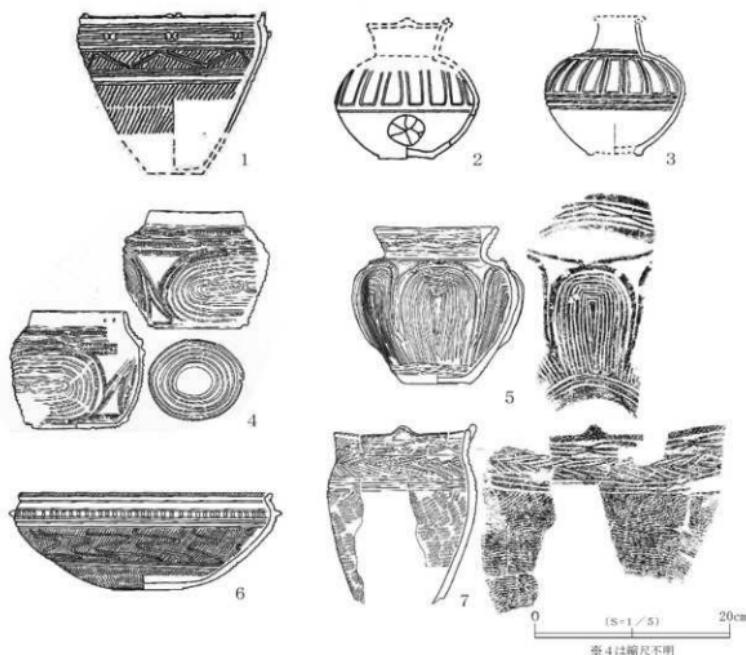
No.	種類	名前	質地(火候・焼成)	外観(形状など)	内面(断面など)	色調	備考
1. a	大田山式	釉利ツ・横縞	火用瓦、火用の火候	火用瓦、火用の火候	ナラ	1079E/4C-1-2火用褐色	
2. a	大田山式	釉利・口横縞	火用瓦、火用の火候	火用瓦、火用の火候、口横縞への过渡	ナラ、木平灰鏡	1079E/4C-2-1火用褐色	口浅削り面にコケ付着
4. b	大田山式	釉利・横縞	火や火用の火候	火や火用の火候	ナラ	1079E/2次白色	内面スミ、砂質斑点
5. b	大田山式	釉利・横縞	火や火用の火候	火や火用の火候	ナラ	1079E/2次白色	内面スミ
6. c	大田山式	釉利ツ・口横縞	火や火用の火候、弓矢	火や火用の火候、弓矢	カガホ	1079E/2次黄褐色	
7. c	大田山式	釉利・横縞	火や火用の火候	火や火用の火候	ナラ	2.3Y黄褐色	砂質斑点
8. d	大田山-1式	釉利・口横縞	火用瓦、火用の火候	火用瓦、火用の火候	ナラ	1079E/4C-2火用褐色	
9. d	大田山-1式	釉利ツ・口横縞	火用瓦、火用の火候	火用瓦、火用の火候	ナラ	2.3Y-2次白色	内面スミ

第4図 a類、b類、c類、d類土器



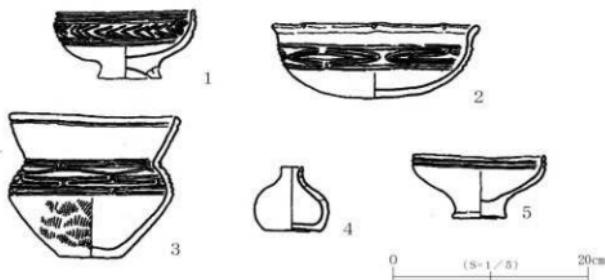
No.	類型	形式	縞様分類・斑紋	片面(地文、質地、斑紋など)	内面(質感など)	色調	備考
10	d	大筒人式	縞和・萬字	太く浅めの波線	ナゲ	7.5YR 4/4-5/5-7/7-褐色	内部が褐色に少し一部白色化。 一般外見: 丸太
11	d	大筒人式	縞和・萬字	太く浅めの波線	ナゲ	10YR 4/4-5/5-7/7-褐色	内面に少々苔
12	d	大筒人式	縞和・萬字?	太く深めの波線	ナゲ	10YR 4/4-5/5-7/7-褐色	表面無光
13	d	大筒人式	縞和・萬字?	太く深めの波線	ナゲ	10YR 4/4-5/5-7/7-褐色	表面無光
14	d	大筒人式	縞和・萬字~萬字	太く深めの波線	ナゲ	2.5YH 1/1-褐色	表面に少々苔
15	d	大筒人式	縞和・萬字	太く浅めの波線、支矢孔	ナゲ	2.5YH 1/1-褐色	中央部分に少々苔
16	d	大筒人式	縞和・萬字	太く浅めの波線	ナゲ	2.5YH 1/1-褐色	表面無光
17	d	大筒人式	縞和・萬字	細く深めの波線	ナゲ	2.5YH 1/1-褐色	表面無光
18	d	大筒人式	縞和?	萬字?、口部斜へ点状、やや細く深い波線	ナゲ	2.5YH 1/1-褐色	内部丸太
19	d	大筒人式	縞和?	萬字?、口部斜へ点状	ナゲ	2.5YH 1/1-褐色	内部丸太

第5図 d類土器



第6図 類例土器（1～3・6：九年橋遺跡、4：山王廻遺跡、5・7：青田遺跡）

（1：鈴木 2019、2・6：藤村編 1977、3：藤村編 1991、4：伊東・須藤 1985、
5・7：新潟県教育委員会 2004）



第7図 滝ノ口遺跡 SI01 出土土器（郡山市教育委員会 1988 を改変）

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第35号

発行年月 令和3年3月

発行機関 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187)69-3331

FAX (0187)69-3330

URL <http://www.pref.akita.jp/gakusyu/>

maibun_hp/index2.htm

E-mail maibun@pref.akita.lg.jp

印 刷 株式会社三森印刷

